

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成10年度 —

西庄遺跡発掘調査
神前遺跡第3次調査

2000

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山県の県庁所在地である和歌山市は、和歌山県の北西、紀ノ川の河口部に位置しています。紀伊山地に源を発し、西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、河口部に肥沃な和歌山平野を形成しました。

和歌山市は、この平野部を主たる市域としており、古代より文化の栄えた場所であります。そのため、市内には全国的にも著名な岩橋千塚古墳群や大谷古墳をはじめとし、およそ400ヶ所にもものぼる遺跡が確認されています。

近年、市域においても宅地造成等に伴う開発が増加してきています。それらの開発に対処するために、平成7年度から国庫補助金・県費補助金を得て、和歌山市内に存在する遺跡の緊急発掘調査を行ってまいりました。

本書には、平成10年度に実施した西庄遺跡と神前遺跡の発掘調査で得られた貴重な成果を収めています。ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係者各位の皆様に深く感謝いたします。

平成12年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎

例 言

- 1 本書は、平成10年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は300万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
西庄遺跡発掘調査	和歌山市西庄559-23番地	平成10年4月15日～平成10年4月27日	45m ²	井馬好英 高橋方紀
神前遺跡第3次調査	和歌山市神前598番地他	平成11年1月25日～平成11年2月19日	70m ²	井馬好英

- 4 発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化振興課長 久保 隆司
文化財班長 小松 埴甫
学芸員 前田 敬彦
学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 北氏 武
総務課長 川寄 健治
事務員 奥野 勝啓(調査庶務担当)
学芸員 井馬 好英(発掘調査担当)
学芸員 高橋 方紀(“)

- 5 報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化振興課長 久保 隆司
文化財班長 小原 保誠
学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 伊藤 明
事務局長 藤田 光彦
総務課長 川寄 健治
主 事 西山 佳宏(庶務担当)
学芸員 北野 隆亮(報告書担当)
学芸員 井馬 好英(“)
学芸員 高橋 方紀(“)
学芸員 川口 修実(“)

- 6 本書のうち発掘調査の概要部分については井馬好英はじめ財団法人和歌山市文化体育振興事業団学芸員が担当し、本書の構成については益田雅司が行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

西庄遺跡発掘調査

1.調査の契機と経過	(高橋方紀)	1
2.位置と環境	(")	2
3.調査の方法と経過	(")	4
(1)調査の方法		4
(2)調査の概要		5
4.遺構	(")	5
5.遺物	(")	6
(1)第3b層出土土器		6
(2)第3a層出土土器		7
(3)その他の製塩土器		9
(4)土錘		9
(5)石器		9
(6)石製品		11
6.まとめ	(")	11
(1)集落内における調査地周辺の位置付けについて		11
(2)第3b層出土の滑石製子持勾玉について		12

神前遺跡第3次調査

1.調査の契機と経過	(井馬好英)	13
2.位置と環境	(川口修実)	14
3.既往の調査	(北野隆亮)	16
4.調査の方法と経過	(井馬)	18
(1)調査の方法		18
(2)調査の概要		18
5.遺構	(")	20
(1)A区の遺構		20
(2)B区の遺構		23
(3)C区の遺構		23
6.遺物	(川口)	25
(1)弥生時代の土器		25
(2)鎌倉・室町・江戸時代の土器		26
(3)鎌倉・室町時代の瓦		29
(4)江戸時代の瓦		31
(5)石器・石製品・石造物		32
(6)金属製品		34
7.まとめ	(井馬)	34
(1)神前遺跡の範囲確認調査成果		34
(2)A区検出の弥生時代水田について		35
報告書抄録		36

図版目次

図版 1	西庄遺跡遺構	調査前の状況(南から)、全景(北から)
図版 2	西庄遺跡遺構	子持勾玉出土状況(西から)、調査地土層堆積状況(北から)
図版 3	西庄遺跡遺物	第3b層出土土器
図版 4	西庄遺跡遺物	第3a層出土土器
図版 5	西庄遺跡遺物	製塩土器、土錘
図版 6	西庄遺跡遺物	石器、石製品
図版 7	神前遺跡遺構	調査地周辺(東から)、A区調査前の状況(北東から)
図版 8	神前遺跡遺構	B区近景(北西から)、C区調査前の状況(北から)
図版 9	神前遺跡遺構	A区第1・2遺構面全景(東から)、A区第1・2遺構面全景(西から)
図版10	神前遺跡遺構	A区第3遺構面全景(東から)、A区第3遺構面全景(西から)
図版11	神前遺跡遺構	B区全景(西から)、B区全景(北から)
図版12	神前遺跡遺構	C区全景(北から)、C区全景(南から)
図版13	神前遺跡遺構	A区SK-5・6(南から)、A区P-25・26(東から)
図版14	神前遺跡遺構	A区P-26土層堆積状況(東から)、A区P-26(東から)
図版15	神前遺跡遺構	A区SD-2(南から)、A区SD-2土層堆積状況(南から)
図版16	神前遺跡遺構	A区SD-3(南東から)、A区SD-3土層堆積状況(南東から)
図版17	神前遺跡遺構	A区SX-1(北から)、A区SX-1土層堆積状況(南から)
図版18	神前遺跡遺構	A区SX-2(北西から)、A区SX-2土層堆積状況(南東から)
図版19	神前遺跡遺構	A区北壁土層堆積状況(南から)、B区北壁土層堆積状況(南から)
図版20	神前遺跡遺構	C区SK-3(西から)、C区SK-3石積状況(西から)
図版21	神前遺跡遺構	C区SK-3土層堆積状況(南から)、C区西壁土層堆積状況(東から)
図版22	神前遺跡遺物	弥生土器、A区出土土器
図版23	神前遺跡遺物	C区SK-3出土土器、C区第3層出土土器
図版24	神前遺跡遺物	C区SK-3出土瓦
図版25	神前遺跡遺物	C区SK-3出土瓦、江戸時代の瓦
図版26	神前遺跡遺物	石器、石製品、石造物

西庄遺跡 発掘調査

1. 調査に至る契機と経過

西庄遺跡は、広義の和歌浦湾に面しており、海岸砂州の内側に位置する。遺跡の範囲は東西900m、南北約400mに広がっており、古墳時代を中心とした海浜集落として知られている（第1図）。

本遺跡の調査としては、これまでに財団法人和歌山県文化財センターが県道西脇・山口線の道路拡幅工事に伴う調査を、4次にわたって行っている。中でも調査地北側で行われた第4次調査では、古墳時代の竪穴住居が24棟、古墳時代から奈良時代にかけての石敷の製塩炉が12基、その他中世墓が8基検出された。また竪穴住居内や包含層からは多くの土器や製塩・漁撈関係の遺物が出土しており、西庄遺跡が漁村としての性格を保ちながら大規模に土器製塩を行っていた遺跡であることが判明してきている。

今回の調査は、和歌山市教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得て実施したものである。調査原因は和歌山市西庄559-23番地において個人住宅建築に伴う土砂採取作業が行われることになり、この工事現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である西庄遺跡（遺跡番号38）の範囲内にあたるため、発掘調査が必要となったものである。調査は和歌山市教育委員会から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施した。調査地は遺跡範囲のほぼ中央部に位置する（第1図、図版1上）。



第1図 調査位置図

2.位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接している地域である。

奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。古代においては、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されており、このために紀ノ川は狐島付近で大きく屈曲して和歌浦に注いでいたとされている。今回調査を行った西庄遺跡は、この海岸砂州上に位置する(第2図)。

周囲の遺跡を概観すると、旧石器時代では調査地の北東1kmに位置する西庄Ⅱ遺跡(19)やその東方の鳴滝遺跡、園部遺跡からナイフ形石器が採集されている。

縄文時代の遺跡としては、六十谷遺跡、直川遺跡から縄文土器が採集されていることが知られている。また加太周辺や友ヶ島の遺跡では縄文時代前期から後期の土器片が採集されており、この地域の海岸部において、すでに人々が生活していたことを示している。

弥生時代に入り紀ノ川の堆積作用による陸化が進むと、平野部に大規模な集落が営まれるようになる。紀ノ川南岸では県内最大級の集落遺跡である太田・黒田遺跡が前期から営まれ、竪穴住居や土壇墓、井戸、溝等の遺構や、銅鐸、多量の弥生土器などが検出されている。紀ノ川北岸では宇田森遺跡や六十谷遺跡等が集落遺跡として存在する。また橘谷遺跡は標高90mの山塊上に位置しており、後期初頭に営まれた高地性集落として知られている。加太周辺では、前期から中期の遺跡は少ないが、後期になると大谷川遺跡(2)を始めとして遺跡数が増加する。各遺跡からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器や製塩土器が多く出土しており、このころから製塩を営んだ漁村集落が多く展開するようになると思われる。

古墳時代になると、4世紀後半頃から西庄遺跡(1)が営まれるようになる。当遺跡ではこれまでに多くの竪穴住居や製塩炉が検出されているが、5世紀後半から6世紀初めにかけての遺構が最も多く、このころが最盛期であったとみられる。出土遺物には須恵器、土師器、製塩土器の他、鉄製釣り針、鹿角製の釣り針やヤス、土錘などの漁撈具、勾玉や子持勾玉等の祭祀関連遺物、また多くの魚介類の骨や殻もみられ、西庄遺跡が漁村としての性格を保ちながら、大規模に土器製塩を行っていた遺跡であることが最近の調査によって明らかになってきている。平野部の集落としては、吉田遺跡や北田井遺跡、西田井遺跡が弥生時代に引き続き営まれる。また、和泉山脈から伸びた丘陵上には府中Ⅳ遺跡や鳴滝遺跡が存在する。府中Ⅳ遺跡では、一辺8.6mを測る方形竪穴住居を始め、多くの住居が検出されており、鳴滝遺跡では倉庫群と考えられる古墳時代中期の掘立柱建物が7棟検出されている。周辺の古墳としては北西約700mの丘陵部に位置する磯ノ浦古墳群(13~16)、北東約2.5kmの沖積段丘上に位置する釜山古墳群(茶臼山古墳(33)、車駕之古址古墳(34)、釜山古墳(35))などがあるが、紀ノ川北岸では六十谷古墳群や晒山古墳群のように和泉山脈から南に伸びた尾根上に存在するものが多い。

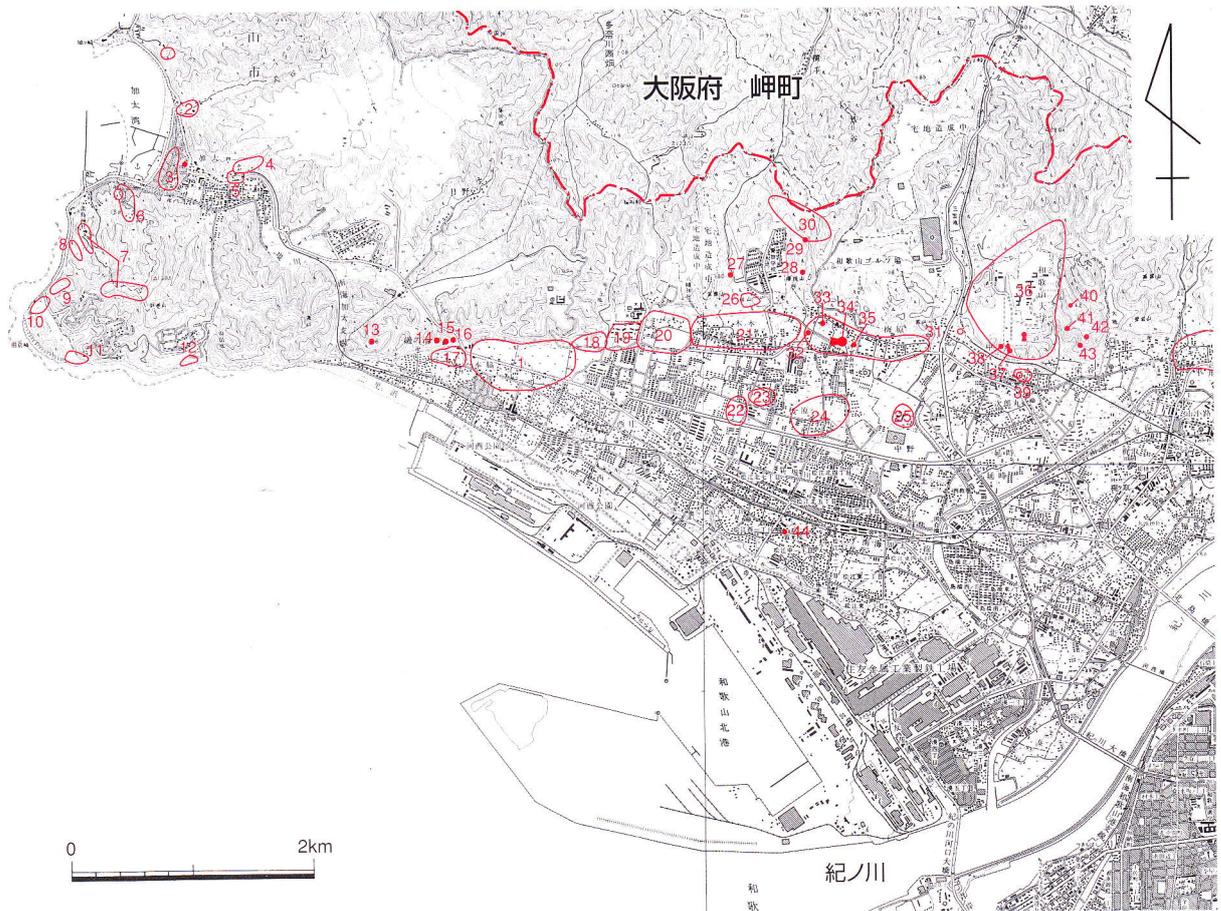
奈良時代には古墳時代から引き続き営まれる吉田遺跡などの集落の他、寺院が建立されるようになる。なかでも国史跡である上野廃寺は発掘調査によって、薬師寺式の伽藍配置をもつことが明らか

かにされている。また平城京からは、海部郡可太郷（加太）の塩が調として都に納められたことを示す木簡が出土しており、海岸地域では引き続き製塩が行われていたことを示している。しかし数世紀にわたって行われた土器製塩も平安時代になるころには終わりを迎えたとみられ、その後製塩の方法は揚げ浜塩田や鉄釜製塩に移行していったものと考えられる。

【参考文献】

和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』考古資料 和歌山県 1983年

和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西庄遺跡	古墳～中世	12	浜遺跡		23	木之本小学校Ⅱ遺跡	古墳	34	車駕之古址古墳	古墳
2	大谷川遺跡	縄文～弥生	13	磯の浦1号墳	古墳	24	榎原遺跡	古墳	35	釜山古墳	古墳
3	加太遺跡	縄文～中世	14	磯の浦2号墳	古墳	25	中野遺跡	室町	36	高芝遺跡	
4	加太駅北方遺跡	弥生～奈良	15	磯の浦3号墳	古墳	26	城山遺跡	室町	37	高芝2号墳	古墳
5	加太Ⅱ遺跡	弥生	16	磯の浦4号墳	古墳	27	城山古墳	古墳	38	高芝3号墳	古墳
6	加太南遺跡	古墳	17	磯脇遺跡	中世	28	権現山1号墳	古墳	39	栄谷貝塚	縄文
7	田倉崎砲台跡	明治	18	平の下遺跡	中世	29	権現山2号墳	古墳	40	川原崎遺跡	奈良
8	平の谷遺跡		19	西庄Ⅱ遺跡	旧石器～弥生～近世	30	木之本Ⅳ遺跡	縄文・中世	41	川原崎1号墳	古墳
9	田倉崎Ⅰ遺跡	縄文～	20	木之本Ⅰ遺跡		31	木之本Ⅲ遺跡	古墳・中世	42	川原崎2号墳	古墳
10	田倉崎Ⅱ遺跡		21	木之本Ⅱ遺跡		32	木之本経塚	中世	43	川原崎3号墳	古墳
11	船出遺跡		22	木之本小学校Ⅰ遺跡	古墳	33	茶臼山古墳	古墳	44	松江経塚	近世

第2図 西庄遺跡周辺の遺跡分布図

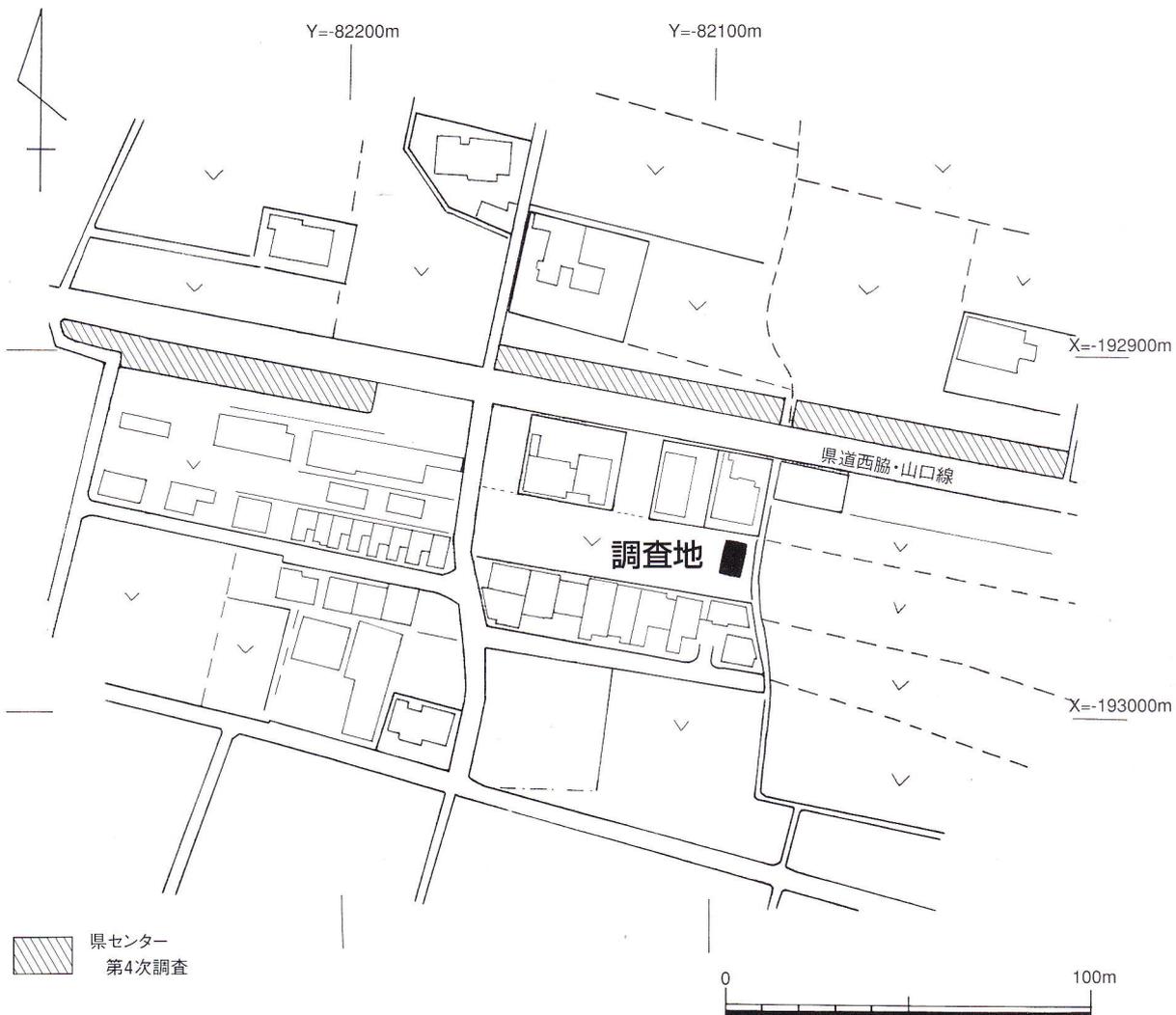
3.調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査は平成10年4月15日から27日にかけて、土砂採取工事範囲内において行ったものである。調査対象地において東西5m、南北9mの約45㎡の調査区を設定したが、北東隅から南壁中央部にかけてのラインより西側は攪乱を受けていたため、実質的な調査は南東部のみとなった(第3図)。

調査の方法としては、掘削は全て人力により行った。また遺物の取り上げ及び平面実測に関しては、国土座標の整数値のラインによって調査区を4分割して行った。なお、第1・2層の一部と第3a・3b層の遺物取り上げには5mmメッシュのふるいを用いた。

記録保存の方法としては、調査範囲内の平面実測図及び壁面土層断面図を縮尺1/20で作図し、遺跡の水準は国家水準点(T.P.値)を基準とした。また調査地周辺図の作成には、遺跡調査汎用システムカタタを用いた。なお土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

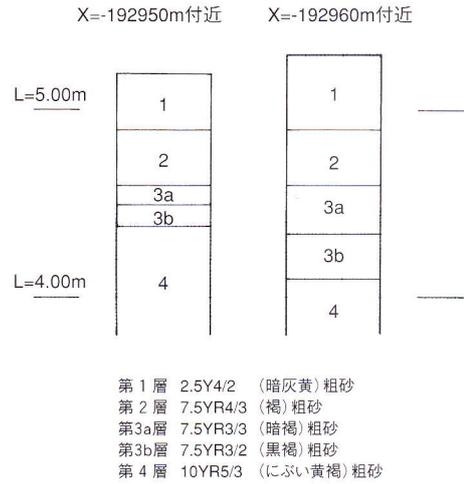


第3図 調査地周辺図

(2) 調査の概要

調査地の現状は畑地であり、地表面の標高は5.2～5.3mを測る。基本的な土層堆積状況としては、まず現地表面である現代の耕作土(第1層)が約45cmの厚さで堆積する。その下の堆積としては第2層(7.5YR4/3(褐)粗砂)が約25cm、第3a層(7.5YR3/3(暗褐)粗砂)が30cm、第3b層(7.5YR3/2(黒褐)粗砂)が約20cmの厚さで堆積する(第4図、図版2下)。

第2層は鎌倉時代の遺物包含層である。さらに下層の第3a層は古墳時代から奈良時代、第3b層は古墳時代後期の遺物を多く包含しており、この第3層掘削後の第4層上面において古墳時代の遺構を検出した。また第4層は無遺物層であり、土層の観察から第3b層、第4層が南側に傾斜を持って堆積することを確認した。



第4図 調査地土層柱状模式図

4. 遺 構

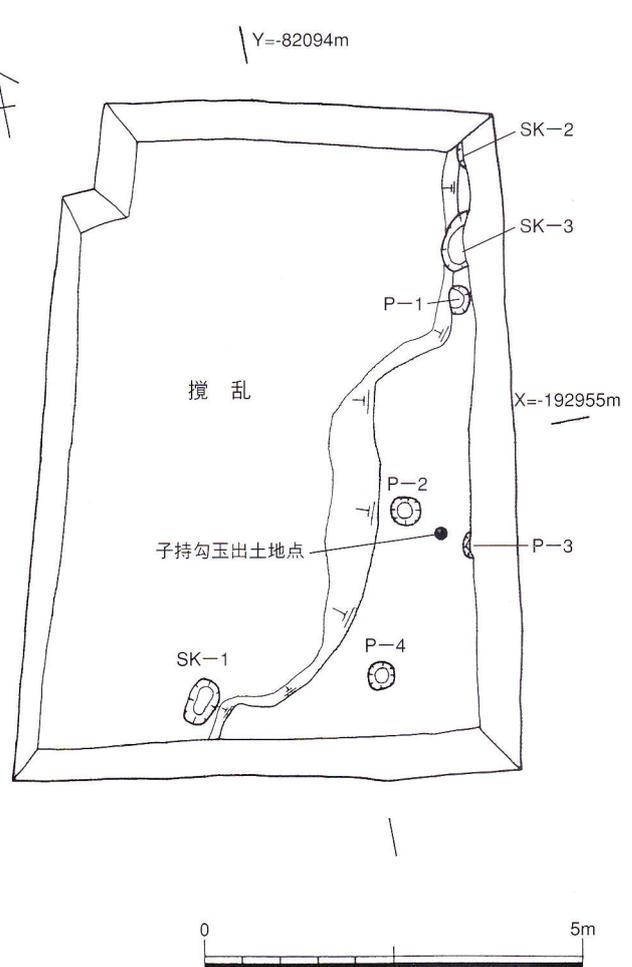
遺構は第4層上面において検出した土坑3基、ピット4基である。遺構出土の遺物は希薄であったが、包含層の時期から考えて古墳時代後期のものと考えられる。遺構面の標高は4.2～4.4mを測る。以下にその概要を説明する(第5図、図版1下)。

[SK-1～3]

SK-1は調査区南端中央部、SK-2・3は北東隅において検出した。SK-1は現状で南北60cm、東西40cm、深さ40cm、SK-3は南北80cm以上、深さ20cmの規模を測る。SK-1からは陶器片が、SK-3からは丸底Ⅰ式の製塩土器が多く出土している。以上の遺構は平面プランから土坑としたが、柱穴の可能性も考えられる。

[P-1～4]

調査区の東側において検出した。ピットの直径は平均約40cm、深さは約30cmの規模を測る。遺構埋土からは土師器と製塩土器が少量出土している。



第5図 遺構全体平面図

5.遺物

遺物は遺物包含層を中心に須恵器、土師器、製塩土器、瓦器、土錘、石器、石製品等が出土しており、また、その他の遺物としてファイゴ、炭、軽石、貝類、魚介類、また鹿や猪とみられる獣骨や馬の歯もみられる。時期としては古墳時代後期から奈良時代のものが多くみられ、その量はコンテナに約10箱を数える。遺構に伴う遺物は細片が多く凶化できなかったが、陶邑編年TK209型式の須恵器や丸底Ⅰ式の製塩土器などが出土している。

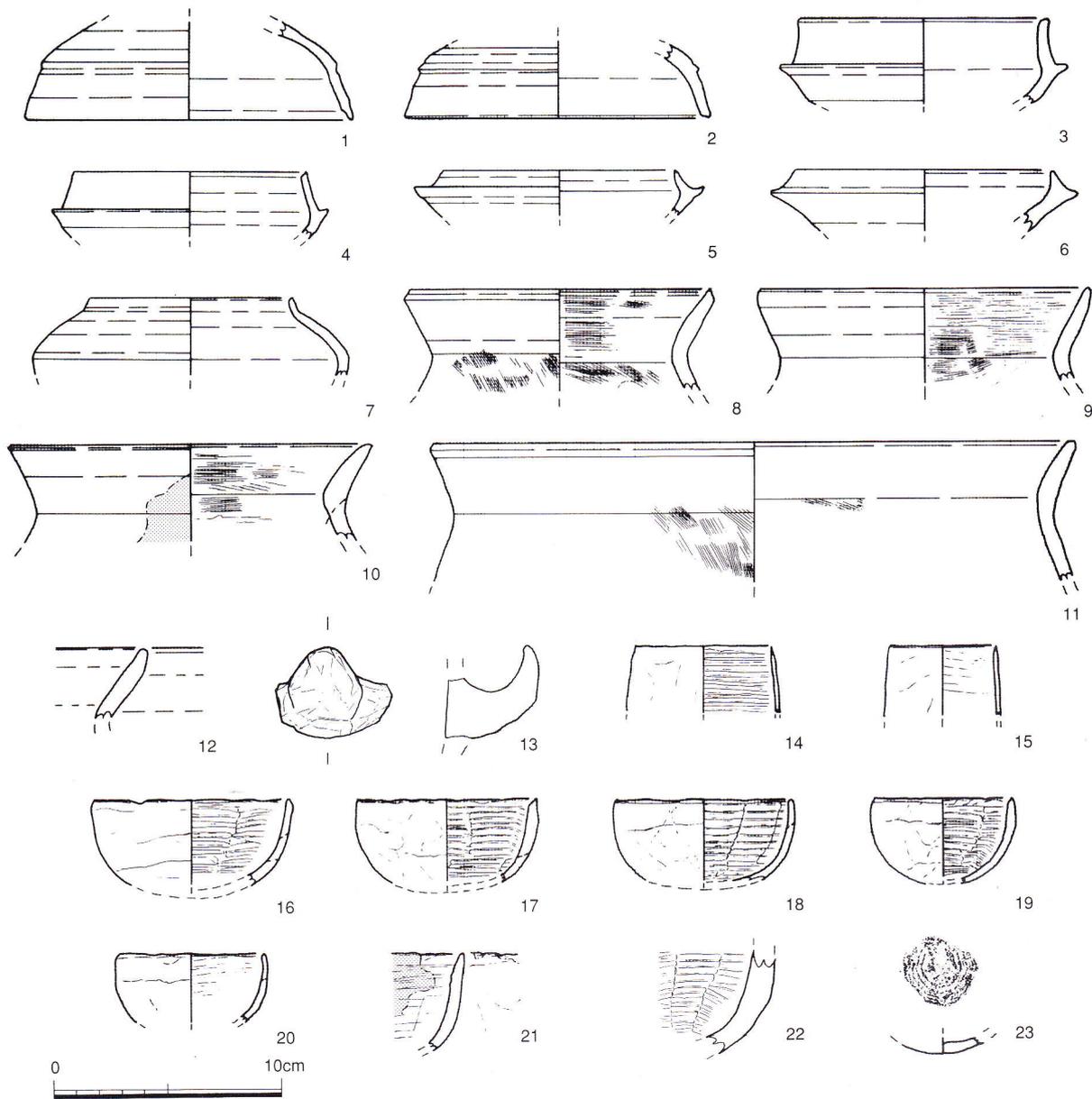
以下主要な遺物についてまず、土器を出土層位ごとに記述し、次に土錘、石器、石製品の順に項目を立て説明する。

(1) 第3b層出土土器 (第6図、図版3)

1～7は須恵器である。1・2は天井部と口縁部の境界に稜がみられる杯蓋で、口縁端部内面には段をもつものである。口径はそれぞれ14.2cm、13.2cmを測り、1は稜線近くまでヘラケズリを施す。3～6は杯身である。3・4は口縁端部に面をもつもので、ヘラケズリの範囲は底部約2/3である。5・6は口縁端部に面をもたないものである。6は全体的に肉厚な作りで、受け部先端から口縁端部にかけてなだらかに立ち上がる。口径はそれぞれ10.9cm、10.2cm、10.1cm、11.0cmを測る。7は短頸壺で、口径8.8cm、胴部径13.8cmを測る。内外面とも回転ナデによる調整であるが、外面体部以下にはヘラケズリがみられる。以上の須恵器の内、1～4は陶邑編年MT15型式、5～7はTK209型式に比定できる。

8～13は土師器で、甕(8～12)、把手(13)がある。8は口縁外端面に面をもつもので、口径13.1cmを測る。体部外面にはナナメ方向のハケ調整、内面は頸部上位にはヨコ方向、下位にはナナメ方向のハケ調整が施される。9・10は口縁端部を丸くおさめるもので、9はやや内彎、10は肥厚気味に外反して立ち上がるものである。口径はそれぞれ14.2cm、15.8cmを測る。共に外面はヨコ方向のナデ調整、内面はヨコ方向のハケ調整が施される。11は口径27.8cmと大型のもので、体部の内外面ともにナナメ方向のハケ調整がみられる。12は口縁部の破片であるが、内面には塩の結晶が付着していることから、土器製塩に用いた甕と考えられる。13は塙の把手とみられ、痕跡から差込により接合されたものと思われる。

14～23は製塩土器である。14・15は載頭卵形を呈するタイプで、口径はそれぞれ6.6cm、4.2cmを測る。14の内面には貝殻条痕が観察できるが、15は貝殻腹縁による調整痕をナデ消している。16～21は半球形を呈するものである。成形は粘土紐の巻き上げであり、外面には右上がりの接合痕が観察できる。いずれも外面には掌文、内面には貝殻条痕が残るもので、貝殻腹縁による調整順序は下から上、右から左方向である。また、口縁端部は上方につまみ上げて調整している。16～19の口径はそれぞれ8.6cm、7.8cm、7.6cm、6.0cmである。20は内面の貝殻条痕をナデ消すもので、口径6.3cmを測る。21は内面に塩の結晶が付着するもので、色調は淡赤褐色を呈している。22は他と比べて器壁が1.0cm前後と厚手のものである。外面には指頭圧痕、内面には貝殻条痕がみられる。23は底部片で半球形タイプに相当するものとみられる。



第6図 遺物実測図1

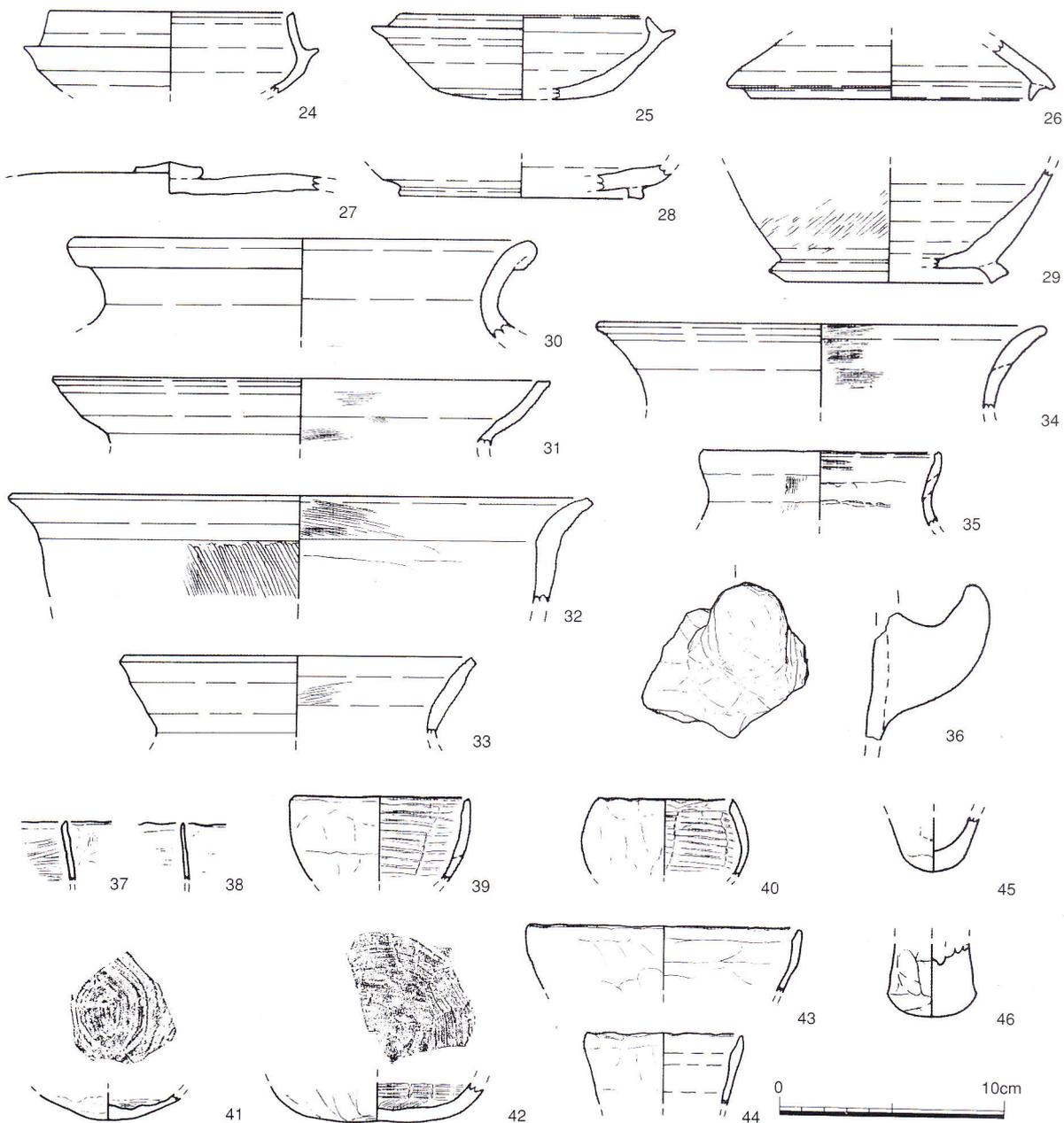
(2) 第3a層出土土器 (第7図、図版4)

24~30は須恵器で、杯身(24・25・28)、杯蓋(26・27)、壺(29)、甕(30)がある。24は口径10.8cmを測るもので、口縁部はやや内傾して立ち上がり端部に面をもつ。25は口径11.0cm、器高3.8cmで、ヘラケズリの範囲は底部の約1/3である。26は宝珠形つまみをもつと思われる杯蓋で、口径は12.4cmを測る。かえりの部分は貼付によるものである。28は高台をもつ杯で、底径は10.6cmを測る。29は壺の底部で、底径は9.2cmを測る。外面にはタタキによる成形の後ナデによる調整、内面には回転ナデによる調整が施される。30は甕の口縁部で、口径20.2cmを測る。口縁部は外面に折り返しており、端部は丸くおさめている。以上の土器の内、24はMT15型式、25はTK209型式、26はTK217型式新段階に併行するもので、29・30は7世紀代、27・28は8世紀代の所産と考えられる。

31~36は土師器である。31~35は甕で、主に外面にはヨコ方向のナデ調整、内面にはヨコ方向の

ハケ調整が施される。31は内側に屈曲して立ち上がり、端面は上方に向かって面をもつ。32・33は口縁端部に面をもつものである。32は外面に粗いナメハケを施すもので、口径が大きく体部の張りが小さい。34は外反して立ち上がる口縁部をもつもので、端部は丸くおさめている。35は小型のもので外面はタテ方向、内面はヨコ方向のハケ調整を施した後に指ナデによってこれを消している。内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。胎土には長石、石英の他、雲母がみられることから搬入品とみられる。口径は31から22.0cm、25.4cm、15.4cm、20.0cm、10.4cmを測る。36は塙の把手であり、体部からの高さは4.5cmを測る。

37～46は製塩土器である。37・38は載頭卵形タイプの口縁部である。外面には掌文、内面には貝殻条痕がみられるが、38は貝殻腹縁による調整痕をナデ消すものである。39・40は半球形のタイプであるが、40は口縁部が内傾し碗形を呈している。41・42は丸底の底部で内面は貝殻腹縁で調整さ

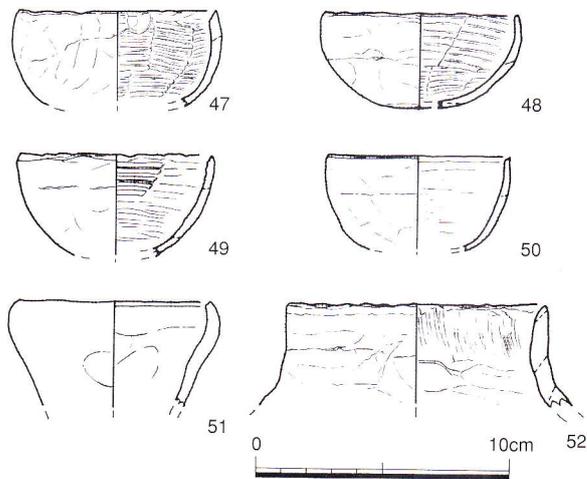


第7図 遺物実測図2

れる。43・44は深鉢形と思われるもので、内外面にはナデや指頭圧痕がみられる。口径は43が12.0cm、44が6.8cmを測る。45は尖底状、46は支脚状の底部である。いずれも外面に細かいひび割れが目立つ。46は上方に向かってすぼまる形状を呈しており、底部の厚さは2.5cmを測る。いずれも深鉢形タイプに相当する底部と考えられる。

(3) その他の製塩土器 (第8図、図版5上)

47～50は半球形の製塩土器で、いずれも外面に右上がりの粘土紐巻き上げ痕が残るものである。口径は7.1cm～7.7cmで、復元器高は4.0cm前後である。47は左回りの方向で貝殻腹縁による調整を行っており、内面には口縁端部の調整の際に付着した円形の粘土が観察できる。48は口径7.5cm、器高3.7cmを測る。50は内面の貝殻条痕をナデ消すタイプである。以上の遺物はすべて攪乱内からの出土である。



第8図 遺物実測図3

51は深鉢形の製塩土器で、口径7.6cmを測る。口縁部は内彎しながら立ち上がり、器壁は6mmと

厚い。52は直立する口縁部をもった厚手の製塩土器で、甕形を呈するものと思われる。内面はヨコナデの後、口縁部にタテ方向の貝殻腹縁による調整を施すが、外面は成形時の指頭圧痕や接合痕をそのまま残している。口径は10.0cmを測る。51は第2層、52は攪乱内から出土した。

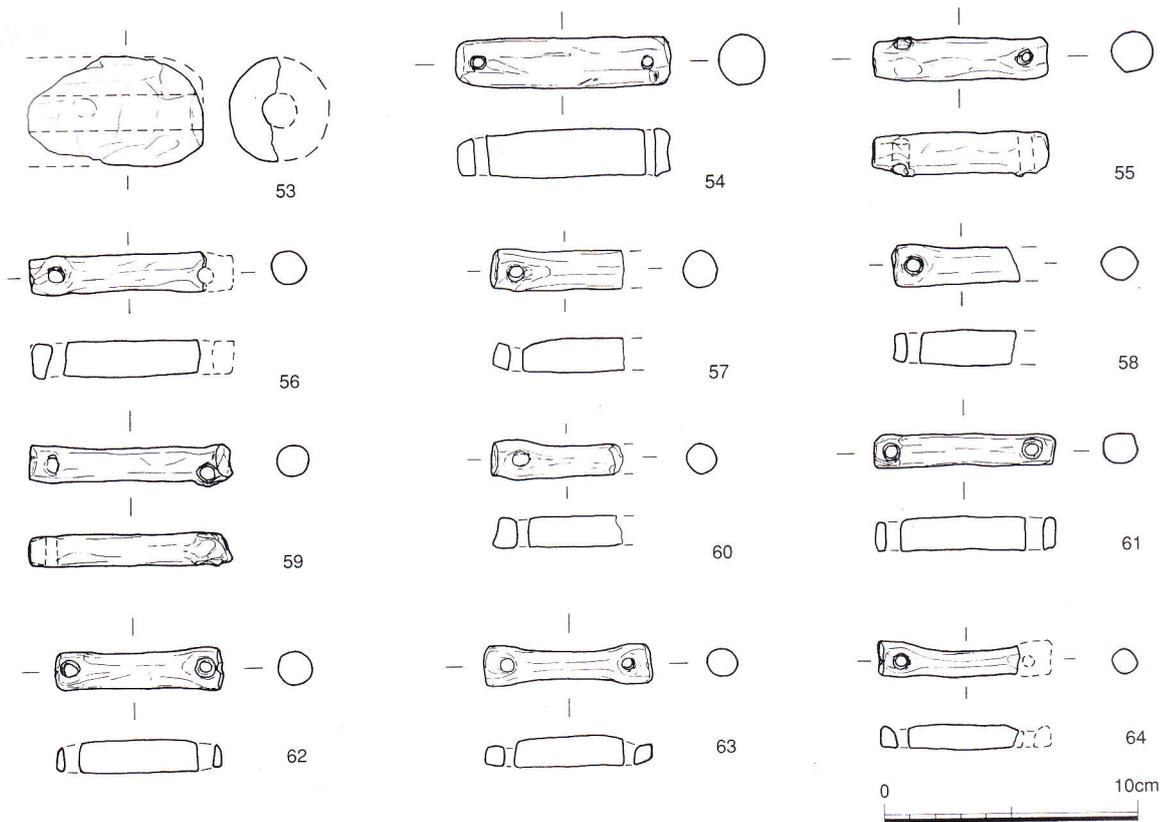
(4) 土錘 (第9図、図版5下)

土錘は第3a・3b層を中心に出土している。出土した土錘の内、管状土錘は1点のみで、有孔土錘の割合が非常に高い。53は管状土錘で直径4.2cm、孔径1.4cmを測るものである。外面には指頭圧痕が観察できる。攪乱内から出土した。

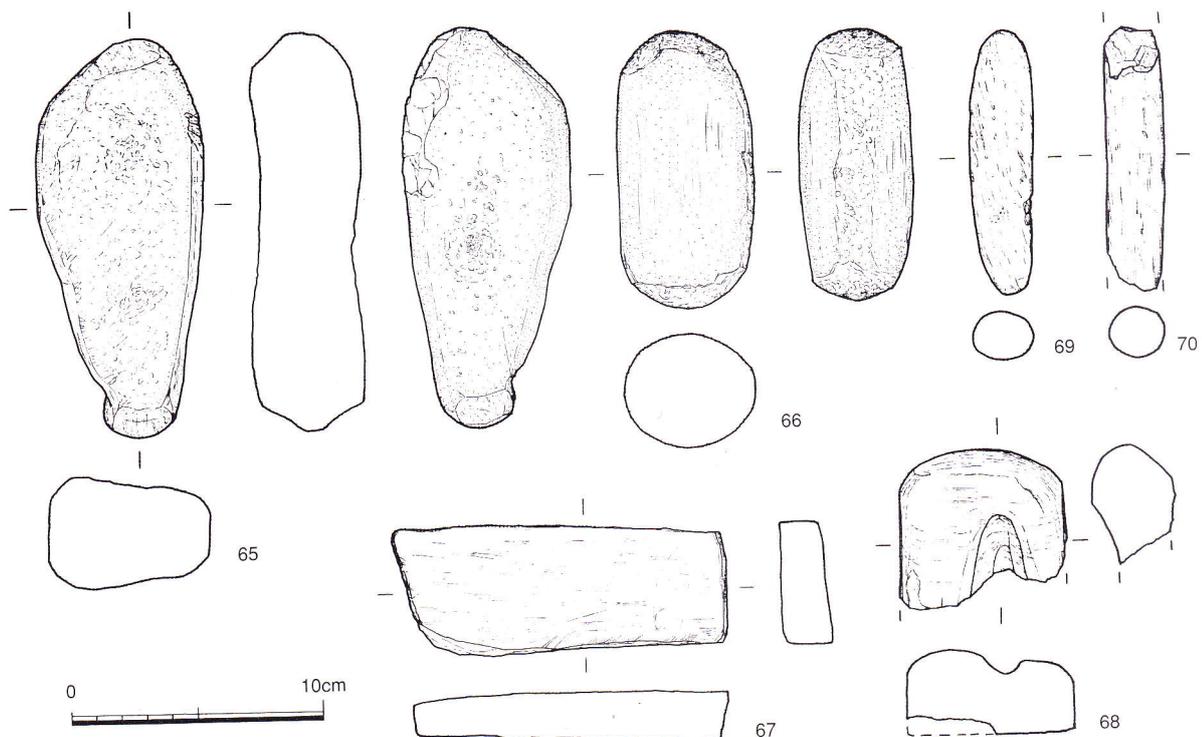
54～64は有孔土錘である。棒状の粘土を適度な大きさに切り分け、両端に穿孔を施して製作されている。そのうち、62～64は両端穿孔部分を扁平にするものである。重量分布から40g前後のもの(54)、20g前後のもの(55～58)、10～15gのもの(59～64)の3タイプに細分できる。長さは7～8cmのものが多く、穿孔径は5～6mmを測る。54～60・62～64は第3a層、53・61は攪乱内から出土した。

(5) 石器 (第10図、図版6上)

石器は叩石、砥石が出土している。65・66は砂岩を用いた叩石である。65は両面を敲打、側面の一部を砥石として用いるもので、また下端部には両面からの使用による磨痕がみられる。長さ15.7cm、最大幅6.6cm、厚さ4.5cmを測り、重量は690gである。66には上下及び側面の3ヶ所に敲打痕や敲打に伴う剝離が認められる。それ以外の部分は平滑になっており、65同様砥石としての機能も合わせもつものである。長さ11.0cm、幅5.3cm、厚さ4.5cmを測り、重量は430gである。65は第3a層、66は第3b層から出土した。



第9図 遺物実測図4



第10図 遺物実測図5

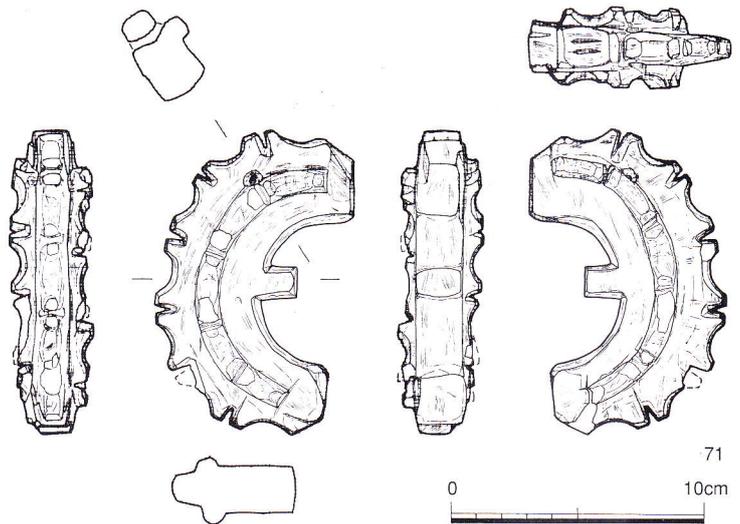
67は長方形を呈する砥石で、石材には砂岩を使用している。使用面は非常に平滑で、光沢を帯びる。長さ13.1cm、幅5.2cm、最大厚2.5cmを測り、重量は250gである。68は中央右寄りに筋状のくぼみがみられるもので、玉砥石と考えられる。使用石材は結晶片岩である。くぼみの幅は2.0cm以上、深さは1.0cmを測り、内部は平滑になっている。上面及び左右側面は研磨により平滑になっているが、これは砥石としての使用よりも全体の形状を整えるための調整によるものと考えられる。底面は自然面のままで、結晶片岩に付随して形成された石英が残る。67は第3b層、68は第3a層から出土した。

(6) 石製品 (第10・11図、図版6)

石製品では棒状石製品、子持勾玉が出土している。69・70は結晶片岩を用いた棒状石製品で、全体を磨いて整形するものである。69の側面には敲打痕がわずかに残るが、その他には使用痕が認められない。69は長さ10.4cm、直径1.9～2.4cmを測り、重量は93.8g、70は直径2.0～2.2cmを測る。69は第3b層、70は第2層から出土した。

71は滑石製の子持勾玉である。出土位置は調査地のほぼ中央東端(第5図、図版2参照)で、第3b層から出土した。

平面形はC字状であり、断面は方形を呈する。色調は暗青灰色である。法量は全長12.0cm、幅7.8cm、最大厚3.2cm、重さ260g、子勾玉の長さは2.2～2.8cm、高さは5～8mmを測る。子勾玉は両側面、背面にそれぞれ5個ずつ、計15個配され、ヘラ状工具により連続して作り出されている。また腹部には、子勾玉の代わりに長さ1.4cmの柱状の突起がみられる。紐穴の穿孔幅は4mmで、両面から穿たれている。



第11図 遺物実測図6

6.まとめ

(1) 集落内における調査地周辺の位置付けについて

西庄遺跡は平成8年度から県道西脇山口線拡幅工事に伴う発掘調査が財団法人和歌山県文化財センターによって行われている。遺跡の東側では竪穴住居、掘立柱建物が、西側では製塩炉や製塩土器が密集して検出されており、東西500m以上、南北300m以上の範囲を持つ古墳時代の海浜集落であることが明らかにされている。遺跡は砂堆上に立地しているが、これまでの調査成果から砂堆の頂部にあたる地域が作業域、やや北へ下った地域が居住域であると推測されている。^(註1)

今回の発掘調査の結果、第4層上面においてピット、土坑を検出した。出土遺物や検出状況から

古墳時代後期のものとみられる。遺物包含層からは須恵器、土師器、製塩土器等の他、火を受けて変色した直径5～10cmの砂岩が出土しているが、作業域にみられるような製塩炉は検出していない。

調査地の周辺では北側約50mの地点において^(註2) 竪穴住居群が、西側約150mの地点において石敷製塩炉が多く検出されており、これらのことを合わせて考えると、今回の調査地は居住域の縁辺部で、作業域との境界付近に相当するものと思われ、また今回検出したピットは建物に伴う柱穴であると推定できる。

(2) 第3b層出土の滑石製子持勾玉について

滑石とは蛇紋岩が熱変成作用により変質した岩石で、周辺地域では、和歌山市東部から那賀郡桃山町にかけての地域が原産地として古くから知られている。滑石は非常に軟質で加工しやすいという特徴をもつため、古墳時代には祭祀遺物や副葬品の石材として多く利用された。県内における滑石製模造品は、これまでに50を越える遺跡から出土している^(註3)。この中で子持勾玉の出土例は、西庄遺跡では財団法人和歌山県文化財センターの調査で出土している^(註4)ほか、鳴滝1号墳の主体部から出土した1点と、秋月遺跡で表面採集された3点の計5点が知られており、今回出土した子持勾玉は、^(註5) 全長12.0cmと既知の例を上回る大きさである。^(註6)

本例は出土した遺物包含層の時期から6世紀代のものと考えられる。このようなC字状に弧を描くタイプは管見による限り類例は確認されていないが、鳴滝1号墳出土の子持勾玉は、断面方形で側面と背面に連続した子勾玉が削り出される点、腹部には柱状の突起がみられる点で同様の系譜を引くものと考えられる。6世紀後半に位置づけられるこの資料は、子勾玉が鱗状に連続して明確な単位を持たず、西庄遺跡例より全体的に簡略化の傾向が窺える。

子持勾玉は子々孫々の繁栄を祈る祭具と考えられたり、沿岸部での出土が多いことから航海の安全を祈ったものともみられている。今回は居住域の縁辺部から出土したことから調査地周辺が祭祀に関連する場であった可能性も考えられる。

西庄遺跡では本例以外にも、勾玉や管玉などの祭祀遺物や紡錘車等多くの滑石製品が出土しており、^(註7) 今後これらも含めて遺跡における祭祀のあり方を考える必要がある。

【註記】

1 富加見泰彦 「西庄遺跡の第4次発掘調査」 『和歌山県文化財センター年報1997』 財団法人和歌山県文化財センター 1997年

2 『西庄遺跡発掘調査現地説明会資料』 財団法人和歌山県文化財センター 1998年

3 前田敬彦 「紀伊における古墳時代の滑石製模造品」 『和歌山県立博物館研究紀要』 第3号 1998年

4 富加見泰彦 「紀伊の土器製塩について—和歌山市西庄遺跡を中心に—」

『シンポジウム製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』 第9回塩の会発表資料 1997年

5 『和歌山県文化財学術調査報告』 第2冊 京都大学文学部考古学研究室編・和歌山県教育委員会 1967年

6 『和歌山市史』 第1巻 和歌山市 1991年

7 註4文献に同じ

神前遺跡 第3次調査

1. 調査の契機と経過

今回の調査は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載され、弥生時代の遺跡として周知されている神前遺跡(遺跡番号307)の遺跡確認のために実施したものである。この遺跡は、近年の調査によって中世から近世の良好な遺構が残されていることが判明した。その一方、遺跡の周辺地域では、近年宅地開発が盛んに行われていて遺跡の実態が不明確になりつつある。よって、今後の開発計画に迅速に対処するため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、調査に至ったものである。この発掘調査は、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の指導のもと委託を受けて実施したものである。

神前遺跡は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川の南岸に所在する。この南岸には東西に連なる岩橋山塊があり、その最も西端である独立山塊の福飯ヶ峯(標高約100m)の西側平野部に位置する。

当遺跡の南側には和歌山市東山東地区の谷部にその源をもつ和田川が西流する。この和田川によって形成された沖積平野のなかの自然堤防上に遺跡が立地する。

周辺の遺跡では、北側に接している弥生時代後期を中心とした井辺遺跡や東側の福飯ヶ峯に約50基の古墳で形成された井辺前山古墳群が所在する。

神前遺跡における調査は、過去に2度行われている。第1次調査は平成8年度に当財団が行ったもので、今回のA—C区のほぼ中間地点において約220㎡の調査であった。この調査では、弥生時代前期の土坑、後期の溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、江戸時代初頭の溝などの良好な遺構を検出している。第2次調査は平成9年度に和歌山市教育委員会が行ったもので、遺跡範囲の西端にあたる部分において約15㎡の調査であった。この調査では、遺物包含層と溝1条を検出しているが、全体的に遺物が希薄であり、正確な時期等の確認はできていない。

今回の調査区の設定は、目的の異なる3ヶ所に重点をおいている。この地点ごとの個別の主目的は以下のとおりである(第4図)。

A区は、神前遺跡の東側範囲外に設定した調査区であり、東方への広がりの確認を目的とした。調査区は東西8m、南北4m、面積32㎡である。

B区は第1次調査地点の北西約50mに位置する独立丘陵の頂上部に設定した調査区であり、この丘陵上の古墳の有無の確認を目的とした。調査区は東西7m、南北3m、面積21㎡である。

C区は第1次調査地点の西約50m、B区の丘陵南裾の末端部に位置する調査区であり、第1次調査地点の成果との関連で、鎌倉時代から江戸時代にかけての屋敷地の西方への展開の確認を目的とした。調査区は東西2m、南北8m、面積16㎡である。

現地調査は、まず平成11年1月25日からB区の作業員による人力掘削を開始し、それに併行してA区の機械掘削を1月28日に行った。またC区の調査は、B区と併行して人力掘削を1月26日から開始した。人力掘削は約1ヶ月の期間を要し、B区的全景写真撮影を1月27日に、A区第1遺構面的全景写真撮影を2月8日に、また第2遺構面的全景写真撮影を2月16日に、C区的全景写真撮影を2月10日にそれぞれ行い、同年2月19日にすべての作業を終了した。

2.位置と環境(第1図)

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。本市は、和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に立地する。今回報告する神前遺跡(1)は、紀ノ川南岸にそびえる岩橋山塊の南西にある独立丘陵(福飯ヶ峯)の南西に位置している。また当遺跡の南側には和田川が西流し、和歌川と合流して和歌浦湾に注いでいる。本遺跡は、和田川によって形成された沖積平野の自然堤防上に立地している。

次に周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡として紀ノ川南岸に鳴神貝塚(21)や吉礼貝塚(32)などが位置している。鳴神貝塚は、近畿地方で最初に発見された貝塚として著名であり、縄文晩期の耳栓が出土した土壙墓や甕棺が検出されている。また多くの縄文時代中期から晩期の土器が出土している他、少量ではあるが弥生時代前期の土器も確認されている。吉礼貝塚からも多くの遺物が出土しているが、特に土器は縄文時代前期前半から後期にわたるものであり、紀ノ川流域における縄文時代の遺跡としては最古のものである。これらの貝塚から出土する貝類は海水系のものが多数見られることから、海岸線が岩橋山塊西側にまで及んでいたことを示している。

弥生時代には紀ノ川の堆積作用による陸化の進行によって、平野部に多くの遺跡が営まれている。太田・黒田遺跡(14)は、前期から中期を中心として営まれた県内最大規模の集落跡であり、竪穴住居や井戸、水田などから多量の弥生土器の他、直柄広鍬や銅鐸などが出土している。本遺跡の所在する岩橋山塊周辺にも和田遺跡(2)、井辺遺跡(9)、津秦遺跡(11)、西吉礼遺跡(33)などの遺跡が知られている。その中で井辺遺跡で検出された弥生時代後期の土器列は、東西2列に並んで確認され、土錘が共伴している。古墳時代前期には古式土師器、片口状木器が出土し、木製の転用井筒を納めた井戸などが検出されている。

古墳時代の集落も弥生時代に引き続き、平野部を中心に立地しており、友田町遺跡(17)、大日山I遺跡(24)、鳴神遺跡群からは多数の竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出されている。和田川左岸に位置する和田岩坪遺跡(4)でも中期の土坑が検出され、土師器小型丸底壺やミニチュア土器などが出土している。また古墳の築造は平野に位置する秋月遺跡(13)において、布留式古段階の土器を共伴した前方後円墳・方墳が築造され、前期末には花山丘陵上に花山古墳群(25)が造営されている。その後中期後半から後期にかけて岩橋山塊には岩橋千塚古墳群(26)が形成され、連続と古墳の造営が続けられた。本遺跡の北東にある福飯ヶ峯にも井辺前山古墳群(8)が築造されたが、その盟主墳である井辺八幡山古墳の造り出し部からは多くの埴輪や装飾付須恵器が出土しており、埴輪の中には力士像や双脚輪状文など特筆される遺物がある。和田川流域にも和田古墳群(5)、竈山神社古墳(6)、坂田地蔵山古墳(7)などが位置している。

歴史時代には、本遺跡の北方2kmの秋月の地に鎮座する日前・国懸宮が、『日本書紀』にその名が見え、その起源説話が記されている。この地域南方一帯は、県内最大規模の条里制地割が良好に残っている地域であり、河南条里と呼称されている。また奈良時代から平安時代の遺物は、鳴神遺跡群において多数出土しており、特に鳴神V遺跡(19)からは陶硯、緑釉陶器、初期貿易陶磁器や土馬などの特記すべき遺物が出土している。



番号	遺跡名	時代									
1	神前遺跡	弥生	16	木込町遺跡	弥生	31	吉礼Ⅲ遺跡	弥生	46	紀三井寺塩田跡	江戸
2	和田遺跡	弥生	17	友田町遺跡	弥生～平安	32	吉礼貝塚	縄文	47	三田古墳群	古墳
3	和田Ⅱ遺跡	弥生	18	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	33	西吉礼遺跡	弥生	49	和歌山城跡	近世
4	和田岩坪遺跡	弥生～古墳	19	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	34	東吉礼遺跡	弥生	49	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
5	和田古墳群	古墳	20	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	35	城ヶ森遺跡	弥生	50	本願寺跡	中世～
6	竈山神社古墳	古墳	21	鳴神貝塚	縄文～弥生	36	菖蒲谷遺跡	弥生～古墳	51	国有本遺跡	弥生～古墳
7	坂田地蔵山古墳	古墳	22	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳	37	千石山遺跡	弥生	52	平井遺跡	弥生～古墳
8	井辺前山古墳群	古墳	23	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳	38	井戸1～3号墳	古墳	53	楠見遺跡	古墳
9	井辺遺跡	弥生	24	太田山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	39	馬場遺跡	弥生	54	大谷古墳	古墳
10	神前Ⅱ遺跡	弥生	25	花山古墳群	古墳	40	境原遺跡	弥生～室町	55	晒山古墳群	古墳
11	津秦遺跡	弥生	26	岩橋千塚古墳群	古墳	41	薬勝寺遺跡	弥生	56	六十谷遺跡	縄文～弥生
12	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良	27	和佐古墳群	古墳	42	曾垣田遺跡	古墳	57	高井遺跡	縄文弥生
13	秋月遺跡	弥生～平安	28	寺内古墳群	古墳	43	城の前1号墳	古墳	58	府中Ⅱ遺跡	古墳
14	太田・黒田遺跡	弥生～奈良	29	山東古墳群	古墳	44	赤津古墳群	古墳	59	田屋遺跡	弥生～古墳
15	太田遺跡	安土桃山	30	吉礼砂羅谷竃跡	古墳～奈良	45	紀三井寺遺跡	弥生	60	西田井古墳	弥生～中世

第1図 神前遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

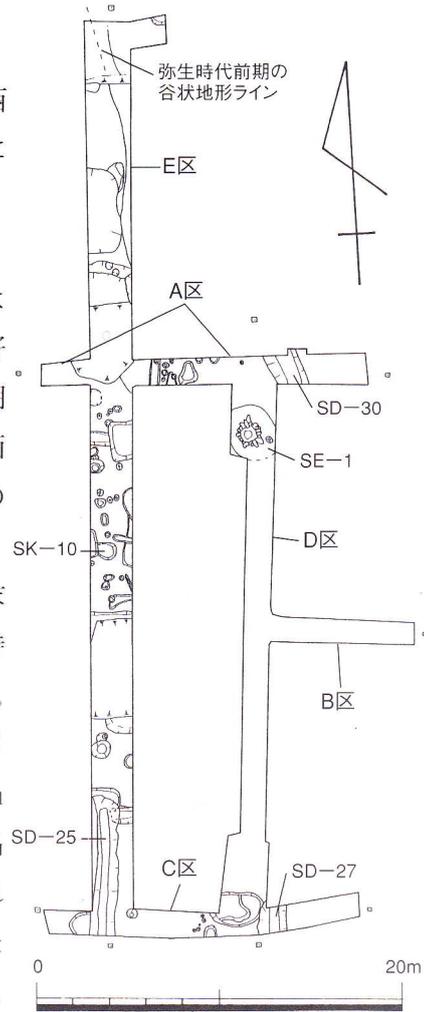
神前遺跡について、既往の調査は遺跡の東側で第1次調査、西側で第2次調査が実施されている(第3図)。以下、調査回数毎に調査内容を記述する。

【第1次調査】(第2図)

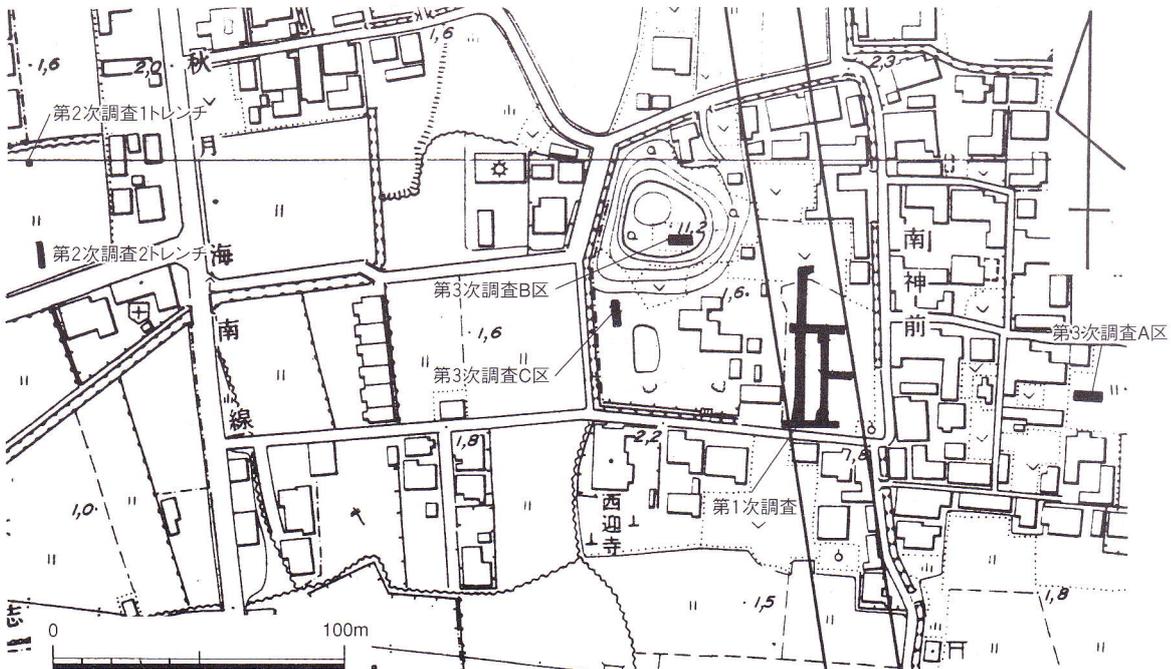
第1次調査は、神前588-2番地において和歌山市教育委員会により行われた試掘調査の結果、調査区において近世を初めとする良好な遺構が確認されたため、本調査として実施したものである。調査期間は平成9年1月14日から2月6日にかけて行ったものであり、面積は220㎡を調査したものである。調査は、対象地にA区からE区の5ヶ所の調査区を設定し、実施した。

調査の結果、2面の遺構面を確認した。上面の遺構は、江戸時代末期から近代にかけてのものであり、下面の遺構は、弥生時代と鎌倉時代から江戸時代初期の遺構である。以下、主要な遺構の説明をする。

弥生時代の遺構は、前期の土坑1基(SK-10)、後期の溝(SD-30)1条を検出した。SK-10は平面形楕円形で最大径1.1m、深さ約10cmを測る。SD-30はA区東側で検出し、幅約1.6m、深さ約0.6m、検出長約2.0mの規模を測るものであり、流路方向は北から東と考えられる。また、弥生時代前期の谷状地形に堆積した層の西端を検出したことによって、この堆積が北東から南東に広がることが明確となった。谷状地形をなしていた調査地の東側は、土層断面の観察から弥生時



第2図 第1次調査遺構全体平面図



第3図 既往の調査位置図

代前期に河川の氾濫によって堆積したものと考えられる。

古墳時代の明確な遺構は検出されなかったが、須恵器や土師器などの遺物は出土している。これらの調査結果からみて、弥生時代から古墳時代の良好な遺構は調査地の西側微高地上に展開し、東側は低湿地であったものと考えられる。

鎌倉時代の遺構は、D区北端部で石組井戸（SE-1）を検出した（写真1・2）。SE-1は結晶片岩の割石を用い、いわゆる小口積みで円形に構築したものである。SE-1の上部内径は約80cm、深さ2.20mの規模を測る。基底部には直径40cm、高さ30cmの底を抜いた曲物桶を井筒として据えている。石積みは基底部の曲物桶を据えた後、曲物の縁部を押さえるように曲物の口径40cmとほぼ同じ直径で積み始められ、約2m積み上がった上部内径が約80cmを測り、積み始めの径のほぼ2倍の規模となっている。SE-1内部からは瓦器・中国製青磁碗・平瓦などが出土した。

室町時代の遺構はSD-27がある。この溝からは備前すり鉢、灰釉折縁皿・胎土目唐津碗などの肥前系陶磁器、中国製染付皿など室町時代末期の遺物が出土した。

江戸時代の遺構としてはSD-25がある。この溝からは備前（壺・すり鉢・徳利・水差し）、丹波（壺・徳利）、信楽壺、瀬戸美濃系天目茶碗・志野（皿・向付）、胎土目唐津皿・砂目唐津皿・絵唐津大皿などの肥前系陶磁器、焼塩壺のほか瓦などが多量に出土した。これらの出土遺物からこの溝は近世初期に埋没したものとみられる。

以上のことから、鎌倉時代から江戸時代にかけての周辺地における有力者等の屋敷地の一角であったものと考えられる。

これまで神前遺跡は弥生時代前期から古墳時代前期の遺物散布地として知られていたが、第1次調査において弥生時代と中世から近世の遺構が確認され、当遺跡は複合遺跡であるということが明確となった。

【第2次調査】

第2次調査は遺跡の推定範囲の西端部分、神前378-1番地他における宅地造成計画に対処するため、和歌山市教育委員会が確認調査を実施したものである。対象地の水田南側と北側に1ヶ所ずつの調査区を設けて、平成9年7月29日から7月31日にかけて面積約15㎡で調査を実施した結果、南側では砂層がベース層となっており、遺構は検出されなかったのに対して、北側調査区においては、砂質土をベースとして、包含層と溝が検出された。

検出した溝の時期については、出土遺物が少なく明確にされてはいないが、包含層の時期から中世のものと考えられている。

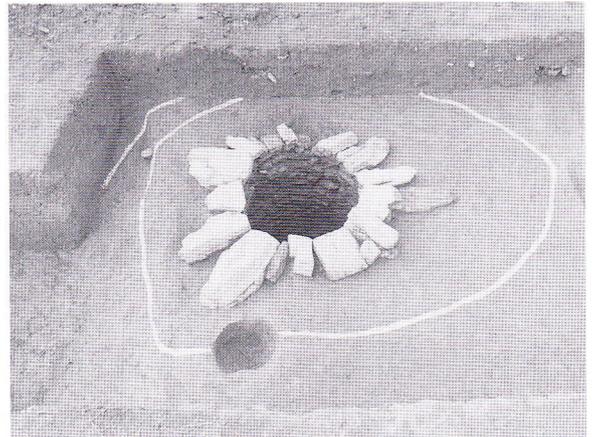


写真1 第1次調査SE-1(東から)



写真2 第1次調査SE-1断割り状況(南から)

4.調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査地の現況は、A区が水田、B区が竹林、C区が民家の中庭に位置する(図版7・8)。この状況から、調査の方法はA区については耕作土(第1層)のみを重機を用いて掘削を行い、第2層以下の遺物包含層と遺構の掘削を人力によって行った。またB・C区はすべての掘削を人力によって行った。各調査区の名称は、従来どおり北東側に位置するものからA区と定め、以下順次に番号を付した(第4図)。

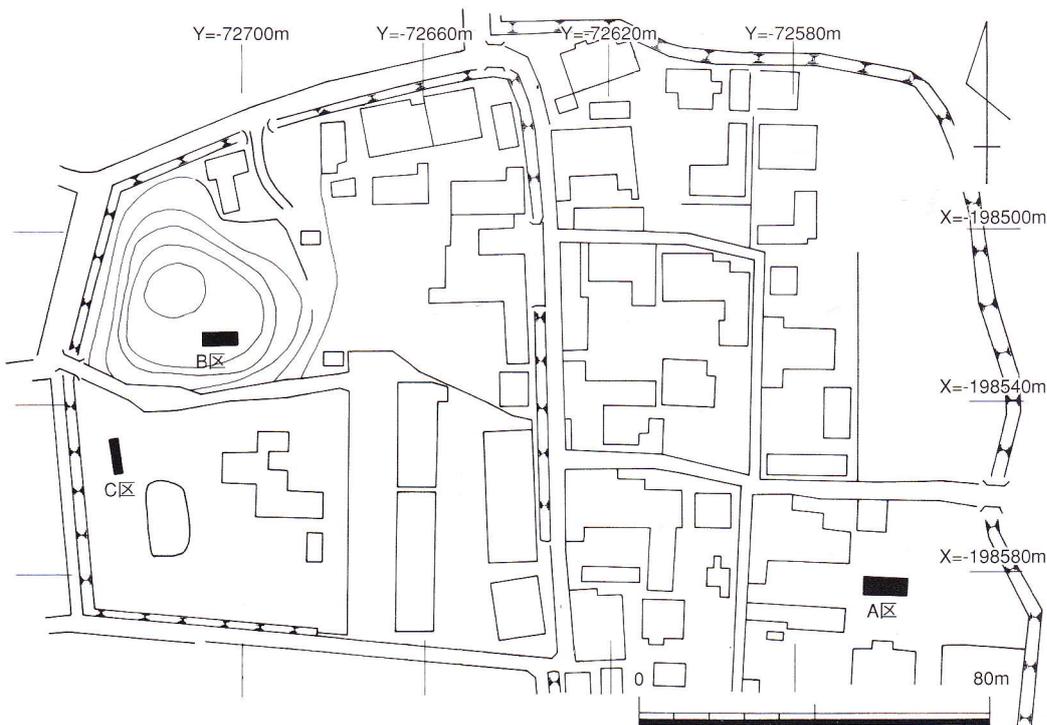
溝等の遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け、写真撮影を行い、2層以上の堆積が確認できたものについては実測図等の記録保存を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に実測を行った。図面の縮尺は、各調査区の平面図、壁面土層断面図、遺構の土層堆積状況図については、1/20の縮尺を用い手実測で行い、重要な遺物出土状況図や特殊遺構については1/10の縮尺を用いた。また遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2) 調査の概要

各調査区における基本層序は第5図に示したとおりである。

まずA区の基本層序は第1層に現代の水田耕土(現水田面の標高は1.9m)があり、この第1層の下面が江戸時代の遺構を検出した第1遺構面である。第1遺構面を形成する第2層は、厚さ4cmを測る室町時代の遺物包含層で、にぶい黄褐色系の粗砂を含むシルト質の土層である。この第2層の下面が弥生時代中期から室町時代までの遺構を検出した第2遺構面である。第3層は、厚さ25cmを測る

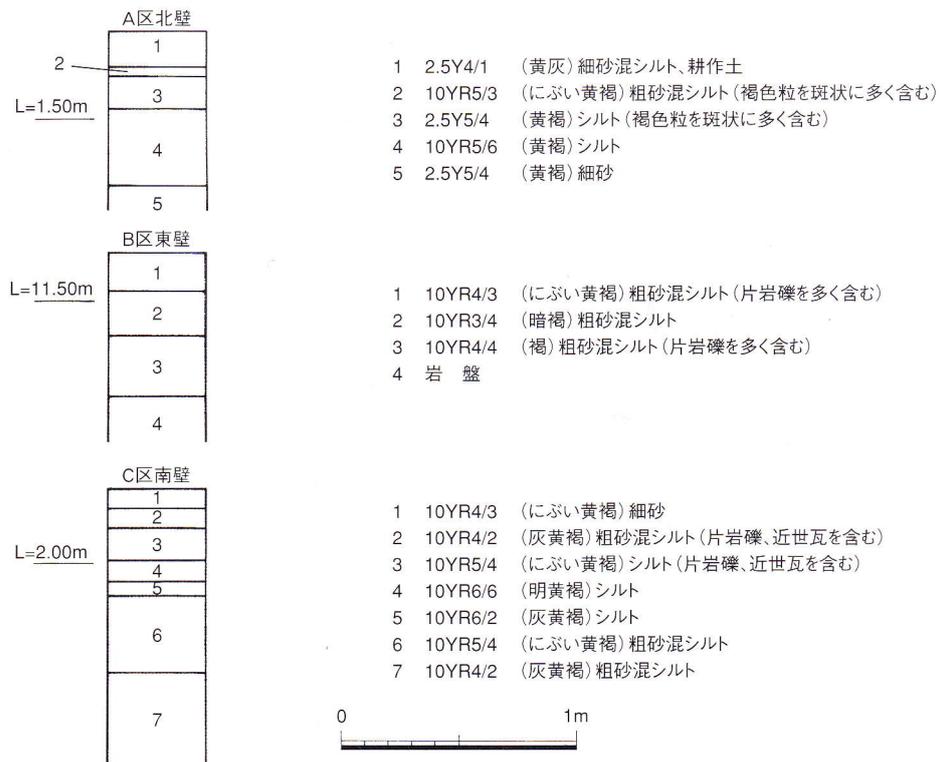


第4図 調査地区割図

弥生時代中期前葉頃の希薄な遺物包含層で黄褐色系のシルト質層である。この第3層の下面が弥生時代前期末から中期初頭の遺構を検出した第3遺構面である。さらに、下層の第4層(黄褐色系のシルト質)は無遺物層とみられ、厚さ40cm程度の堆積である。また第4層の下面は、第5層(黄褐色の粗砂)となる。

次に、B区は丘陵の頂上部において結晶片岩を用いた石垣が基壇状にめぐらされており、この範囲内において平坦地を形成している。B区はこの平坦地の範囲内におさまる調査区である。表土である第1層(現地表面の標高は11.7m)は厚さ15cmを測る。第2層は暗褐色系の粗砂混シルトであり、15～20cmの堆積である。また第3層は、調査区ほぼ中央から東・南側のやや岩盤が落ち込む斜面に堆積する結晶片岩の礫を多く含む土層であり、最深部の東壁周辺において25cmの厚みを測る。この第2・3層には江戸時代の瓦などを多く含むことから、江戸時代に石垣を用いた平坦地を構築した際の整地土とみられる。この第3層の下面が結晶片岩の岩盤となる。

C区は北西から南東へ緩やかな傾斜をもつ地形を成している。このため、現地表面の標高は2.6～2.3mを測る。第1層(表土)は厚さ8cmを測る。第2・3層は黄褐色系の粗砂混シルト及びシルト質であり、結晶片岩の礫と江戸時代の瓦を多く含む堆積である。この状況から、これらは江戸時代における整地層と考えられる。この第3層の下面において江戸時代末期の土坑1基を検出した。第4層は厚さ10cm前後を測る明黄褐色系のシルト質層で江戸時代の堆積とみられる。この第4層の下面が室町時代の遺構を検出した遺構面である。この遺構面を形成する第5層は、厚さ5cmを測る希薄な古墳時代の遺物包含層である。第5層以下の状況は、調査区南壁直下に設定したサブトレンチ内において検出したもので、第6層(にぶい黄褐色系の粗砂を含むシルト)が30cm、第7層(灰黄褐色系の粗砂を含むシルト)が40cm以上の厚みで堆積し、これらはともに無遺物層の可能性が高い。



第5図 調査地土層柱状模式図

5.遺 構

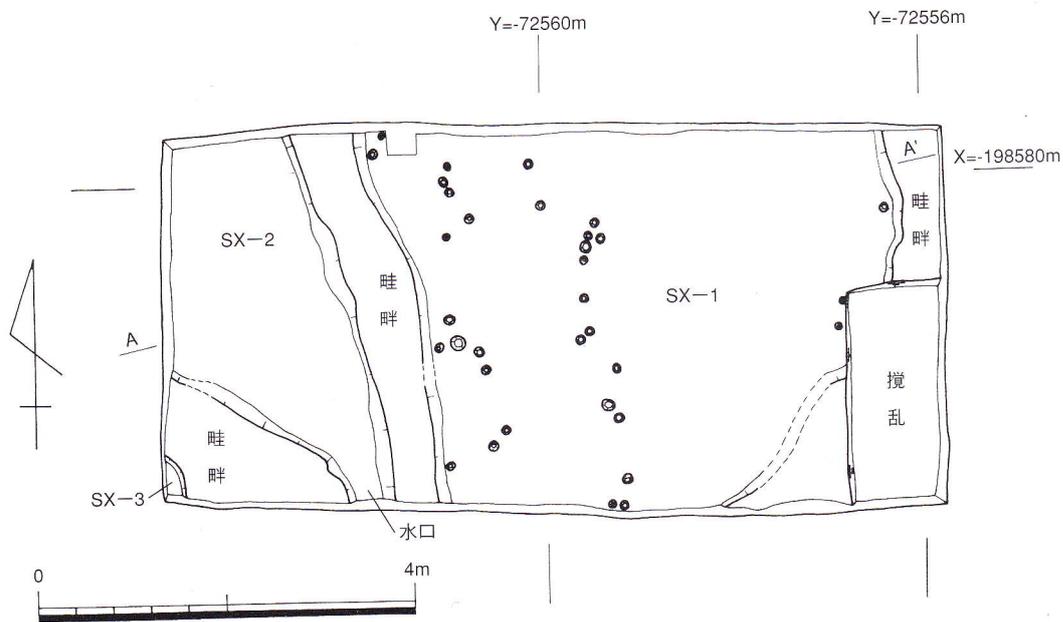
遺構は、A～C区を通してすべての調査区において検出した。特にA区では、弥生時代から江戸時代にかけての遺構面を3面確認し、その面ごとに弥生時代から江戸時代にかけての良好な遺構を検出した。B区では岩盤に掘り込まれた江戸時代のピット数基を、またC区では屋敷地に関係するとみられる鎌倉時代から室町時代にかけての土坑などを検出した。

以下、各調査区ごとに遺構を説明し、A区に関しては各遺構面ごとに時代の古いものから記述する。

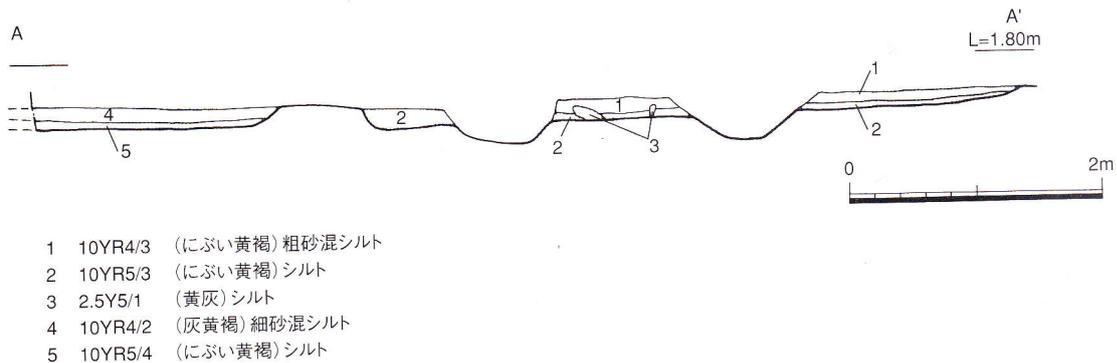
(1) A区の遺構

【第3遺構面】(第6図、図版10)

第3遺構面は第2遺構面を形成する第3層掘削後の第4層上面(標高1.45～1.55m)において検出した遺構面であり、東側から西側にかけて緩やかに傾斜する。この第3遺構面において検出した遺構は水田区画3単位(SX-1～3)と農耕に関係するとみられる杭列である。この杭とみられるピットは、直径10cm程度、深さ10cm前後を測る。



第6図 A区第3遺構面遺構全体平面図



- 1 10YR4/3 (にぶい黄褐)粗砂混シルト
- 2 10YR5/3 (にぶい黄褐)シルト
- 3 2.5Y5/1 (黄灰)シルト
- 4 10YR4/2 (灰黄褐)細砂混シルト
- 5 10YR5/4 (にぶい黄褐)シルト

第7図 SX-1・2土層断面図

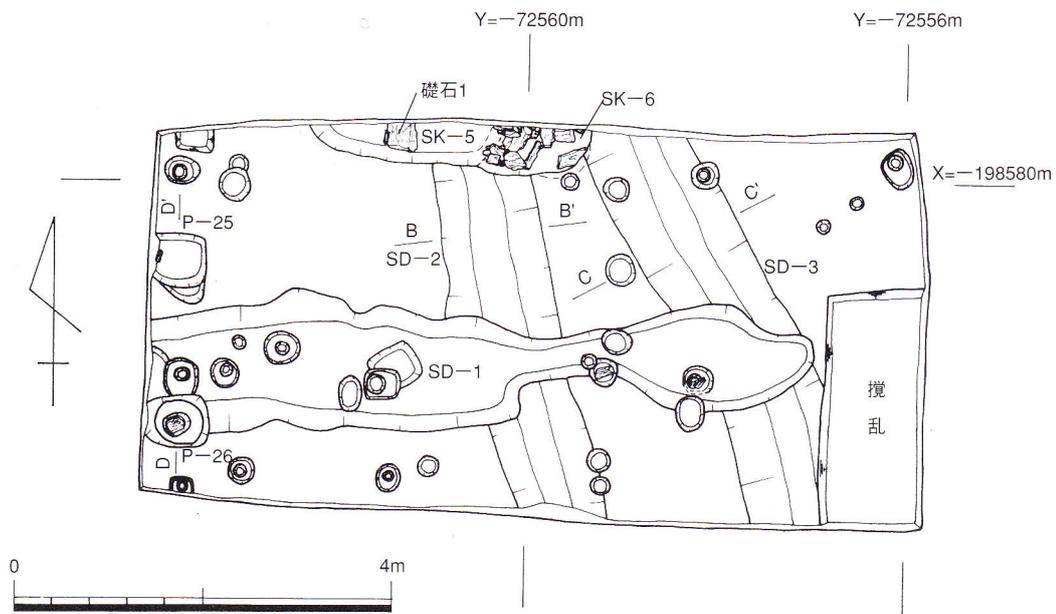
[SX-1 ~ 3] (図版17・18)

SX-1は調査区中央から東側にかけて検出したもので、東西5.1m、南北4.0m以上を測る。SX-2はSX-1の西側で検出したもので、SX-1との境に幅70~90cmの畦畔を形成する。この畦畔に平行する形でSX-1内に杭列を検出した。SX-2の南端には幅50cmの水口とみられる括れ部がみられる。またSX-3は調査区の南西隅で一部分のみ検出したもので、SX-2との間に畦畔をもつものと考えられる。

以上の水田には厚さ10cm程度の黄褐色系のシルトである耕作土がみられた(第7図、図版17下・18下)。この水田の時期は、SX-1出土の少量の土器と上層の第3層の遺物からみて弥生時代前期末から中期初頭である可能性が高いものとみられる。

【第2遺構面】(第8図、図版9)

第2遺構面は第1遺構面を形成する第2層掘削後の第3層上面(標高1.70m)において検出した遺構面である。この第2遺構面では、溝3条とピットを多数を検出した。

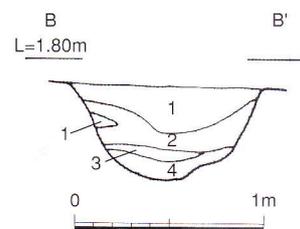


第8図 A区第1・2遺構面遺構全体平面図

[SD-2・3](図版15・16)

SD-2はN-15°-Wの方向性で調査区を南北に縦断する幅1.0m、深さ50cmを測る溝である。この溝の覆土は4単位に分けられ、下層ほど粘質性が強い(第9図、図版15下)。

SD-3はSD-2の東側で検出した溝で、N-7~25°-Wの方向性を持ち、緩やかに屈曲する。この溝は、幅1.2m、深さ50cmを測り、覆土の最上層はベースとなる基本層序の第3層と酷似しておりこの面での検出は困難であった。よって、第3層掘削後の第4層上面での検出となった。覆土は黄褐色系のシルト質で、5単位に分層できる(第10図、図版16下)。



- 1 10YR4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト
- 2 10YR3/3 (暗褐)シルト
- 3 10YR3/2 (黒褐)シルト
- 4 2.5Y4/1 (黄灰)シルト混粘土

第9図 SD-2土層断面図

これらSD-2・3の出土遺物は少量であったが、ともに弥生時代中期前葉までに比定できる土器が含まれており、溝の時期も弥生時代中期前葉の範疇であると思われる。

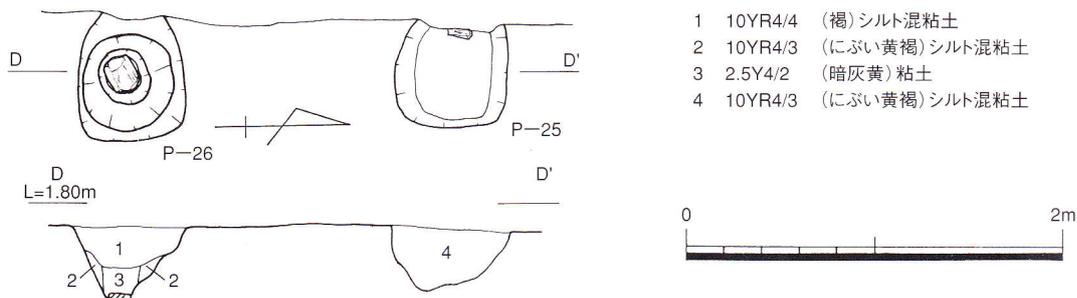
【SD-1】

SD-1はN-87°-Eの方向性で幅0.4~1.5m、深さ約10cmを測る溝で、上部が削平を受けているものか、東端で途絶える。覆土はオリーブ褐色系の細砂混シルトの単層である。この溝の時期は、出土した遺物に瓦器の椀・皿が含まれていることなどから鎌倉時代の遺構とみられる。

【P-25・26】(第11図、図版13下・14)

ピットでは、最も規模の大きなものとして調査区西端で検出した直径60~70cm程度、深さ35cm前後の隅円方形のホリカタをもつP-25・26がある。これら以外のピットではその大きさで直径40cm前後のものと30cm未満のものがあり、ホリカタの形状では隅円方形のものと円形のものがある。またP-26以外の数基のピットにも結晶片岩の礎盤を検出した。これらピットではSD-1などとの重なりから考えて、少なくとも2時期以上のものが存在するとみられる。

P-26の底面には柱の根固めに使用されたとみられる結晶片岩の礎盤が入られていた。これらは間尺1.7mを測るもので、掘立柱建物の柱穴の可能性が高く、その中心部は調査区の西側にあるものと考えられる。またP-25はSD-1と重なりをもつことから、SD-1に後出するものであることがわかる。



第11図 P-25・26遺構平面図及び土層断面図

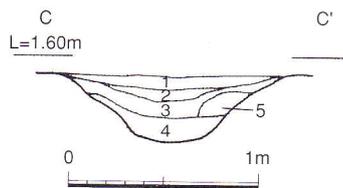
【第1遺構面】(第8図、図版9)

第1遺構面は現代の耕作土掘削後の第2層上面(標高1.72m)において検出した遺構面である。この第1遺構面の遺構は、調査区ほぼ中央部北壁直下においてSK-5・6を検出した。

【SK-5・6】(第12図、図版13上)

SK-6は東西2.8m以上、南北0.5m以上、最深部の深さ50cmを測るもので、東側の深掘部分に結晶片岩の割石が多く含まれ、その西側の比較的浅い部分に厚さ10cmまでのいわゆる山土(10YR6/6(明黄褐)礫混粘土)を敷き詰め、その面に結晶片岩の礎石1を据えている。

SK-5はSK-6と重なりをもつもので、東西2.0m以上、南北0.5m、深さ10cmを測る。これらは、出土した遺物からみてともに江戸時代の土坑とみられ、SK-6→SK-5の関係にある。

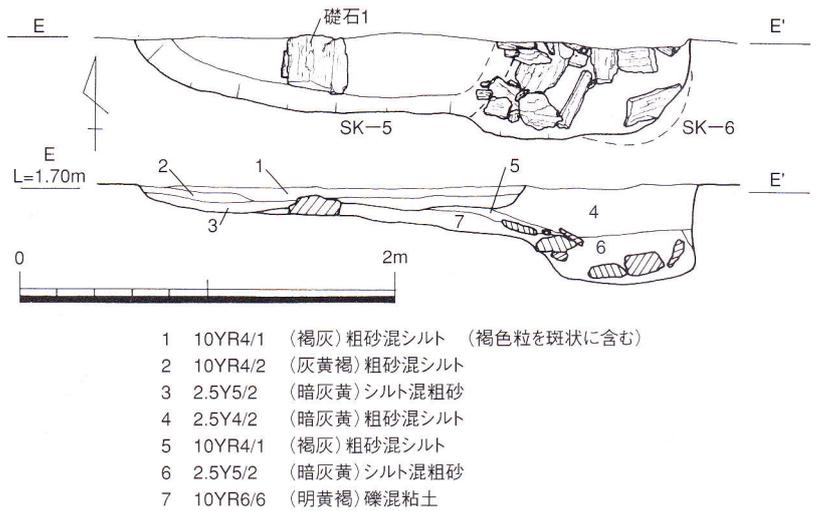


- | | | |
|---|---------|---------------|
| 1 | 2.5Y4/3 | (オリーブ褐)細砂混シルト |
| 2 | 2.5Y5/2 | (暗黄灰)細砂混シルト |
| 3 | 2.5Y5/3 | (黄褐)シルト |
| 4 | 2.5Y5/3 | (黄褐)細砂混シルト |
| 5 | 10YR5/3 | (にぶい黄褐)シルト |

第10図 SD-3土層断面図

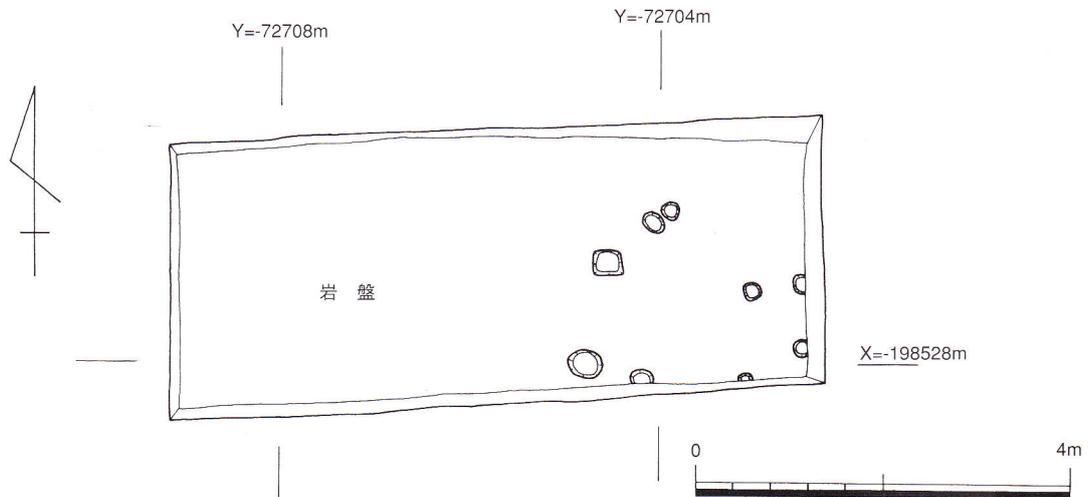
(2) B区の遺構 (第13図、図版11)

B区は、独立した丘陵の頂上部に位置する。この頂上部は、東西12m、南北7.5mの長方形を呈する平坦部が形成され、この平坦部を形成するために結晶片岩を用い、高さ40cm程度の石垣がめぐらされている。この平坦部ほぼ中央に設定したB区は第3層掘削後の岩盤面で遺構検出を行った。その結果、調査区中央部から東側において岩盤を掘り囲めた9基



第12図 SK-5・6遺構平面図及び土層断面図

のピットを検出した。これらのピット内からは江戸時代に比定できる瓦が少量出土した。このことから、石垣を含めた周囲の基壇状の平坦部は、江戸時代末期頃に構築されたものと考えられる。



第13図 B区遺構全体平面図

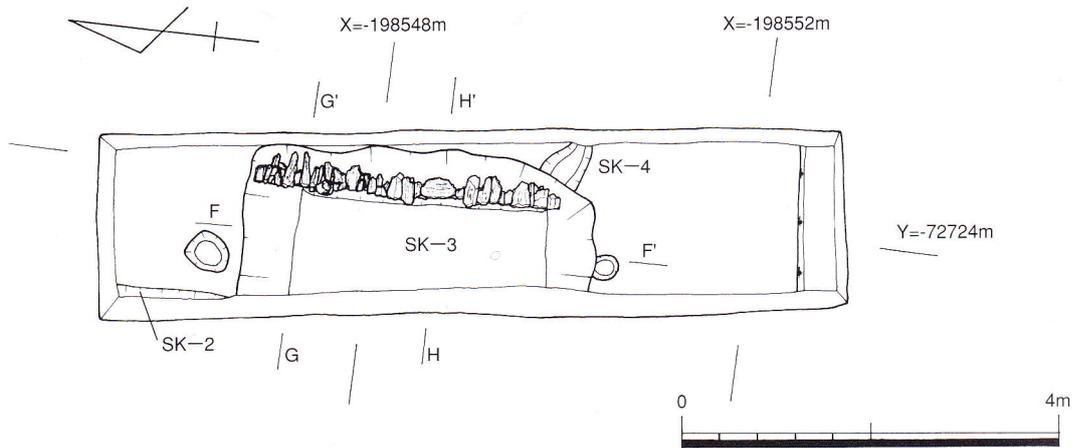
(3) C区の遺構 (第14図、図版12)

C区では第5層上面(標高1.8m)において土坑3基(SK-2~4)とピット2基を検出した。SK-2は調査区の北西端において一部を検出したもので全体の形状が不明なものである。またSK-4はSK-3の東側で検出したものである。これらは、他の2基のピットを含めて出土した遺物が少なく、正確な時期等は不明である。このほか、第4層上面(標高2.05m)の調査区北端において不定形の土坑1基(SK-1)を検出した。このSK-1には少量の江戸時代の瓦が含まれていたことから、江戸時代の遺構であるとみられる。

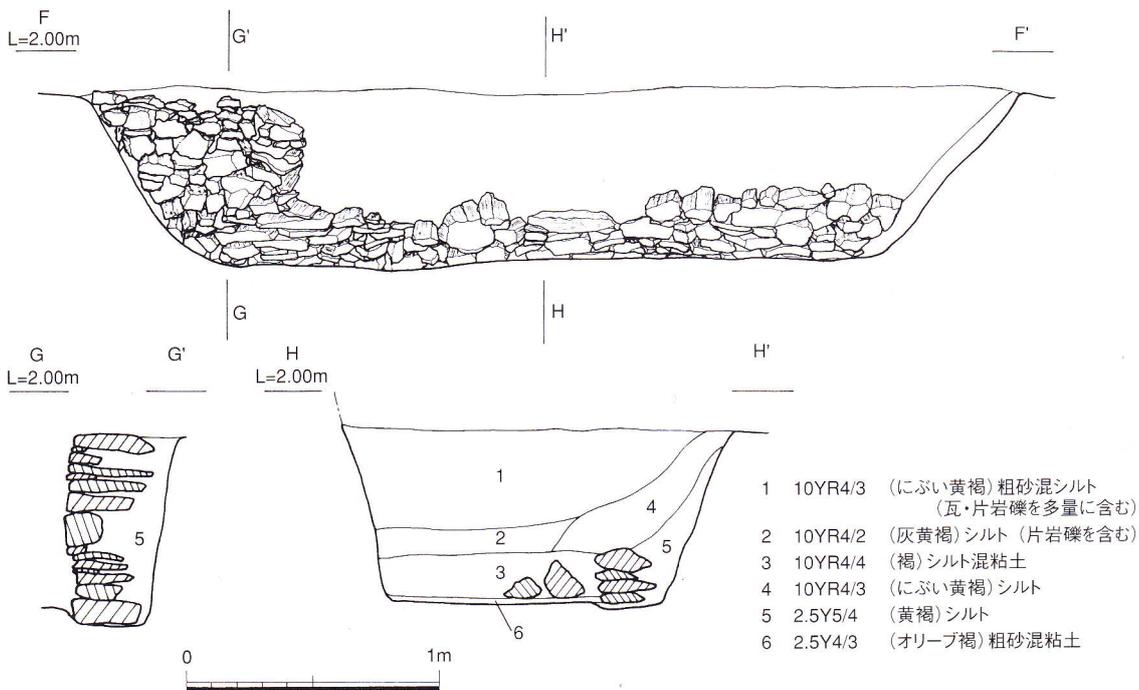
[SK-3] (第15図、図版20)

SK-3は調査区のほぼ中央部において検出したもので、東西1.5m以上、南北3.7m、深さ70cmを測る方形区画を呈するタメマスとみられる。この遺構は東壁面にのみ小口積みによる石積が構築され

ている。石積は北側の一部を除いてほとんど上部が崩れ落ちている。石積の石材は、ほとんどが結晶片岩の割石であるが、少量の和泉砂岩を含み、また瓦(第21図、43)が少量含まれている。タメマスの覆土は6単位に分層できる(第15図、図版21上)。この堆積からみると1から4の土層は、3に石積の転石が含まれることから埋没時の堆積であるとみられ、6(2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂混粘土)のみがタメマスが既存していた時期の堆積と考えられる。また5は石積構築時のウラゴメにあたるものである。また覆土内の上層には多量の瓦が含まれ、土器では中国製の青磁碗・盤や備前焼の甕その他、石仏1体(第24図、55)などが出土し、これらの遺物から埋没時期が室町時代とみられる。



第14図 C区遺構全体平面図



第15図 SK-3遺構平面図及び土層断面図

6. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代、鎌倉時代から室町時代と江戸時代のものに大きく分類できる。

まず弥生時代の遺物であるが、出土量としてはごく微量であり、A・C区から壺と考えられる破片が出土した。弥生土器が出土した遺構としては、A区SD-2、SK-5、SX-1がある。

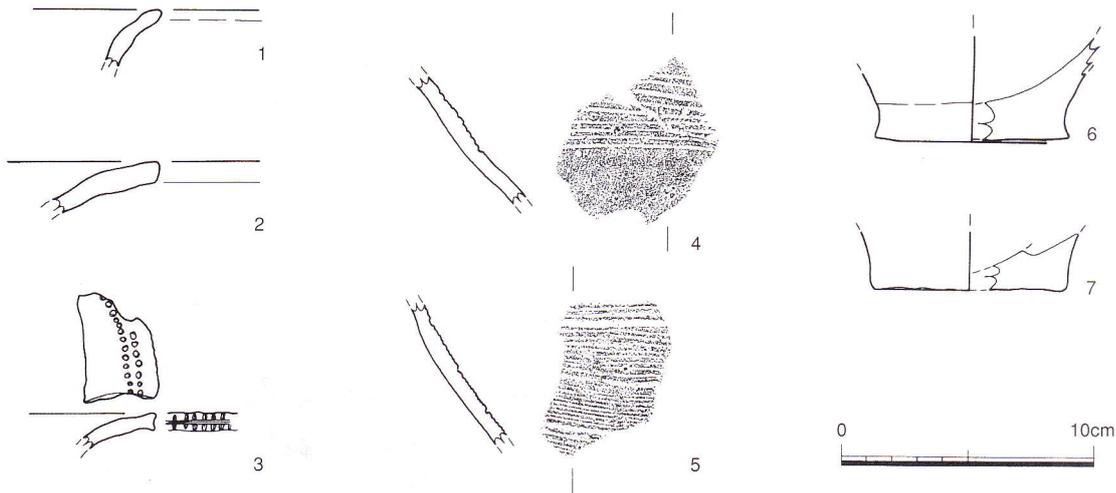
次に鎌倉時代から室町時代の遺物であるが、小破片が大半で全形を復元できるものはごく僅かであった。鎌倉時代の遺物はA区で検出されたピット群、溝の覆土から出土したもので、土師器皿、東播系須恵器、瓦器椀・皿などがある。室町時代の遺物は、C区で検出したSK-3の覆土から多く出土した。土器には瓦器椀、瓦質土器の風炉、備前焼の壺・甕、中国製の青磁の碗・盤がある。瓦は大量に出土しており、瓦の種類としては軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他、雁振瓦、鬼瓦などの道具瓦があるが、平瓦が大半である。また平瓦・雁振瓦の中には石組みの構築材として組み込まれていたものもある。その他の遺物として叩石や砥石などの石器・石製品や石仏が出土している。

江戸期時代の遺物は、A～C区の全ての調査区において出土している。まずA区からは土師器の灯明皿、鉄釘がSK-5・6から出土している他、包含層から肥前系陶磁器の染付・青磁や鉢、瓦類などが出土している。B区からは江戸時代以降の遺物のみが出土したが、陶磁器、瓦類が微量出土したに過ぎない。C区からも瓦を中心とした遺物が出土しているが、遺構に伴うものはSK-1のみで、他は全て包含層からの出土であった。出土遺物には瀬戸美濃系・肥前系の陶磁器類、瓦には丸瓦・平瓦、滴水瓦があり、石製品の中には火打石なども出土している。

本報告では、これらの遺物について、まず土器を時代別に分け、鎌倉時代・室町時代・江戸時代の土器については地区別に述べる。その後瓦類、石器・石製品・石造物、金属製品の順に報告する。また瓦類については、鎌倉時代・室町時代と江戸時代のものに分けて記述する。

(1) 弥生時代の土器 (第16図1～7、図版22上)

1～7は弥生土器である。1～3は広口壺の口縁部であるが、小破片のため法量は不明である。1は直立ぎみに立ち上がり、端部に至って屈曲し、丸くおさまる。2は大きく外反し、端部は若干肥厚する。3の口縁外端面にはタテ方向に刻み目を一定間隔で施文した後、中央にヘラ描きの直線文を一条施す。また上端面には刺突文が2列認められる。4・5は壺の肩部の破片である。4はヘラ描き直線文を多条に施すものであり、現状では9条認められる。5は櫛描き直線文を多条施した後、ヘラ描き直線文を一定間隔で施文する。6・7は壺の底部で、ともに底径7.8cmを測る。風化により器表面が剥離しているため詳細は不明だが、ナデにより調整されていることが確認できる。以上の弥生土器はいずれも淡褐色を呈し、胎土には混和剤として多量の片岩・石英を含んでいる。時期についてはいずれも小破片のため検討材料に欠くが、1が他のものに比べ古相を呈し、弥生時代前期後半に該当し、他のものは弥生時代中期初頭と考えられる。これらの出土位置は、1がA区SD-2、2がA区第3層、3がA区SK-5、4がA区第2層、5がA区SX-1、6がC区第1層、7がC区第3層である。



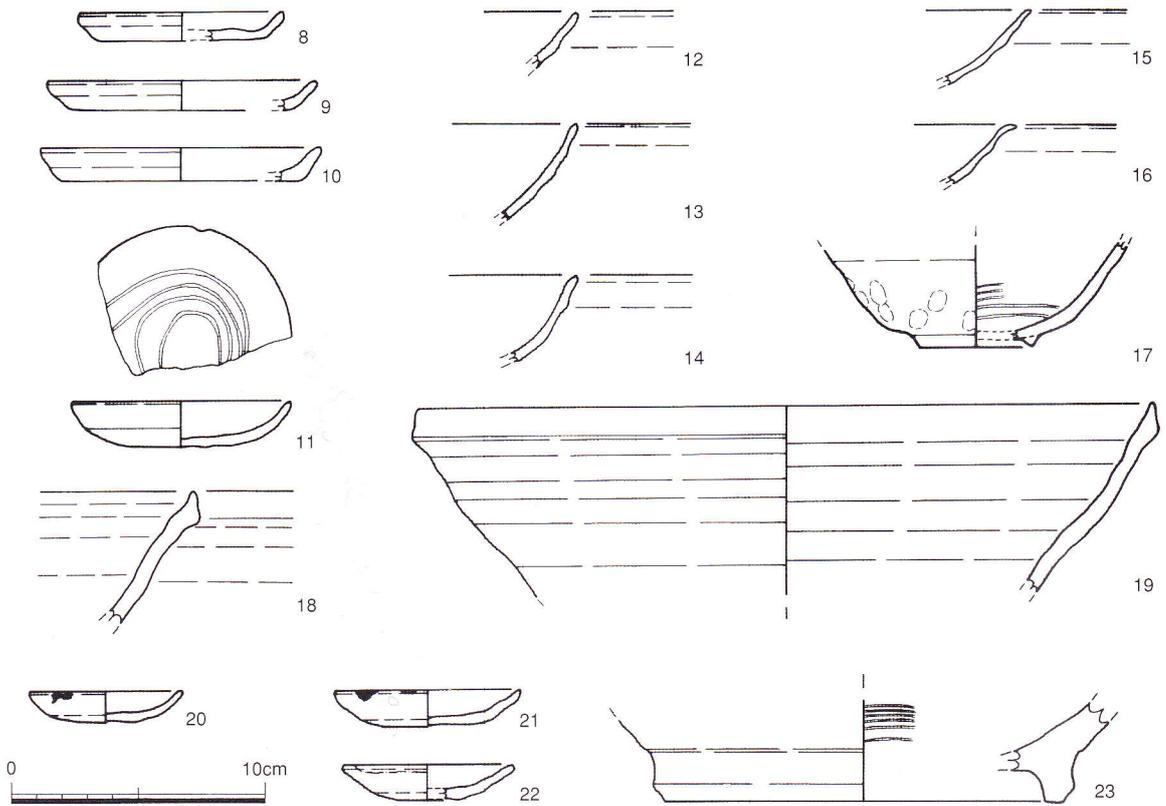
第16図 遺物実測図1

(2) 鎌倉・室町・江戸時代の土器

[A区出土土器] (第17図8~23、図版22下)

8~10は土師器の皿である。器高1.1~1.3cmと扁平な形状を呈し、口径は8が8.0cmと小形で、9・10は約11.0cmを測る。口縁部はヨコナデによって調整され、底部は平底で、糸切り未調整である。胎土には片岩・石英・赤色軟質粒を少量含んでいる。また8・9の見込み部には、煤が付着している。11~17は瓦器である。11は皿で、口径8.6cm、器高1.8cmを測るものである。成形は指オサエによってなされ、体部上半から口縁部にはヨコ方向のナデにより調整される。内面には4条の螺旋状暗文が見られる。12~16は碗の口縁部片である。全て指オサエによって成形され、口縁部をヨコ方向のナデによって仕上げ、端部を丸くおさめるものである。しかし口縁端部の細部形態には個体差が確認でき、内彎ぎみに立ち上がるもの(12)、外反ぎみにおさめるもの(13~15)、大きく外反するもの(16)がある。特に16は器壁が薄手で、口縁形態とともに特色ある個体である。17は底部から体部にかけての破片であり、断面逆三角形を呈する貼付高台を有する。指オサエによって形作られ、体部上半はナデ調整される。また内面には僅かに暗文が認められる。これらの瓦器碗は胎土に石英と片岩を少量含み、暗灰褐色を呈する。焼成はあまく、軟質焼成である。18・19は東播系須恵器のこね鉢で、19は口径29.0cmを測る。体部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部に至って上方に拡張し、口縁帯を形成する。ロクロにより成形され、外面はタテ方向の、内面にはヨコ方向の簡略化した指ナデが見られる。18も19と同一の特徴をもつものであり、これらは森田編年^(註1)の神出Ⅱ期第2段階に位置づけられる。以上A区から出土した8~19の土器は、その諸特徴から近似した年代が考えられ、12世紀末~13世紀代に位置づけられるものである。出土位置は、8がP-31、9・18がP-27、10がP-23、11・19がP-38、12がP-32、13がSD-1、14がP-20、15がP-38、16・17がP-31である。

20~23は江戸時代の土器である。20~22は土師器の灯明皿で、口径は20が6.0cm、21が7.2cm、22が7.0cmを測る。ロクロにより成形され、底部は糸切りで未調整である。口縁端部はヨコ方向のナデによって面をなしており、それは22に顕著に見られる。内面には透明釉が施され、部分的に外面にも及ぶ。また20・21の外面には煤が付着している。20はSK-5、21・22はSK-6から出土した。



第17図 遺物実測図2

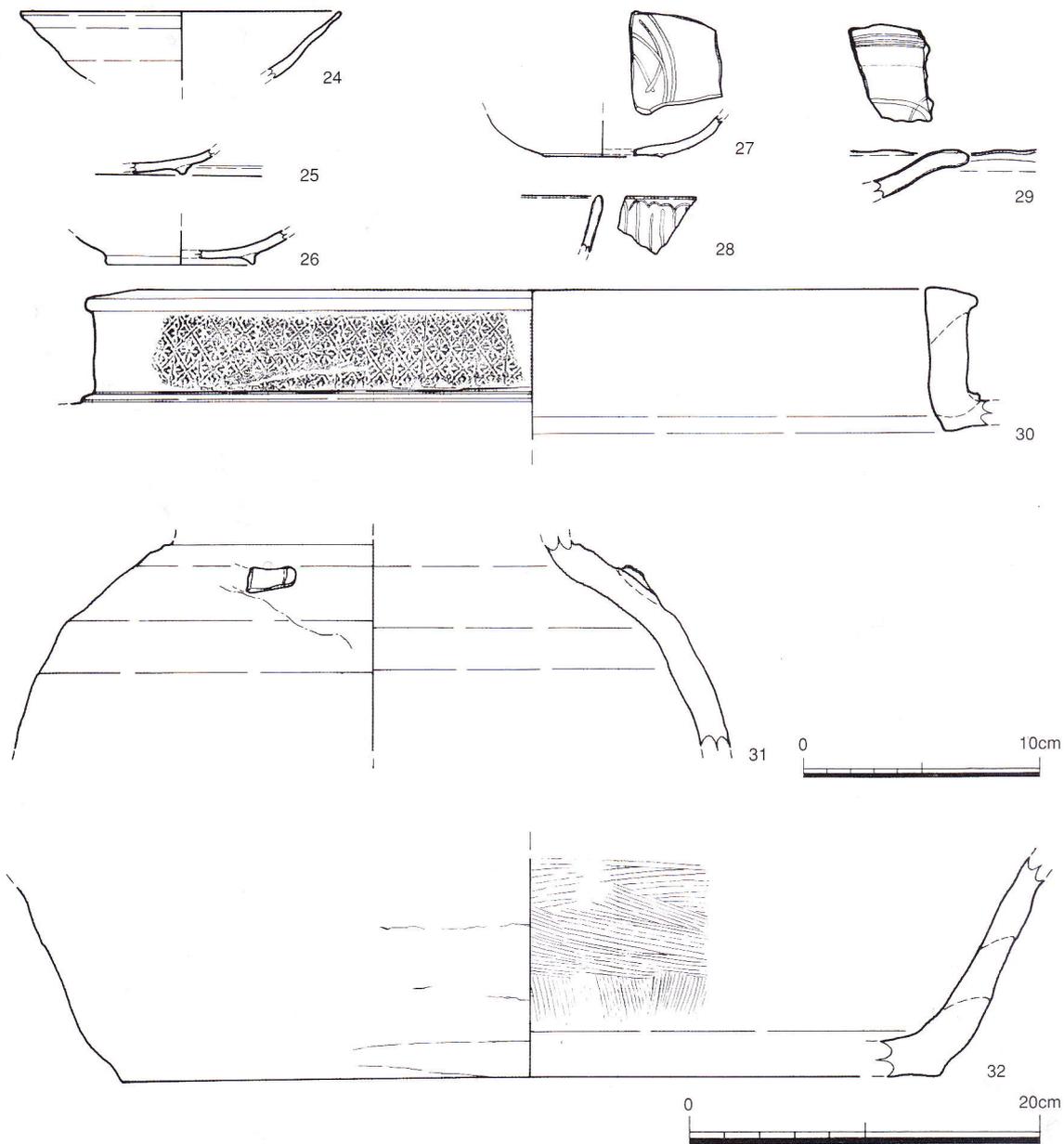
23は第1層から出土した唐津焼の鉢で、いわゆるハケ目唐津と呼称されるものである。断面逆台形状の削り出し高台を有する。釉は鉄釉であり、外面は高台の中位まで施され、くすんだ緑灰色に発色する。

[C区出土土器] (第18図24~32、図版23)

ここで報告する土器は、29が第3層からの出土であり、他は全てSK-3から出土した。SK-3から出土した土器は大半が細片であり、量自体も希薄である。また報告するもの以外に土師器、瓦質土器の羽釜などが出土しているが、小破片のため図示できていない。

24~27は瓦器碗である。いずれも小破片のため、全形を復元できるものはない。24は口縁部の破片で、復元口径13.6cmを測る。体部から口縁部にかけて外上方にのび、端部に至ってやや外反する。指オサエによって成形し、口縁部と体部上半を二段にヨコナデ調整する。25~27は底部の破片である。高台の形状から分類され、逆台形状を呈するもの(25)、逆三角形を呈しやや外開きのもの(26)、ナデによって僅かな高台を付加するもの(27)がある。特に27は細い粘土紐を貼り付けてつくった僅かな突起に過ぎず、形骸化したものであり、他のものより後出すると考えられる。全体的に磨滅が著しいが、27には螺旋状の暗文が見られる。これらの瓦器碗は、いずれも焼成があまく、軟質である。また年代に関しては若干の時期幅が考えられ、24~26は13世紀代に遡上する可能性をもつものであり、27はそれよりも後出するもので、終末期の瓦器碗の様相を呈し、14世紀前半頃に位置づけられる。30は瓦質土器の奈良火鉢で、形態から風炉と考えられる。口径38.0cmを測り、ナデによって全面を丁寧に調整する。口縁部は直立し、端部は丸みを帯びる。口縁端部と頸部には小突線が2条付加されており、その間に花菱文のスタンプが押捺され、右から左方向に施文される。また外面

には、離れ砂の痕跡が確認できる。胎土は緻密で、若干の雲母を含み、焼成も良好で堅緻である。28・29は青磁である。28は蓮弁文碗の口縁部であり、ヘラ先による細線で蓮弁と剣頭が単位を意識して描かれている。釉は淡緑灰色に発色する。上田編年^(註2)の碗B-IV類にあたり、15世紀後半の年代が考えられる。29は盤の口縁部である。内面端部には3条の細線が見られ、見込み部にもヘラ描きによる草花文が確認できる。釉は緑灰色に発色し、均一に施釉される。31・32は備前焼である。31は壺の肩部付近の破片で、三耳壺又は四耳壺であると考えられる。口縁部は欠損するが、直立する形態を呈するものと思われる。輪積み手法によって成形され、内面は板状工具によるナデ調整を行う。全体的に暗灰褐色を呈し、口縁部から外面肩部にかけては自然釉が見られる。32は甕の底部で、底径46.4cmを測るものであり、赤褐色に発色する。輪積み手法によって成形され、外面の底部付近には粘土を掻き取った痕跡が認められ、上部はヨコ方向のナデ調整を基本とする。内面はタテハケ後



第18図 遺物実測図3

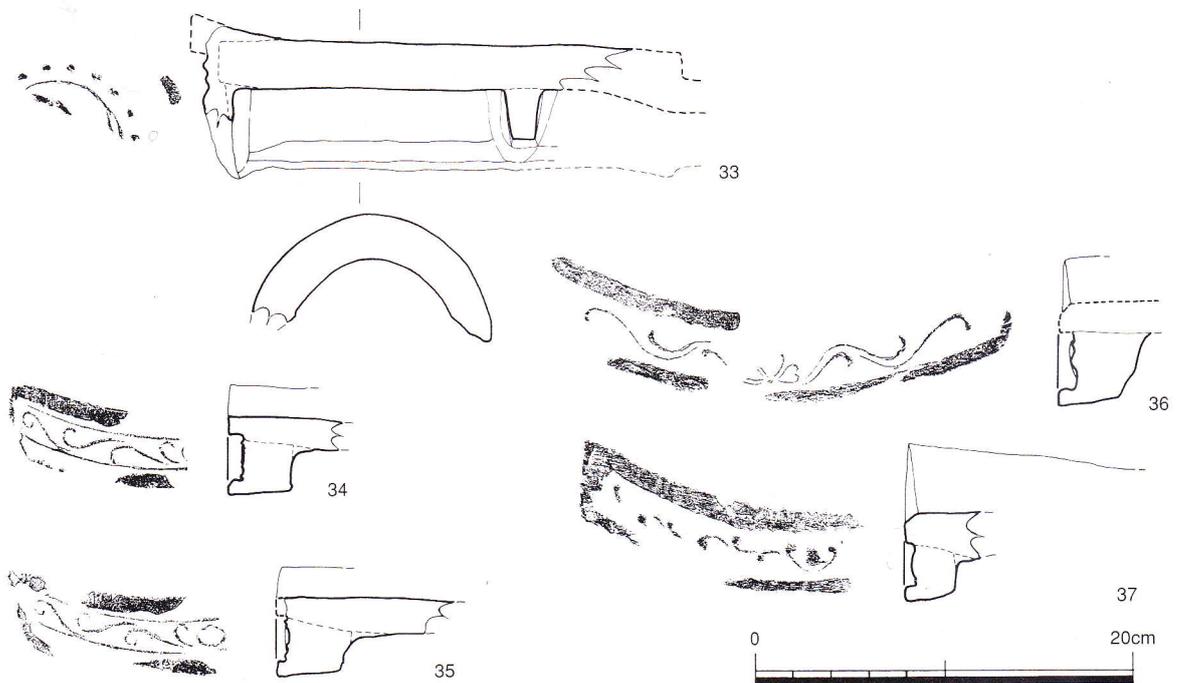
ヨコハケが施され、その後部分的にタテ方向の指ナデを施す。31・32は胎土が比較的緻密であり、その特徴から間壁編年の^(註3)Ⅳ期後半に位置づけられる。

以上、SK-3出土の土器について報告してきた。時期的に幅の広い遺物が出土しているが、大きく以下の2群にとらえられる。瓦器碗を中心とし14世紀を前後する一群と、その他奈良火鉢、備前焼、青磁など15世紀代の一群である。これらの遺物は人為的な埋土から一括して出土していることから、時期的に最も新しい15世紀の後半代に埋没時期の上限をあてることができる。このような時期幅のある遺物が一括して出土している状況は、単なる一遺構の埋没を意味しているものではない。つまり周辺の土地利用がこの時期に大きな変革を迎えたことを示し、後述する瓦にも同様な時期幅が想定されること、そして第1次調査で検出されている井戸SE-1に代表される遺構の埋没時期とも合致することからも傍証される。またSK-3が機能し始めた時期については、時期を示す直接的な資料はないが、13世紀まで遡上する可能性がある。

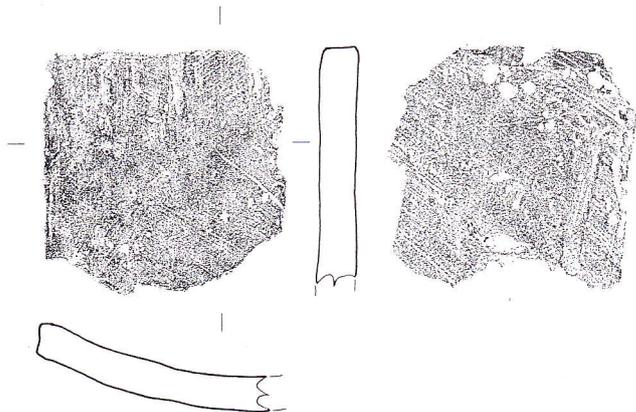
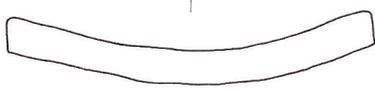
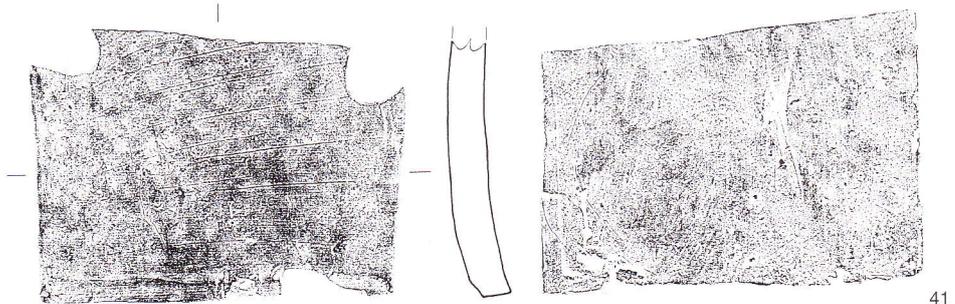
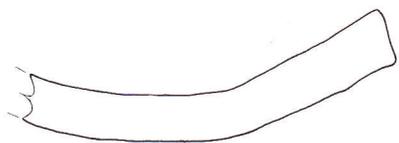
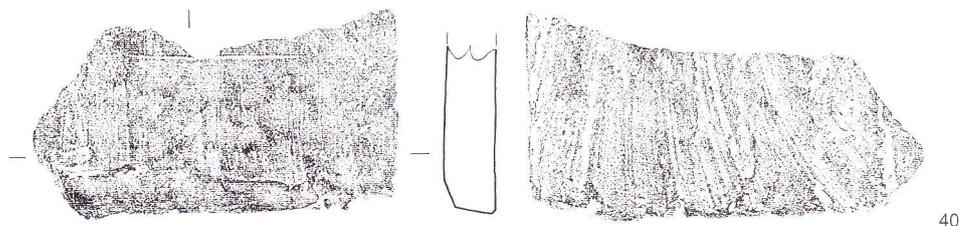
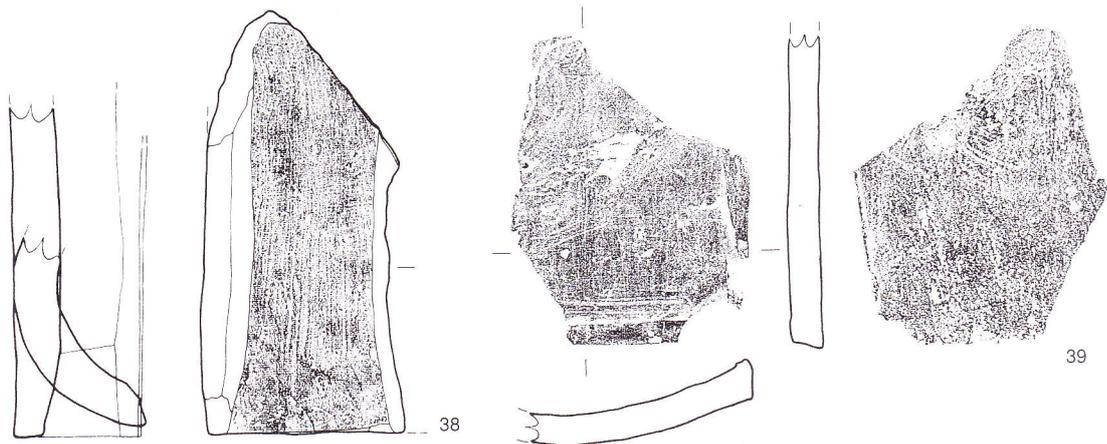
(3) 鎌倉・室町時代の瓦

[SK-3出土瓦] (第19~21図33~43、図版24・25)

SK-3から出土した瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦があり、大半は平瓦である。33は巴文軒丸瓦である。巴は左巻きで、尾部は圏線状につながる。珠文は5mm程度と小さく、密に配され、20個の数が復元できる。また体部中央玉縁寄りには、滑り止めが付加されている。玉縁との連結面の面取りは見られない。焼成は軟質であるが、全面が燻されており、黒灰色を呈する。以上の特徴から室町時代前期の時期が考えられる。34~37は軒平瓦で、いずれも平瓦が瓦当上部に接合し、僅かに粘土補充をするという共通した製作技法が確認できる。34・35は宝珠様の中心飾りをもち、3反転の唐草文を配する。その周囲には圏線が巡る。34・35は同範瓦と考えられるが、範傷



第19図 遺物実測図4



第 20 図 遺物実測図 5

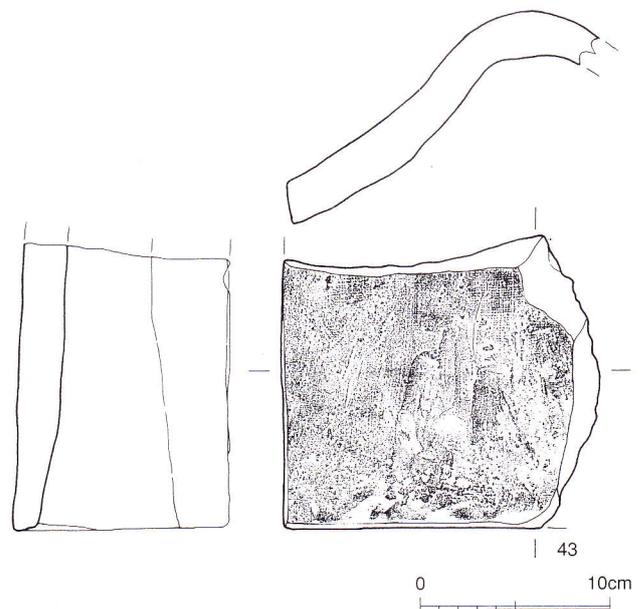
の存在から34が後に製作されたことが分かる。焼成は極めて堅緻で、胎土に長石・黒色粒を含み、淡青灰色を呈する。36は中心飾りに三葉の花弁を置き、3反転する尾の長い唐草文を配する。焼成は比較的堅緻で、胎土に赤色軟質粒を一定量含み、灰色を呈する。37は中心飾りに珠文状のものを置き、左右に7反転する短かな唐草文を配する。胎土には片岩と赤色軟質粒を含み、軟質焼成で磨滅が著しいが、全面に燻しがかかる。これらの軒平瓦は瓦当部の接合技法においては共通しているものの、胎土・調整・焼成技法において全く異なる。つまり37が胎土の特徴から在地産と考えられ、紀伊型瓦器碗同様軟質焼成であるのに対し、34・35は硬質である。さらに平瓦の凹面は36・37が布目痕をそのまま残すのに対して、34・35は丁寧にナデ消しており、調整技法においても両者は相違している。このことから34・35は搬入瓦である可能性が高いが、瓦当の接合技法が共通しているのは両者の同時代性を反映しているものかは現段階では不明である。また37に見られる文様構成は西大寺など^(註4)で確認される寺院系の瓦であり、このことから当地一帯の瓦葺き建物は、寺院である可能性も示唆することができる。また時期的には34・35が左右周縁幅が5mmと薄く、圈線が存在することから鎌倉時代まで遡上する可能性を持ち、36・37は左右周縁幅が1.0cmとやや厚く、34・35よりも後出すると考えられる。

38は丸瓦である。凹面には細かな布目が認められ、粗いナデによって広端面を形成する。凸面の調整はナデを基調とする。焼成は堅緻である。両側縁凹面側の面取りは2.0cmである。39～42は平瓦である。いずれも完形に復元できたものはない。これらの平瓦は製作技法により以下の4類に大別される。39は凹面に布目を残し、凸面に縄叩きが施されるものであり、40の凸面も同じく縄叩きによって成形されるが、凹面は布目を指によってナデ消すものである。41は凹・凸両面が板状工具によりそれぞれスリ消しが行われるものであり、凹面にはよくその痕跡を残している。42は凸面にナメ方向の細線が見られるもので、これはタタラから糸によって切り出した際のコビキ痕をそのまま残しているものと考えられる。凹面の布目痕は板状工具によってスリ消される。43はC区SK-3の石積みに組込まれていた雁振瓦である。軟質焼成のため磨滅が著しいが、全面に粗いナデが施されており、このナデにより稜が形成されている。凹面にはナデに先行する布目痕が認められる。

以上SK-3出土の瓦は鎌倉時代のものを含み、室町時代前期を主としたものと考えられる。また製作技法や胎土・焼成の相違は、時期的な問題の他、複数の産地からの供給を示していると考えられる。

(4) 江戸時代の瓦 (第22図44～50、図版25)

44～47は三巴文軒丸瓦で、巴が左巻きのもの(44、47)と右巻きのもの(45、46)がある。44は珠文の径が7mmと小さく、数は20個前後が復元できる。また巴の尾が細く、長い



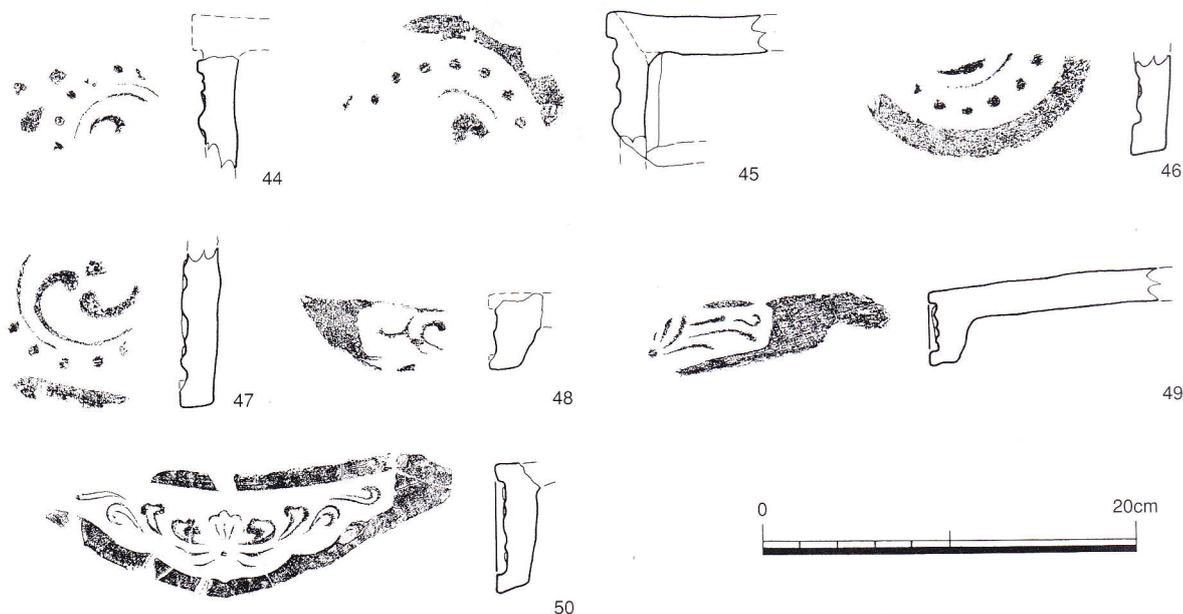
第21図 遺物実測図6

ことから他のものに比べ先行する要素をもつ。45～47は44に比べ珠文、巴文ともに大型化している。珠文は径が1.0cm前後であり、数も約16個が復元できる。巴の頭部が肥厚し、尾の長さも短いものである。以上の軒丸瓦は、周縁が幅広で、高さも文様高と等しい。また瓦当の接合法は簡易なナデによる。胎土には赤色粒を一定量含み、44・47は焼成が良好で暗灰色から黒灰色を呈するが、45・46は焼成が不良で灰色を呈する。

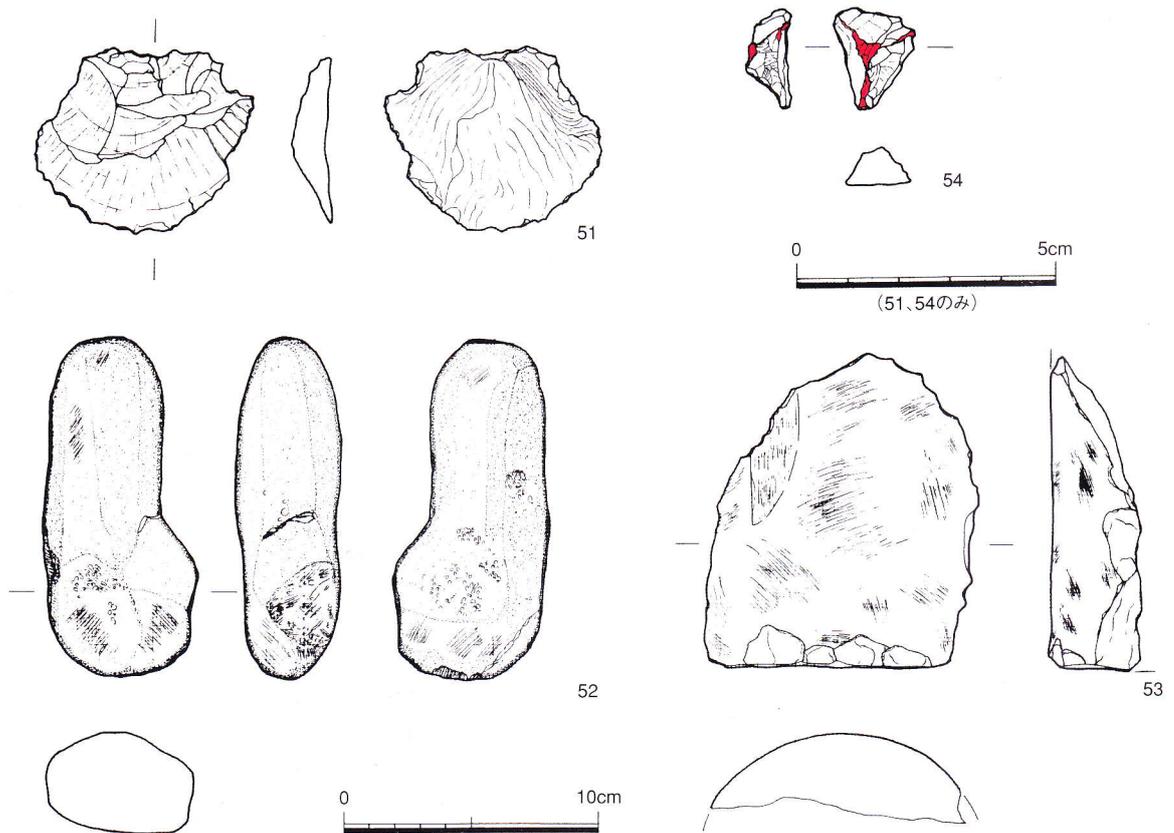
48～50は軒平瓦である。48は左周縁部の破片のため全体の文様構成は不明だが、下向きの蕨状の唐草文が配される。周縁幅は約3.2cmである。焼成は不良で、灰色を呈する。49は中心飾りに7葉を置き、左右に退化した唐草文を配し、さらに外側には子葉が認められる。この個体は周縁の幅が6.6cmと非常に幅の広いものであるため、扁平な印象を受ける。焼成は軟質であるが、燻されており黒灰色を呈する。50は滴水瓦である。中心飾りに菊花様の文様を配し、左右に3反転する短かな唐草文を配する。また全体はナデによって調整されるが、瓦当上面は平滑であることから砥石としての用途に転用された可能性がある。焼成は良好で黒灰色を呈し、また瓦当面にはキラコの付着が認められる。48～50の軒平瓦は、文様の彫りは非常に浅いものであり、瓦当厚も平瓦厚とほぼ等しい。特に50は薄手であり、その中でも新しい要素をもつ。これらの出土位置は44のみがB区の第1層からであり、その他は全てC区の第2～3層で出土している。

(5) 石器、石製品、石造物 (第23・24図 51～55、図版26)

51はサヌカイト製のスクレイパーと考えられるもので、長さ4.2cm、最大幅3.6cmを測り、重さ8.9gを量る。半面上部のみに剥離調整が施されており、下部及びもう半面は剥離面のままである。このことから未製品の可能性もあるが、下縁部は細かな調整剥離によって刃部を作りだしており、スク



第22図 遺物実測図7



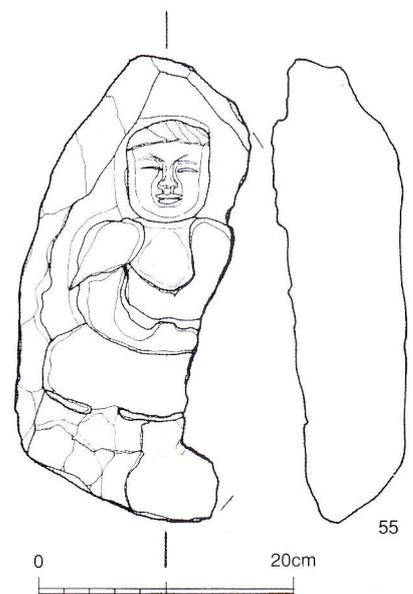
第23図 遺物実測図8

レイパーとしての機能を果たしていたと考えられる。A区の第3層から出土した。

52はSK-3から出土した叩石と考えられるものであり、長さ13.4cm、幅5.9cm、厚さ3.9cmを測り、重さ440gを量る。L字状を呈する砂岩の河原石を使用し、石材の側面には敲打痕が、両端には不定方向の擦痕が認められる。53もSK-3から出土したもので、砥石として二次的に使用されたものである。弧状を呈した一面には、不定方向の擦痕が確認される。本来の形状、用途は不明だが、残存形態から推して直径12.6cmの円柱状のものが復元される。石材は砂岩である。

54はチャート製の火打石である。石材の稜線は、火打金による不定方向の打撃により細かく潰れている。一辺1.5~2.0cmの三角形を呈し、重さ2.04gを量る。C区の第2層から出土した。

55はSK-3から出土した石仏で、単尊仏の阿弥陀如来像と考えられる。高さ36.5cm、残存幅16.7cm、厚さ10.0cmを測る。砂岩の自然石を使用し、ノミによる細かな敲打によって像を浮き彫りにする。あぐらを組んだ膝までの表現で、小溝を穿つことにより基部との境を表現している。全体的

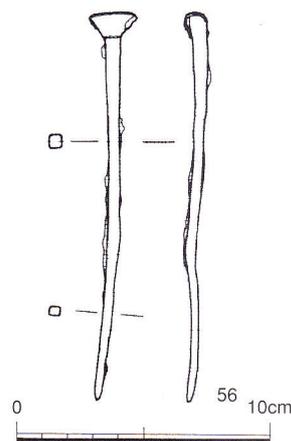


第24図 遺物実測図9

に風化が著しいため定印や顔立ちなどの詳細は不明であるが、袈裟、光背が表現されるなど、比較的写実的である。

(6) 金属製品 (第25図56)

56はA区のSK-6から出土した鉄釘である。全長15.3cm、厚さ0.5cmを測るもので、頭部は厚さ約1mmの鉄板を折り返してつくっている。形態から江戸時代のもと考えられる。



第25図 遺物実測図10

【註記】

- (1) 森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開 — 神出古窯址群を中心に —」『研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年
- (2) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- (3) 間壁忠彦・間壁霞子「備前焼研究ノート」1～5 『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18 倉敷考古館 1966～68、84年
- (4) 『西大寺防災施設工事発掘調査報告書』 西大寺 1990年

7.まとめ

(1) 神前遺跡の範囲確認調査成果

神前遺跡は、従前弥生時代として周知されていた遺跡であったが、平成8年度に行った第1次調査の結果、弥生時代の遺構以外に鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、江戸時代初頭の溝などの良好な遺構を検出し、中世から近世にかけての集落遺跡として新たな成果を得ている。しかし、弥生時代における集落の実態については明らかにされていない。

今回の第3次調査では、まず遺跡の東方への広がりの確認を目的としたA区において、3面の遺構面を検出し、良好な遺構が明らかに東方へ広がることを確認した。特に、第3遺構面では弥生時代前期末から中期初頭の水田跡を検出し、弥生時代集落の生産域であったことが明らかとなった。

第2遺構面においても弥生時代中期の溝を2条検出し、灌漑的な役割を果たしていた可能性が考えられた。この状況からA区は、弥生時代において集落の縁辺部に位置する微低地に相当するとみられ、近接する周辺の微高地に集落の中心部が存在するものと推察できる。また鎌倉時代から室町時代にかけては、掘立柱建物に伴うとみられるピットを多数検出したことから、集落の範囲内におさまるものとみられ、第1次調査時に検出した集落範囲がA区にまで広がる可能性が指摘できる。

次に、B区では独立丘陵の頂上部に設定した調査区であり、この丘陵上の古墳の有無の確認を目的としたが、地表面から30～50cmの深さで結晶片岩の岩盤となり、丘陵上には古墳が存在しないことが明らかとなった。また、この岩盤直上まで江戸時代の遺物を包含することから、江戸時代に丘陵上において整地が行われたとみられた。

C区は第1次調査地点の成果との関連で、鎌倉時代から江戸時代にかけての屋敷地の西方への展開の確認を目的とした調査区であった。この結果、狭少な範囲ながらタメマス1を検出し、第1次調査地点で検出した屋敷地がC区にまで広がることが明らかとなった。また多量に出土した瓦から周辺に室町時代もしくはそれ以前の瓦葺きの建物が存在したものとみられる。

以上のように、今回の調査において各地点ごとに多くの成果が得られ、遺跡の範囲を含めた今後の対処が急がれるところと思われる。また弥生時代においては、集落の中心部の検出が今後の課題として依然残されている。

(2) A区検出の弥生時代水田について

和歌山県内においてこれまで検出されている水田のなかで最古の例では、北2.6km位置する太田・黒田遺跡の水田であり、弥生時代中期に比定できるものである^(註1)。この水田は、集落の縁辺部に相当する微高地上でもやや低地にあたる西側に位置し、弥生時代中期前葉から中葉にかけての3時期にわたる水田面を検出している。この水田の特徴は、調査区のほぼ中央を東西に貫くN-86°-Wの方向性をもつ幅4m程度のいわゆる大畦畔と大畦畔に直交する南北方向の小畦畔があり、これらの畦畔は、約60cmの床上げにも関わらず3期ともに踏襲されていたとみられている。また、水田に入水する水口が1期と3期ではほぼ同位置であり、水口も踏襲される可能性が高いとみられている。また3期(弥生時代中期中葉)の水田に規模が明確な小区画水田(長辺7.8m、短辺3.3m)が検出されている。

また当遺跡の南4.0km位置する岡村遺跡では、弥生時代後期の水田が検出されている^(註2)。この水田は、弥生時代中期の河道が後期に埋没し、微低地形となったところを後期に水田として開発したものである。水田は4区画の小区画水田が復元され、畦畔で区画された1区画は幅4m、長さ7~8mの単位面積約30㎡が推定されている。

今回のA区において検出した水田区画では、SX-1において幅のみを検出したに過ぎない。このSX-1は、東西5.1m、南北4.0m以上を測るもので、南北幅は不明ながら畦畔を挟んで隣接するSX-2・3などから、これらの水田も小区画水田である可能性が高いものである。この点では、前述の2遺跡検出の水田と類似するものとみられる。

また時期的にはSX-1出土の土器とSX-1の直上に堆積する第3層の出土土器からみて弥生時代前期末から中期初頭の範疇におさまるものであり、前述した太田・黒田遺跡の水田(弥生時代中期前葉)より遡る可能性をもち、これまで検出されているもののなかでは県内最古級の水田であるものとみられる。

【註記】

(1) 『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』 (財)和歌山市文化体育振興事業団 1995年

(2) 『岡村遺跡第2次調査』 『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成9年度— 和歌山市教育委員会 1999年

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちようさがいほう							
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報							
副書名	平成10年度							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	井馬好英・高橋方紀・北野隆亮・川口修実							
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人 和歌山市文化体育振興事業団							
所在地	☎640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 ☎640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にししょういせき 西庄遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 にししょう 西庄	3020150	38	34° 15' 21"	135° 06' 46"	19980415 19980427	45	土砂 採取 作業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西庄遺跡	散布地	古墳時代 奈良時代	土坑、ピット	須恵器・土師器 製塩土器・石器・石製品		滑石製子持 勾玉が出土。		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうざきいせき 神前遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 こうざき 神前	3020150	307	34° 12' 15"	135° 14' 32"	19990125 19990219	70	遺跡 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
神前遺跡	散布地	弥生時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	水田、溝、土坑	弥生土器、土師器 瓦器、瓦、石器、石造物		弥生時代前 期末から中 期初頭の水 田を検出。		

図 版

西庄遺跡 1 ~ 6

神前遺跡 7 ~ 26



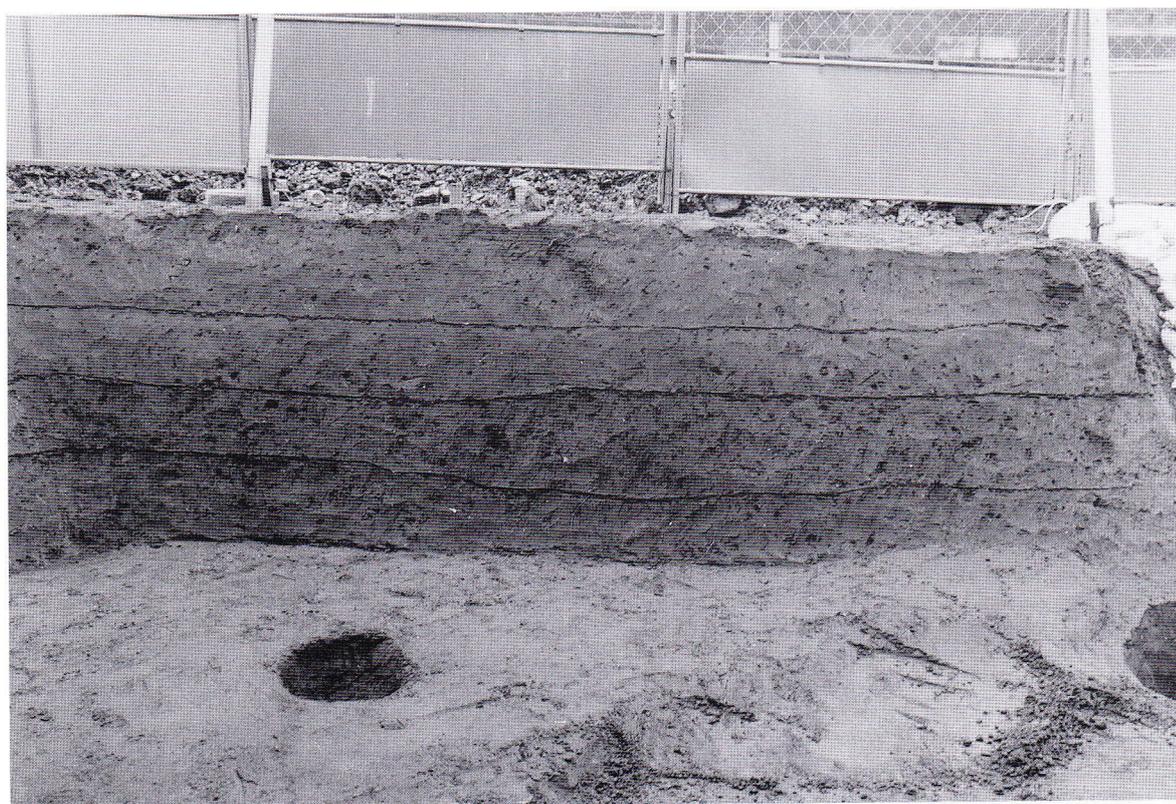
調査前の状況（南から）



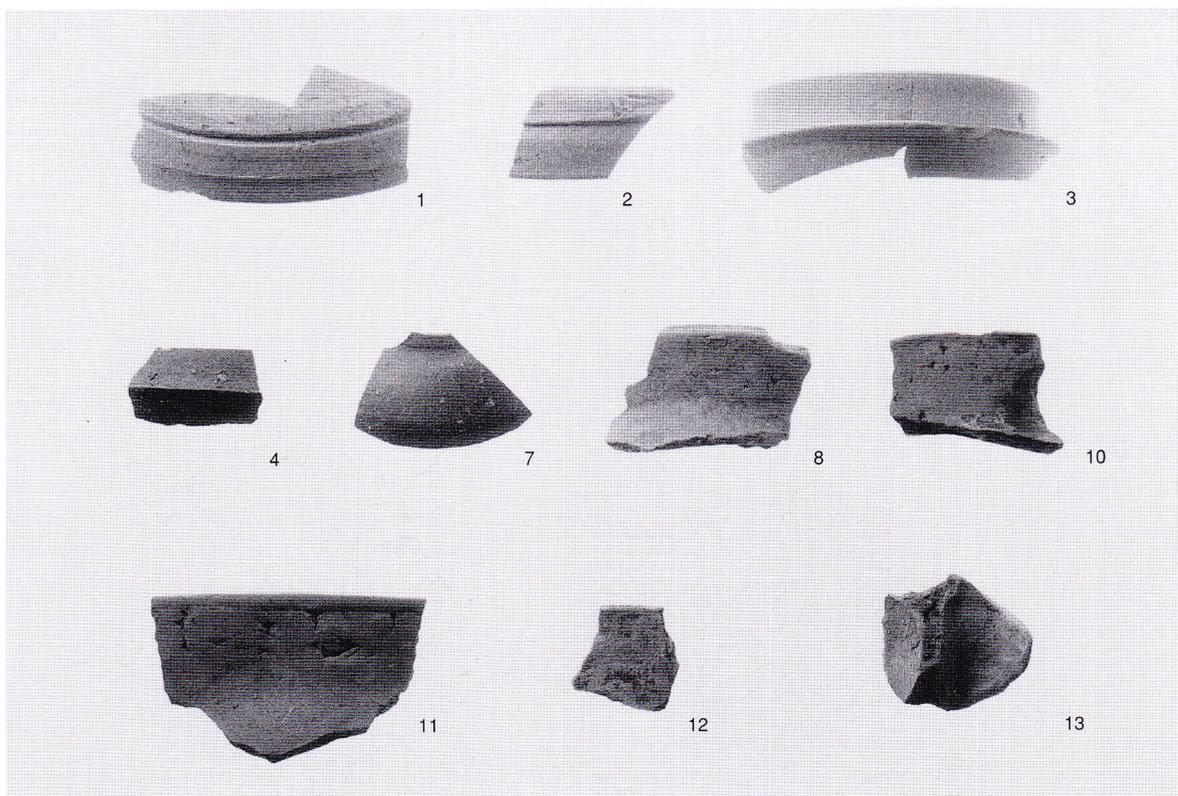
全景（北から）



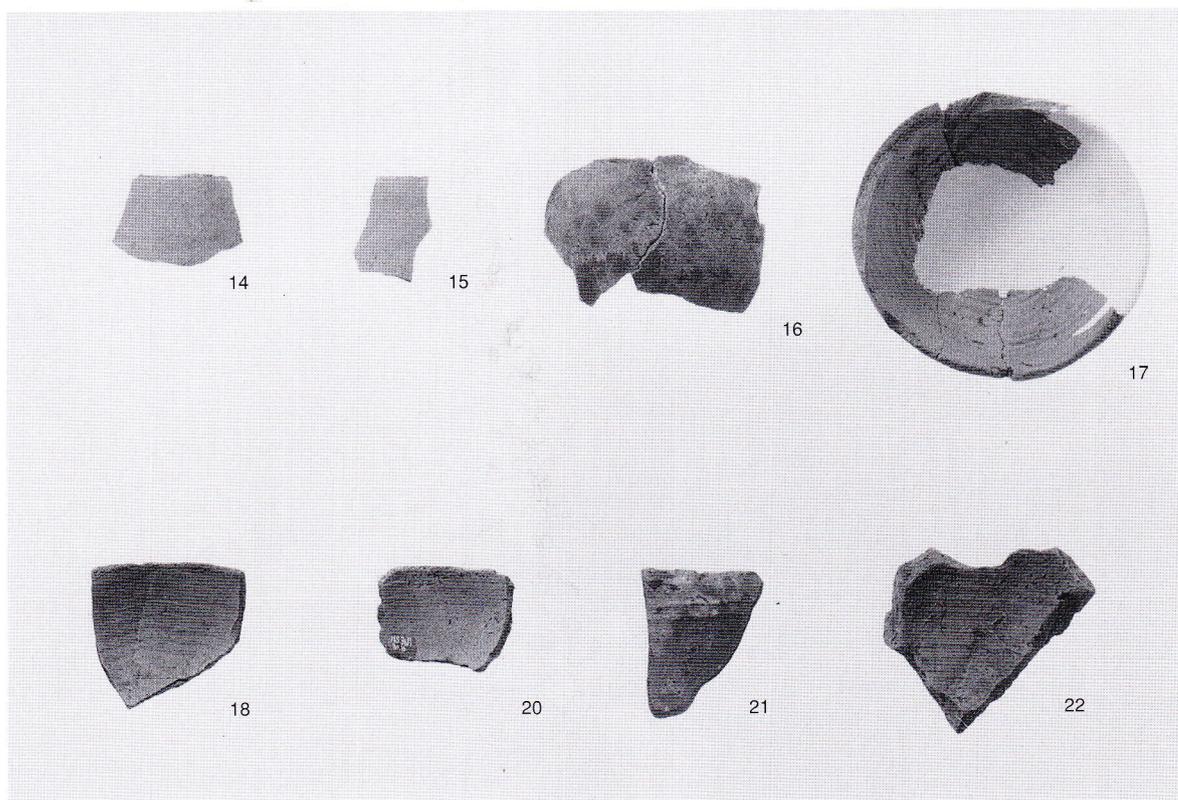
子持勾玉出土状況（西から）



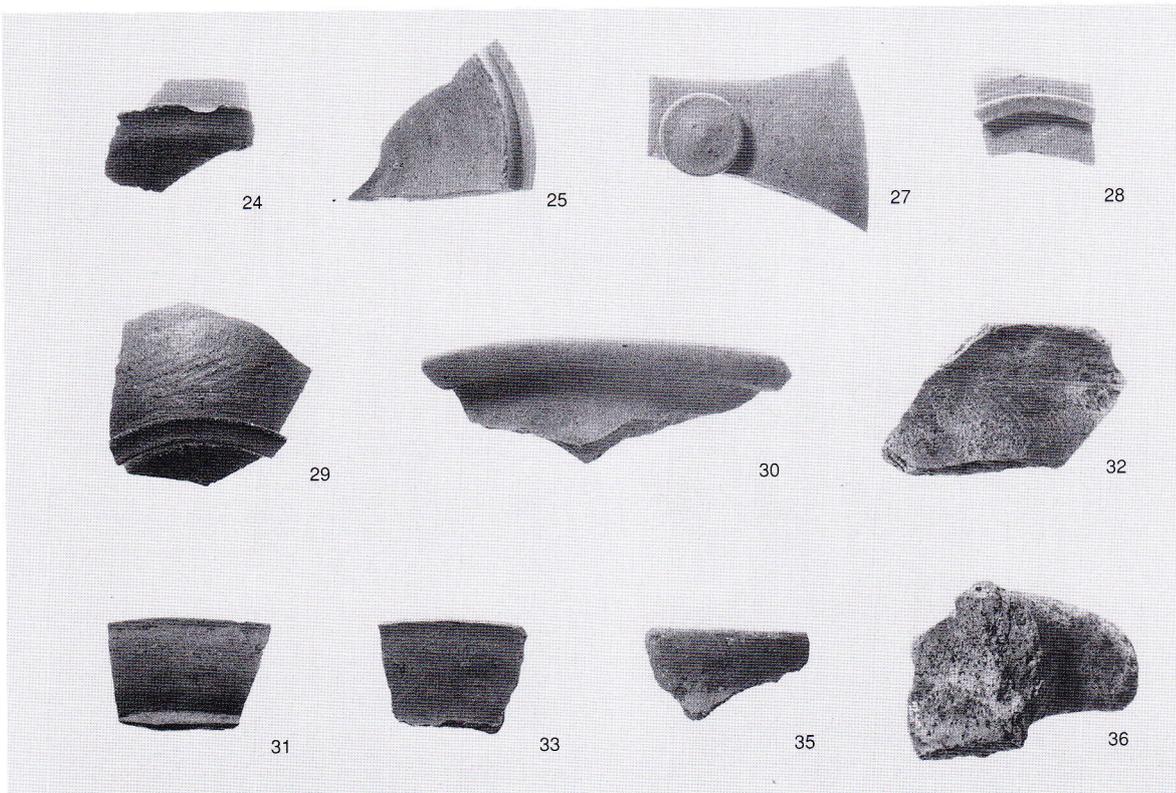
調査地土層堆積状況（北から）



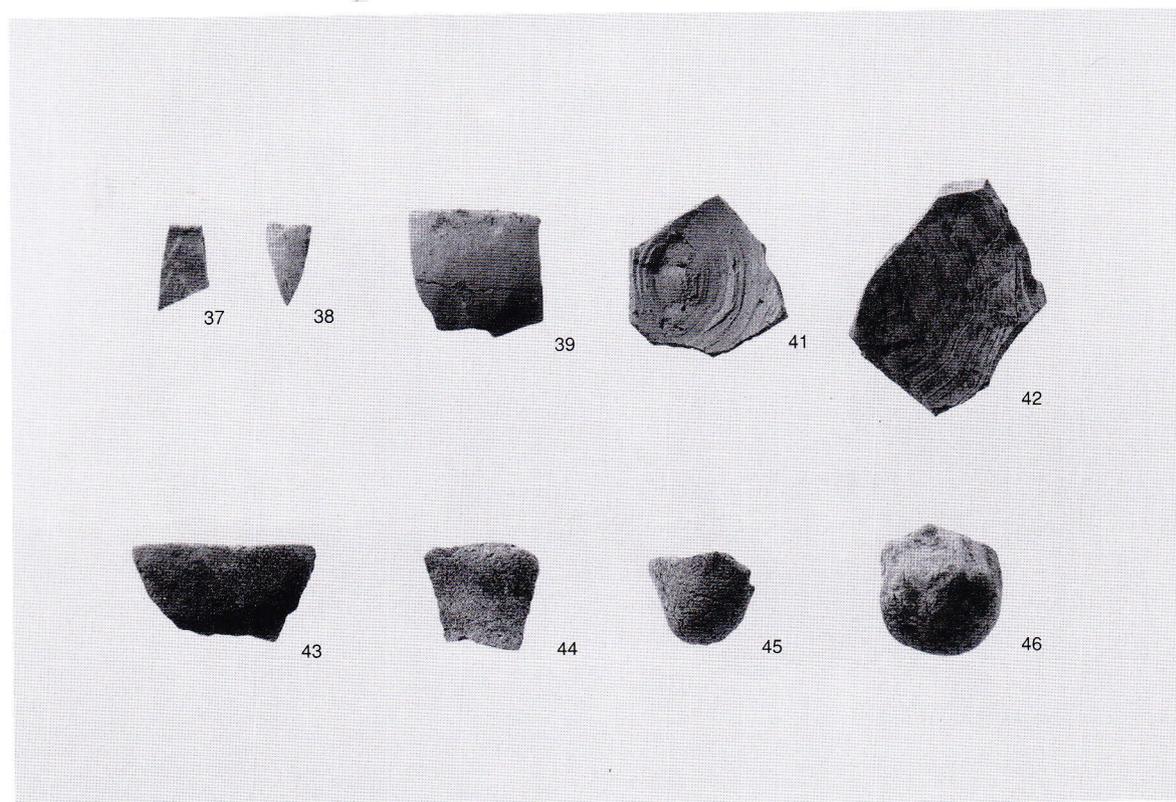
第3b層出土土器 1・2須恵器 杯蓋、3・4須恵器 杯身、7須恵器 短頸壺
8～12土師器 甕、13土師器 鍋



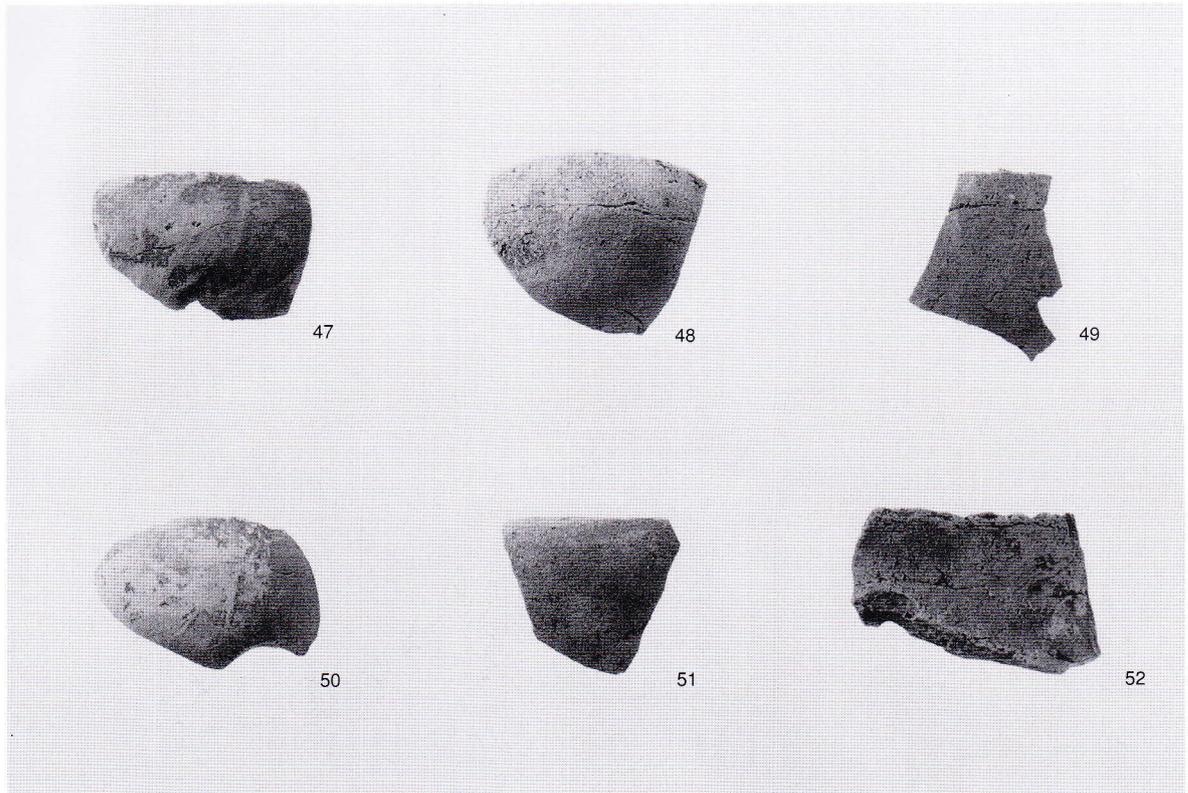
第3b層出土土器 14～18・20～22製塩土器



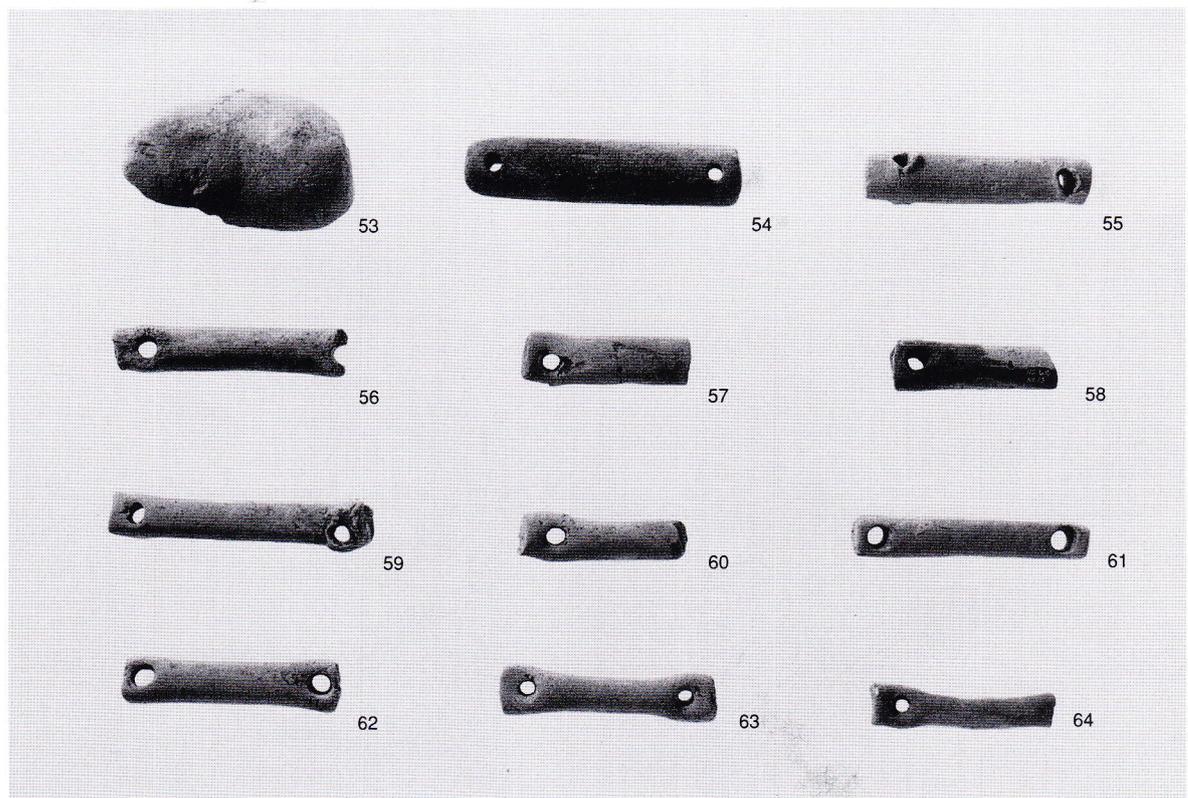
第3a層出土土器 24・25・28須惠器 杯身、27須惠器 杯蓋、29須惠器 壺
30須惠器 甕、31～33・35土師器 甕、36土師器 埴



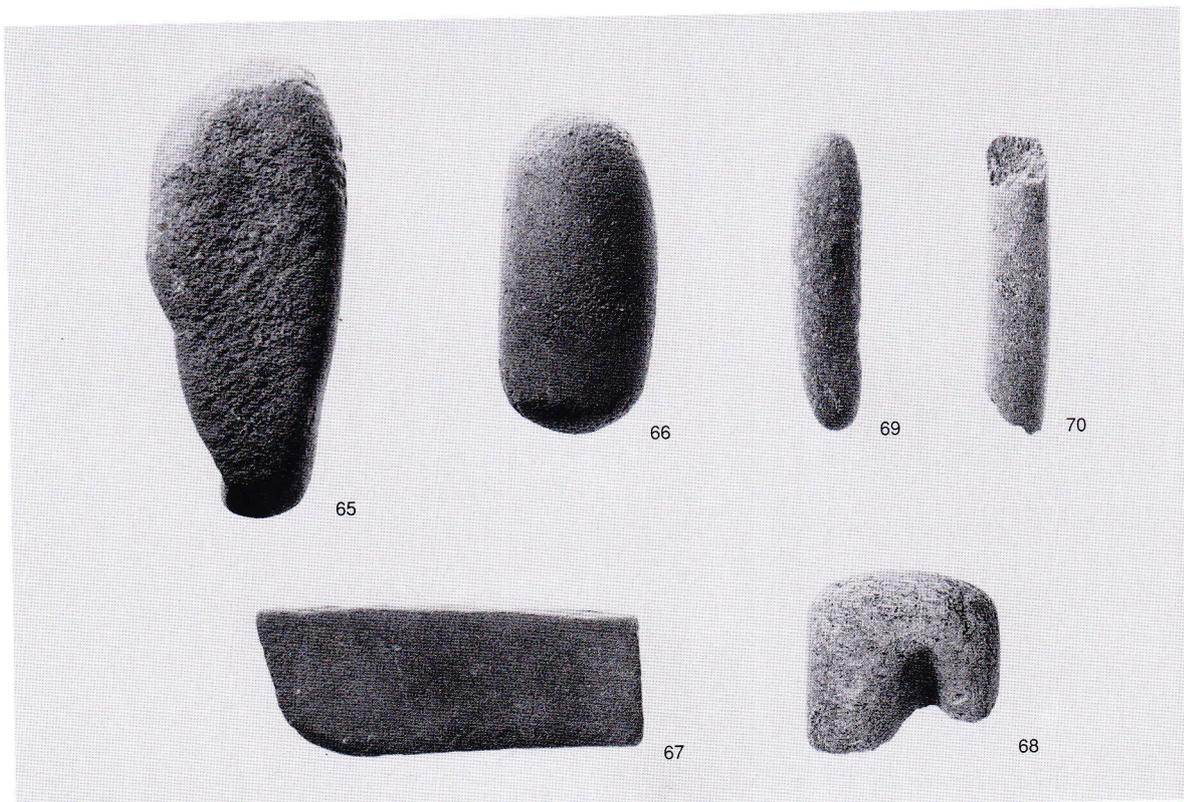
第3a層出土土器 37～39・41～46製塩土器



47～52 製塩土器



53 管状土錘、54～64 有孔土錘



65・66 叩石、67 砥石、68 玉砥石、69・70 棒状石製品



71 子持勾玉 (右面)



同 (背面)



同 (左面)



調査地周辺（東から）



A区 調査前の状況（北東から）

図版 8
神前遺跡
遺構



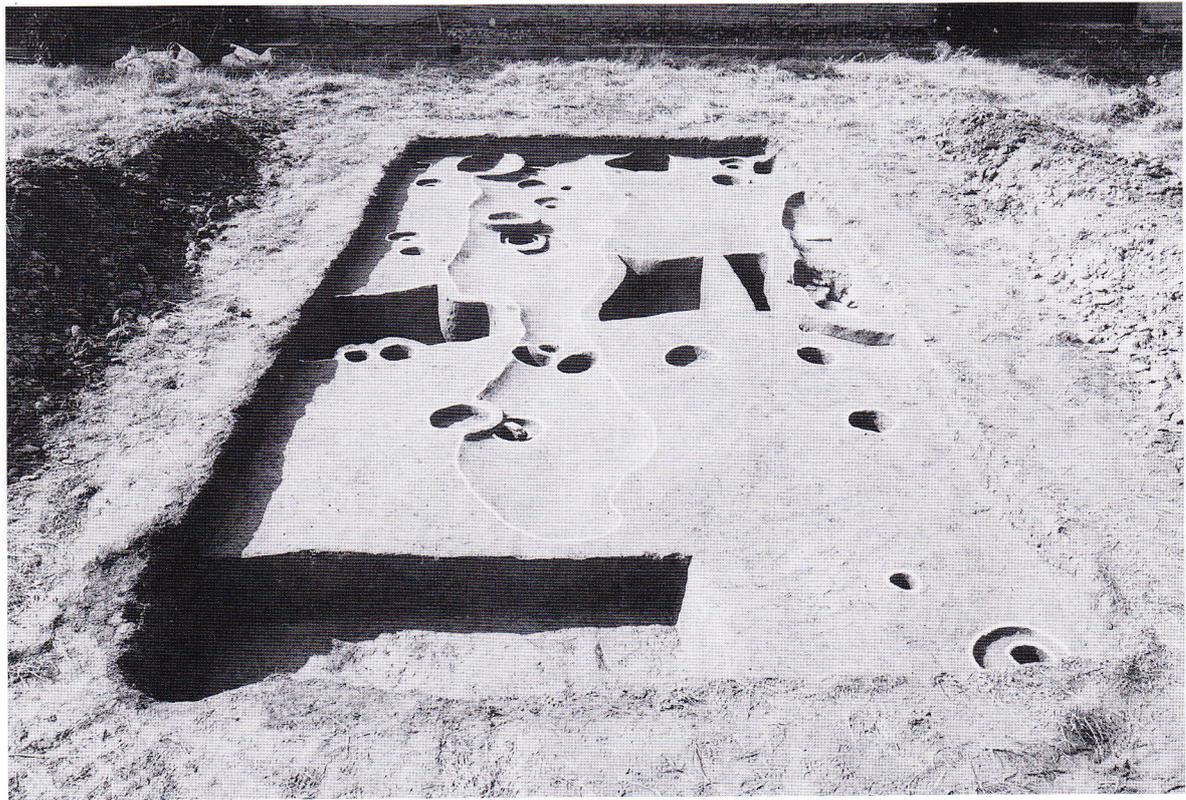
B区 近景（北西から）



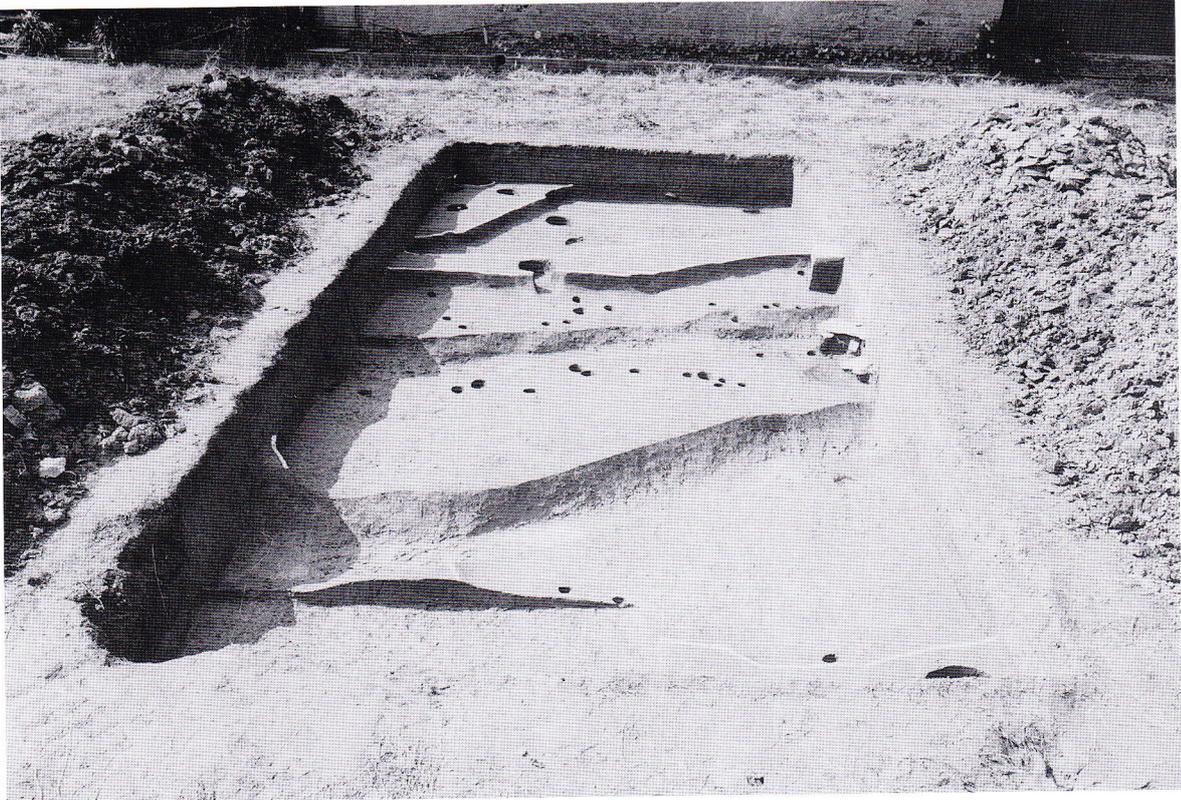
C区 調査前の状況（北から）



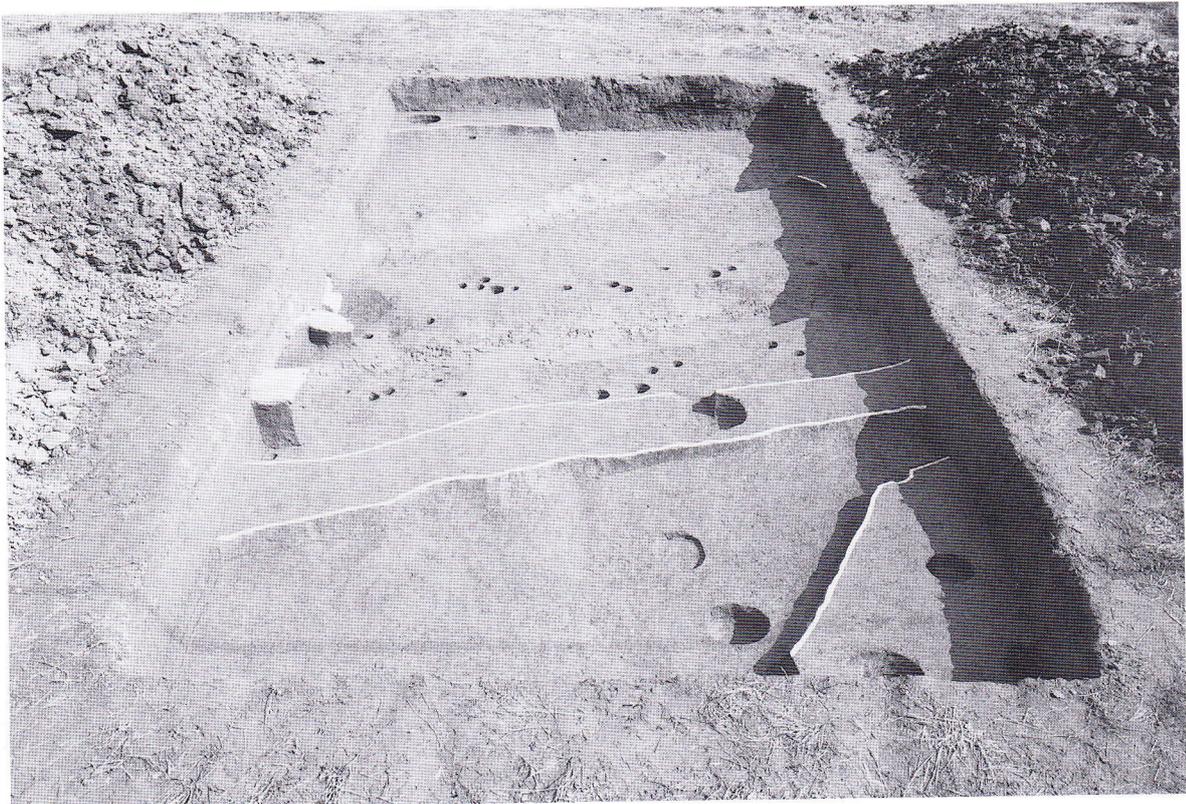
A区 第1・2遺構面 全景（東から）



A区 第1・2遺構面 全景（西から）



A区 第3遺構面 全景（東から）



A区 第3遺構面 全景（西から）



B区 全景 (西から)



B区 全景 (北から)



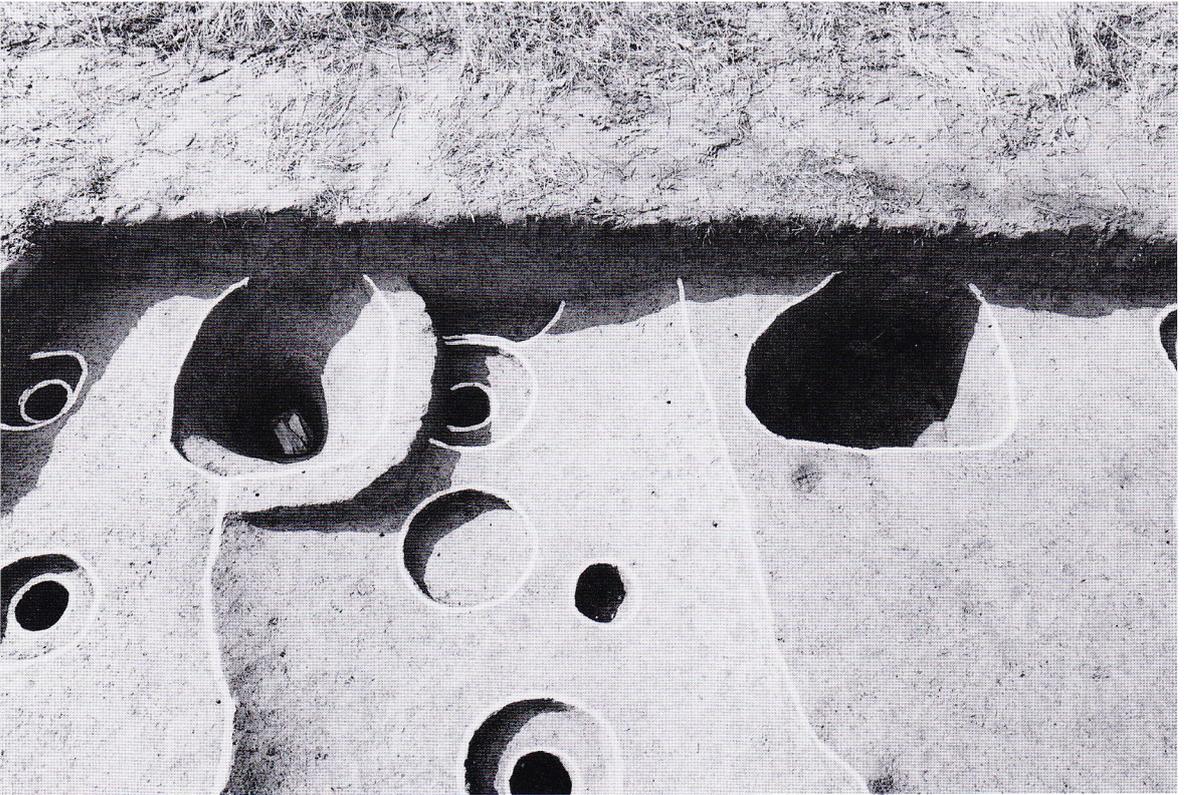
C区 全景（北から）



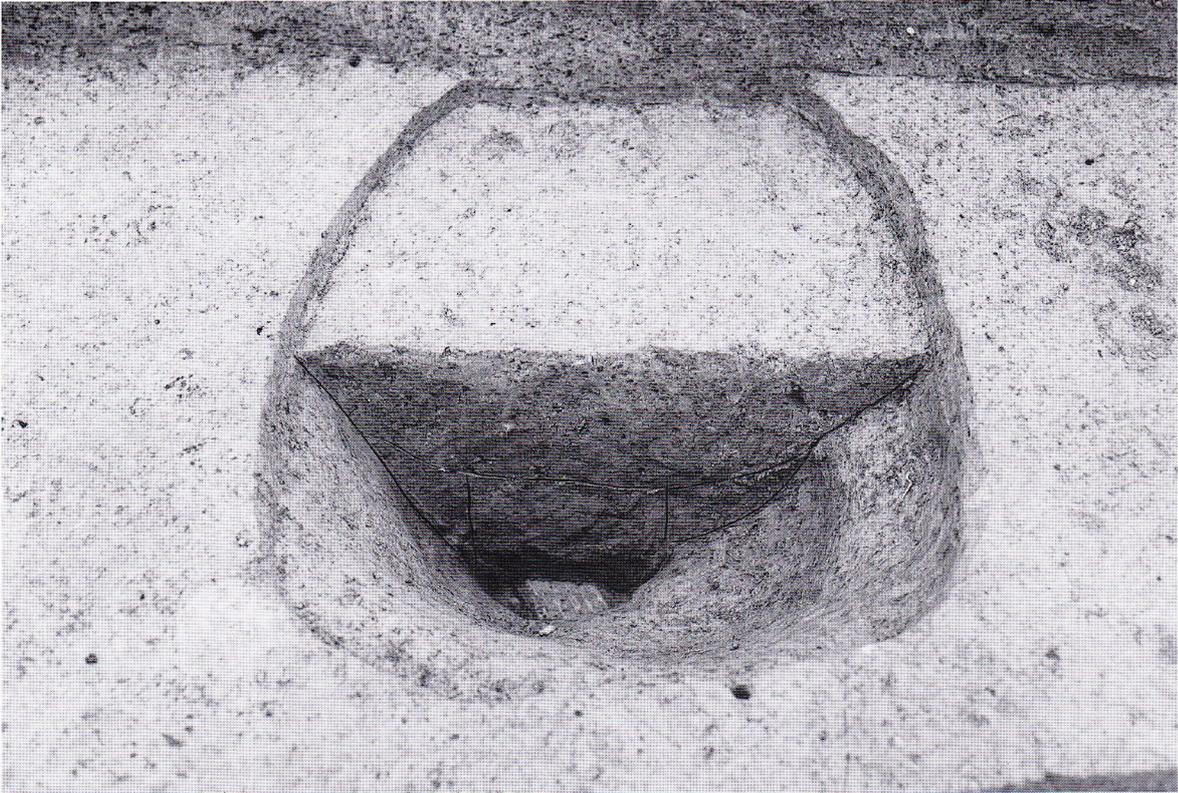
C区 全景（南から）



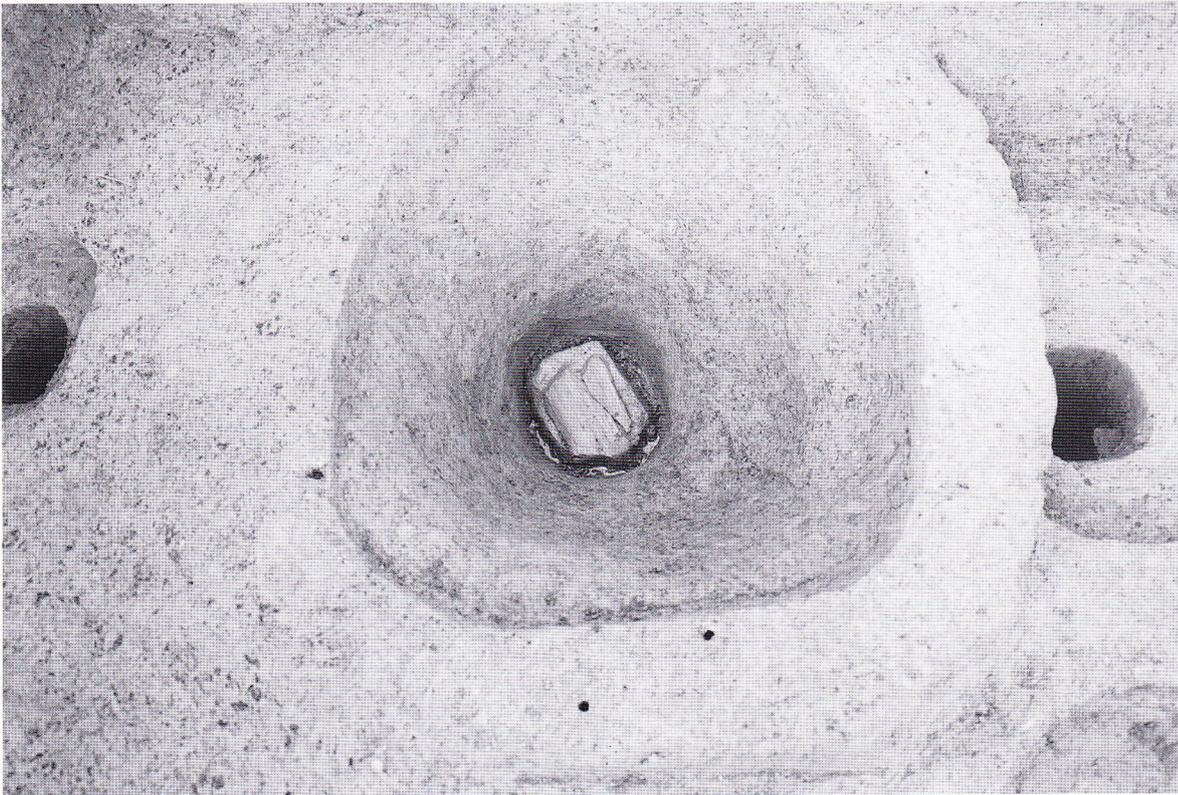
A区 SK-5・6 (南から)



A区 P-25・26 (東から)



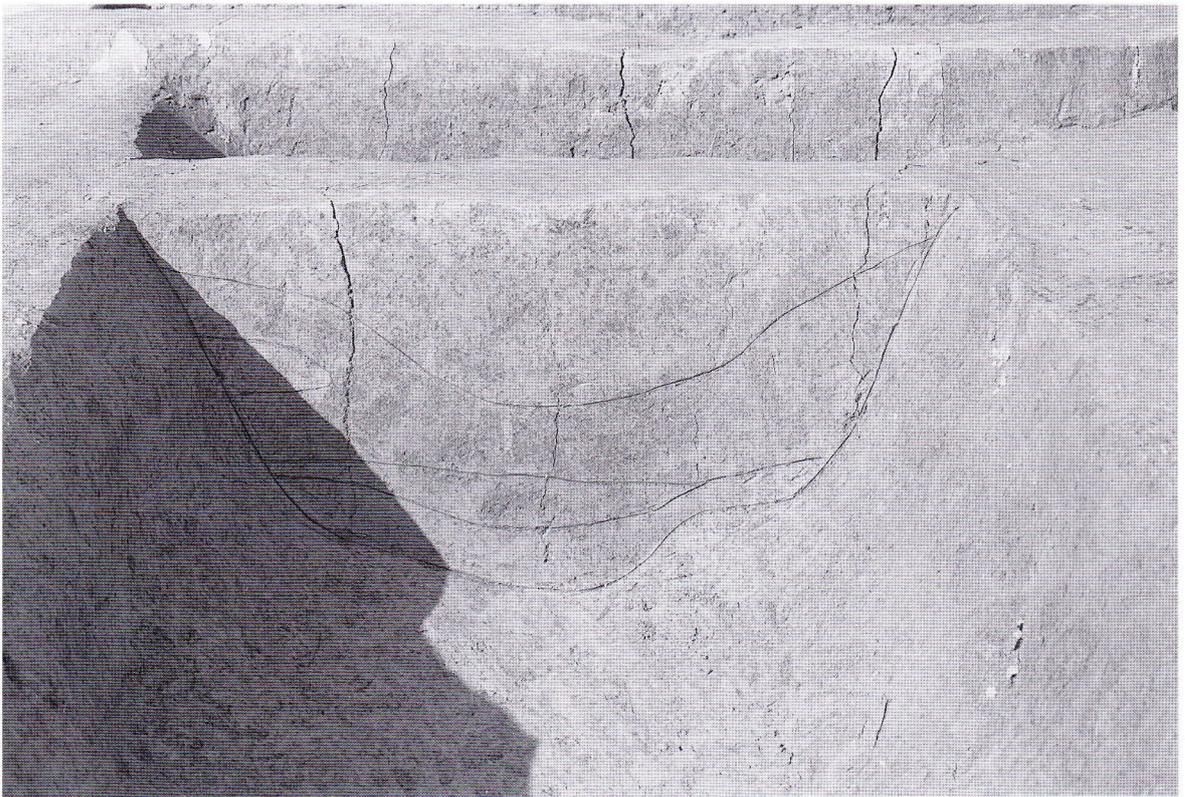
A区 P-26 土層堆積状況 (東から)



A区 P-26 (東から)



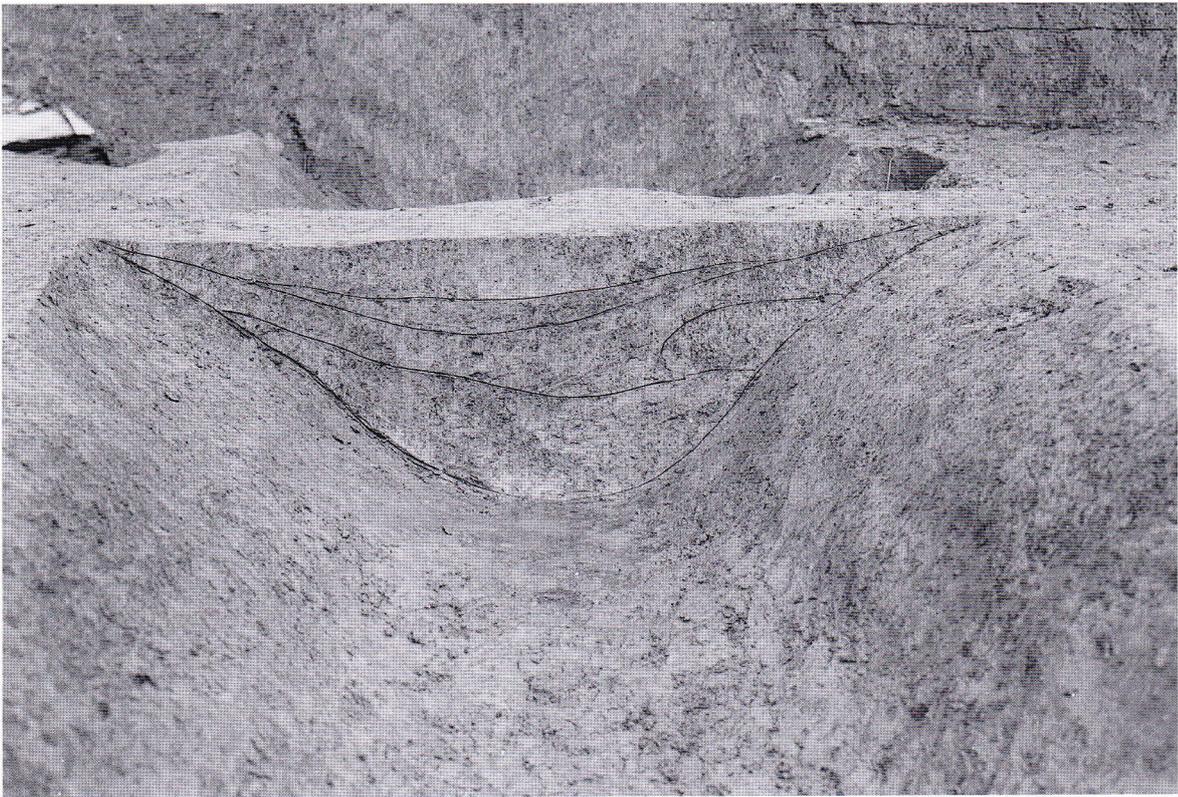
A区 SD-2 (南から)



A区 SD-2 土層堆積状況 (南から)



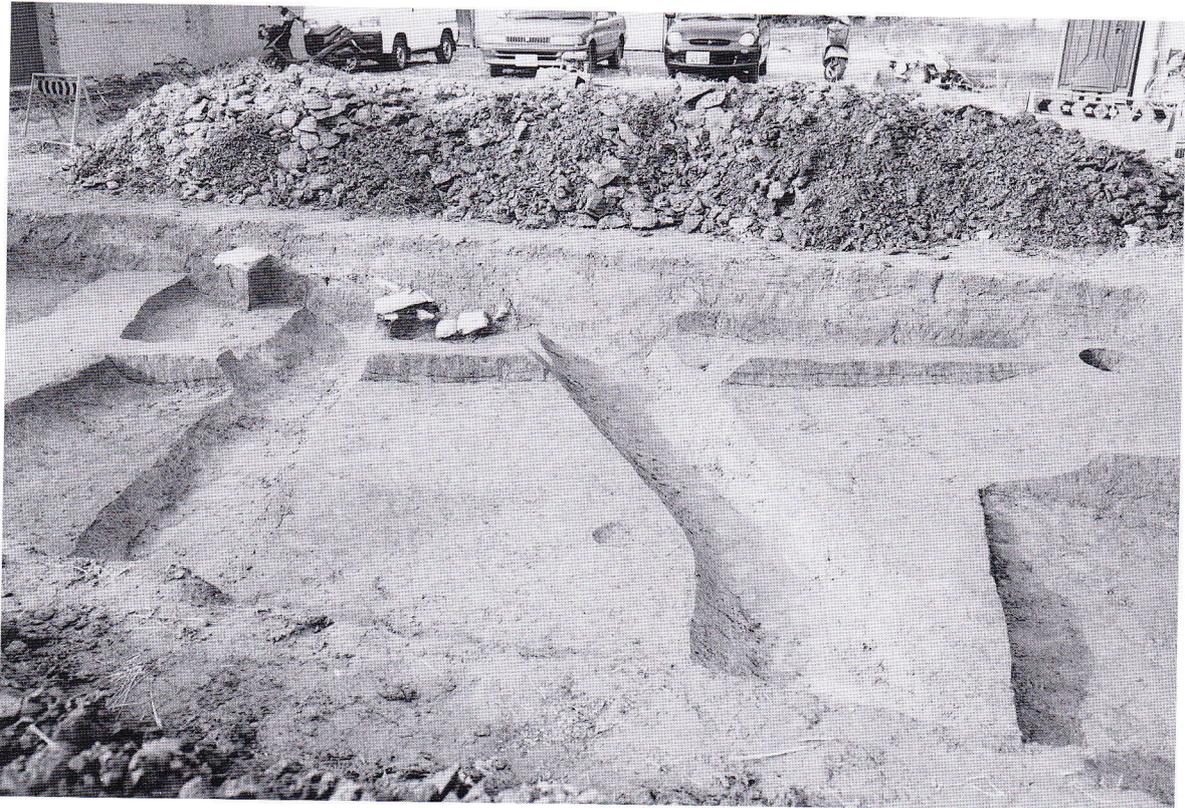
A区 SD-3 (南東から)



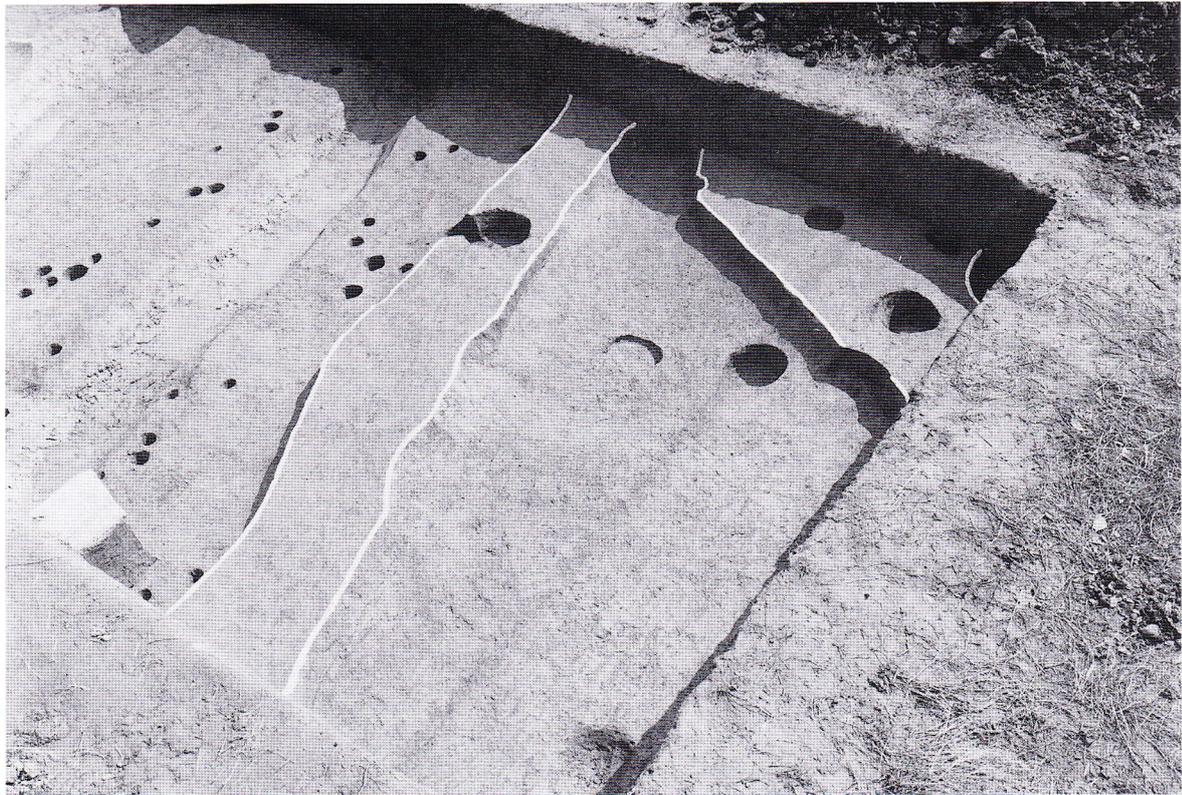
A区 SD-3 土層堆積状況 (南東から)



A区 SX-1 (北から)



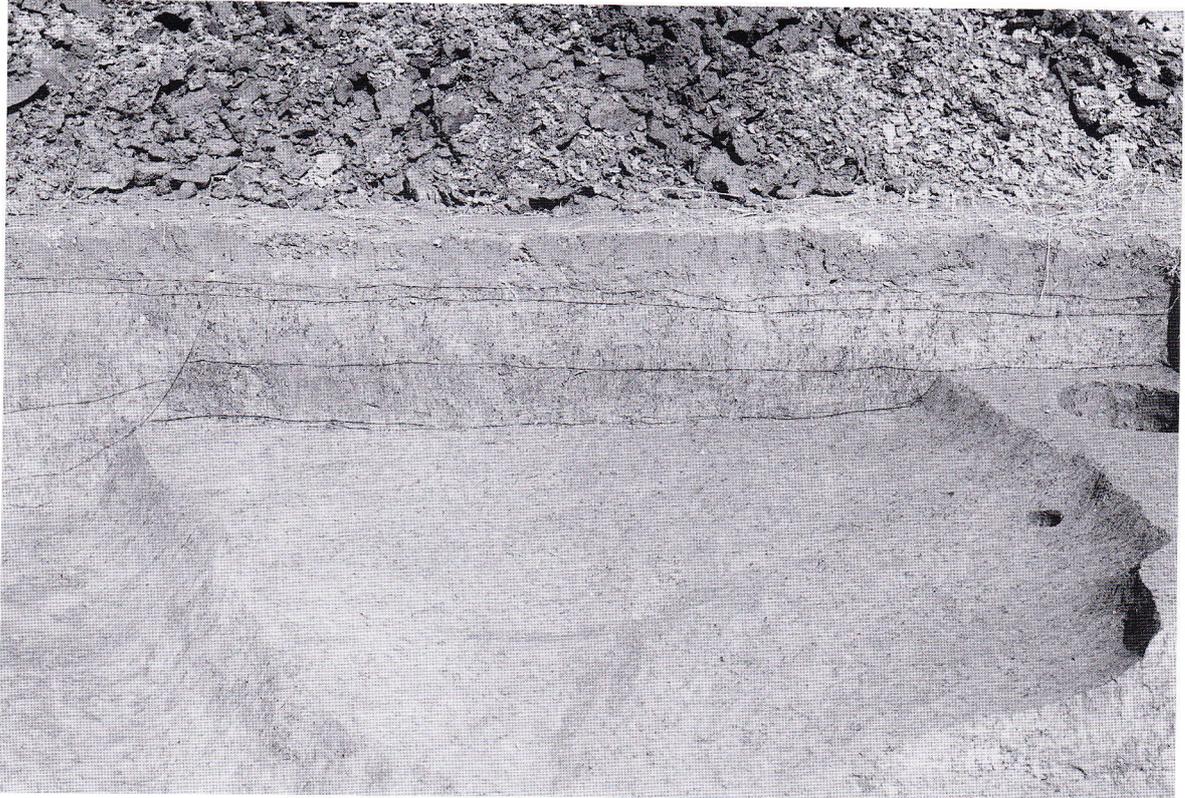
A区 SX-1 土層堆積状況 (南から)



A区 SX-2 (北西から)



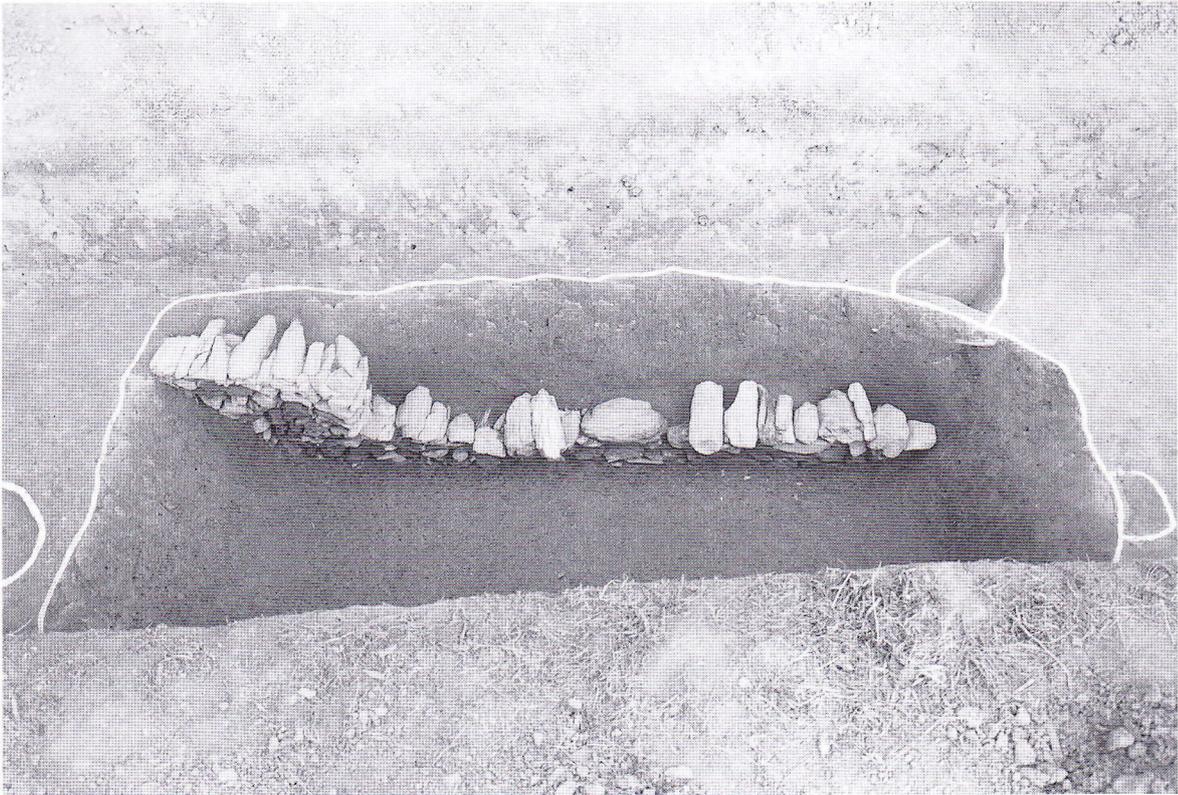
A区 SX-2 土層堆積状況 (南東から)



A区 北壁土層堆積状況（南から）



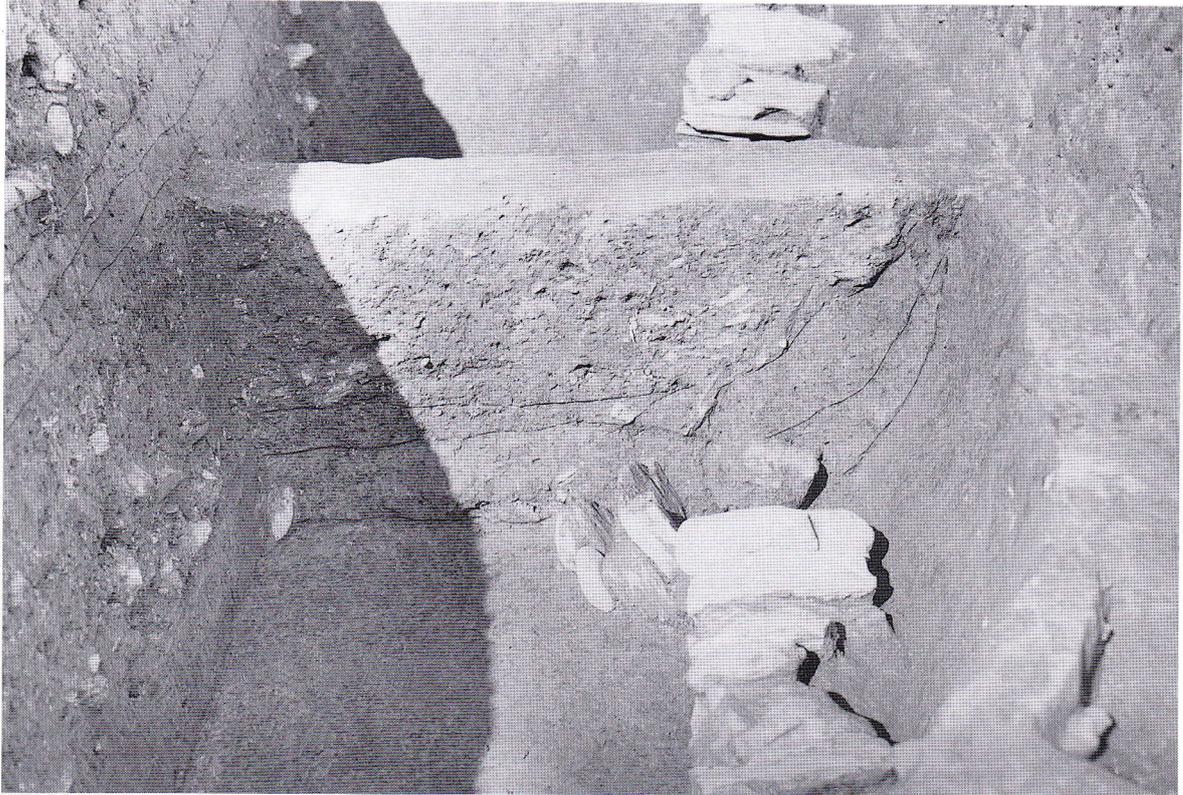
B区 北壁土層堆積状況（南から）



C区 SK-3 (西から)



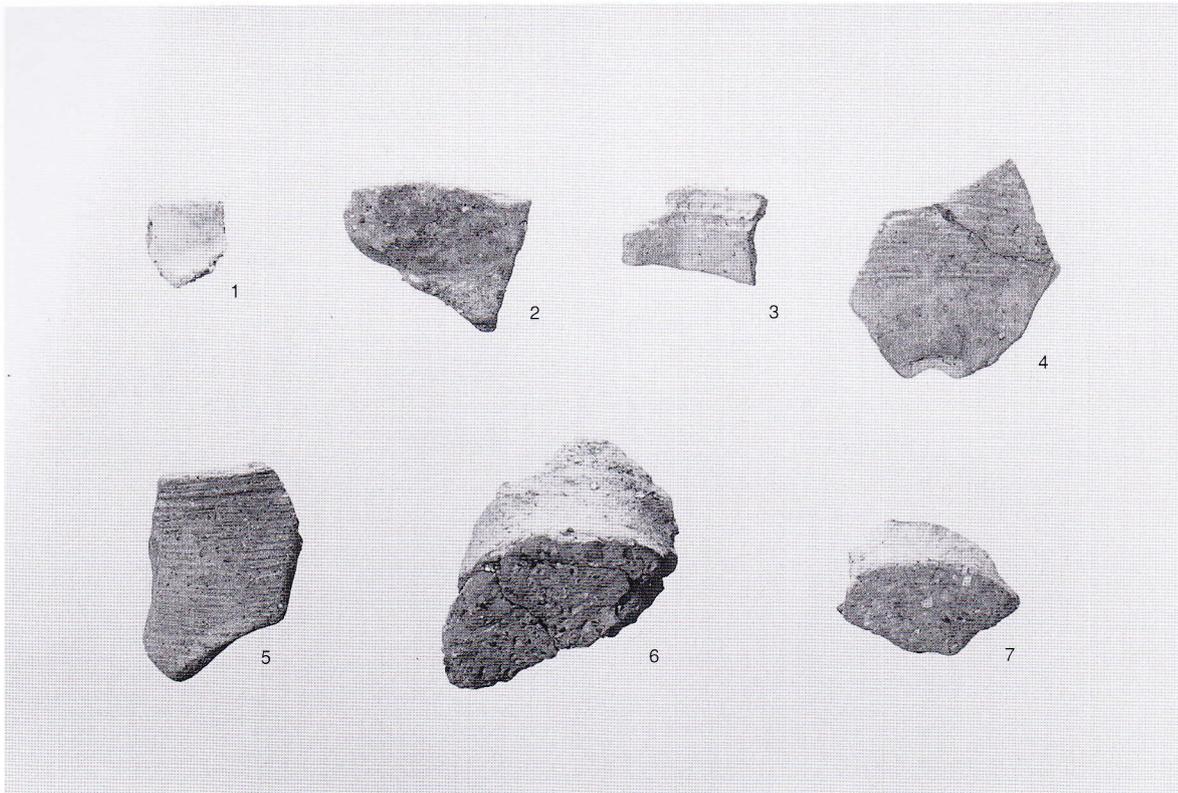
C区 SK-3 石積状況 (西から)



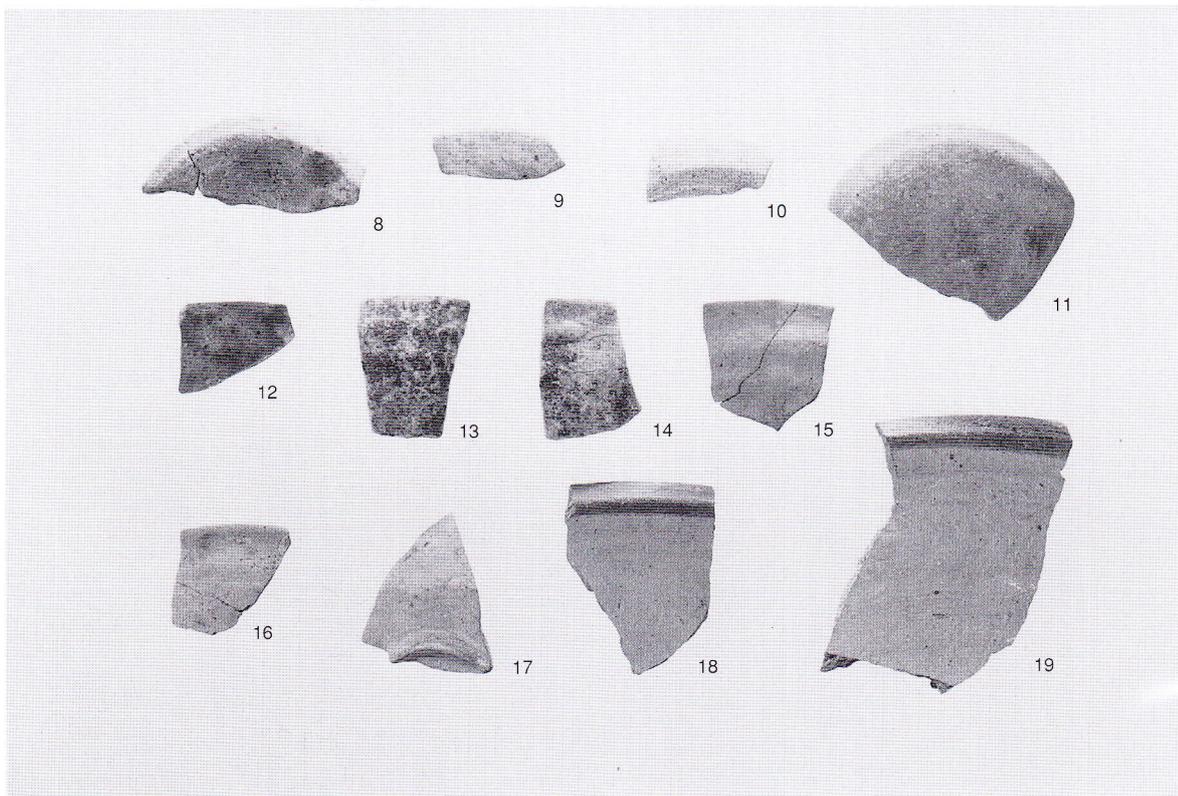
C区 SK-3 土層堆積状況（南から）



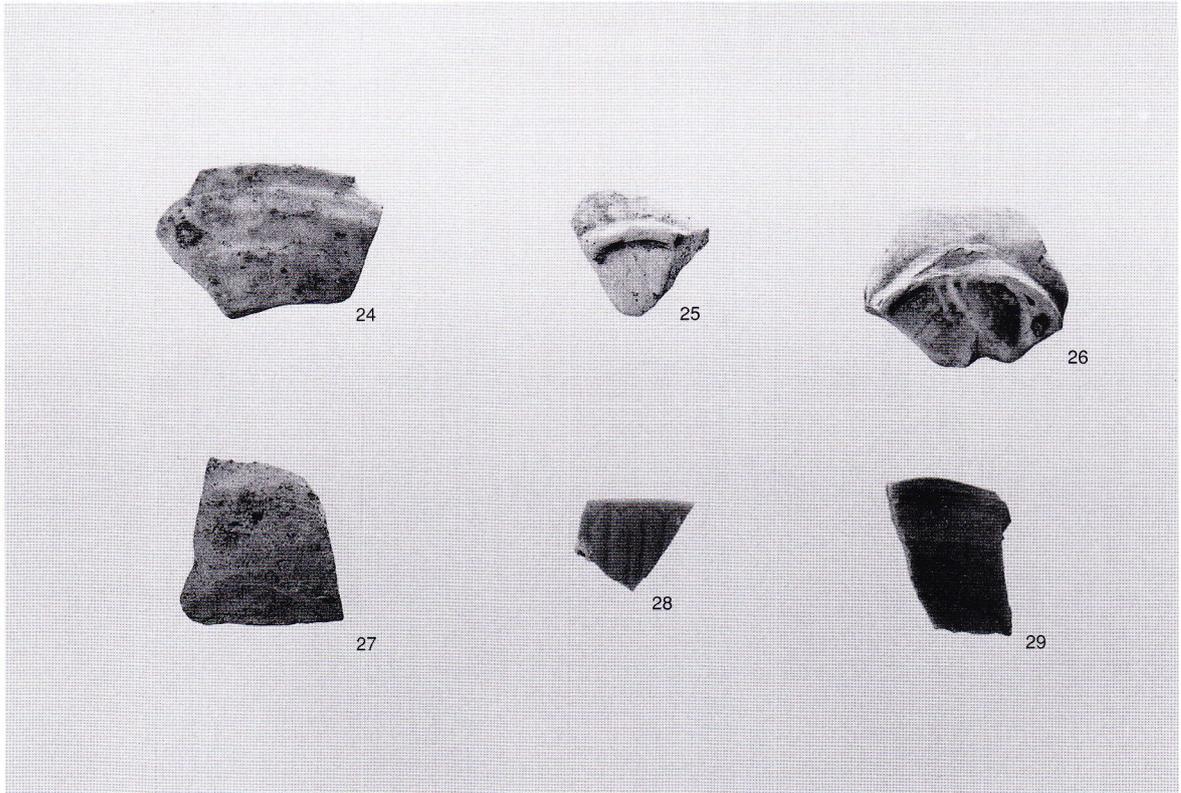
C区 西壁土層堆積状況（東から）



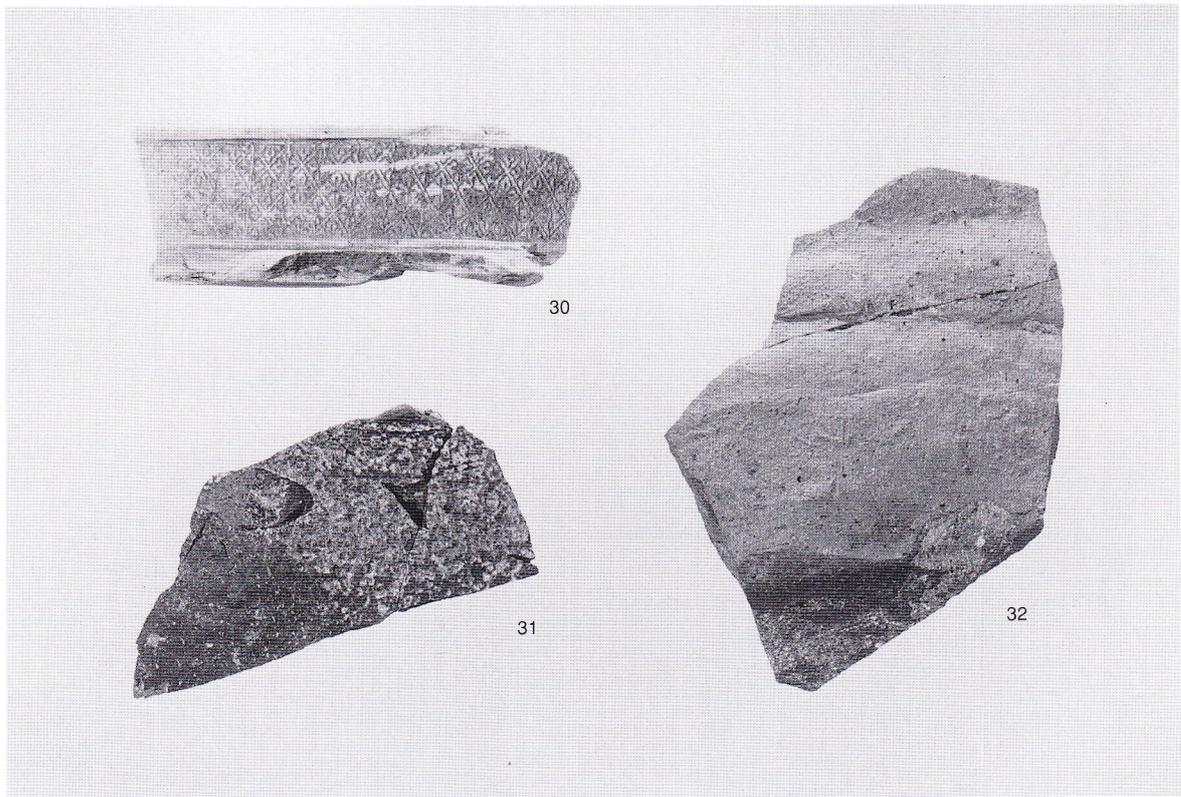
1～5 弥生土器 壺、6・7 弥生土器底部



A区出土土器 8～10 土師器皿、11 瓦器皿、12～17 瓦器椀
18・19 東播系須恵器 こね鉢



C区SK-3出土土器 24~27 瓦器碗 28 中国製青磁碗
C区第3層出土土器 29 中国製青磁盤



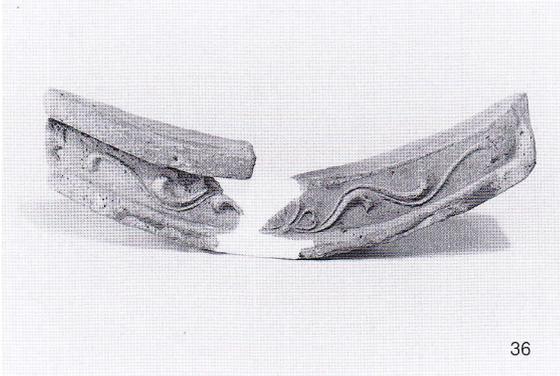
C区SK-3出土土器 30 瓦質土器火鉢、31 備前焼壺、32 備前焼甕



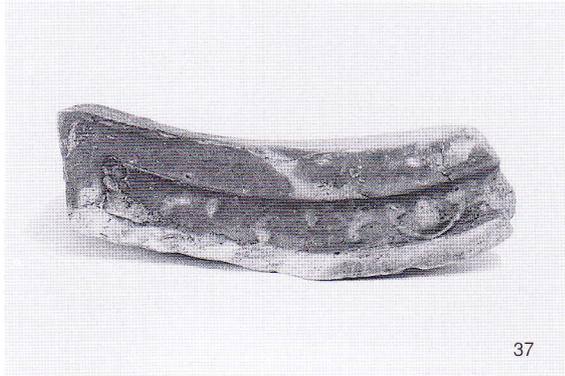
C区SK-3出土瓦 33 軒丸瓦



C区SK-3出土瓦 35 軒平瓦



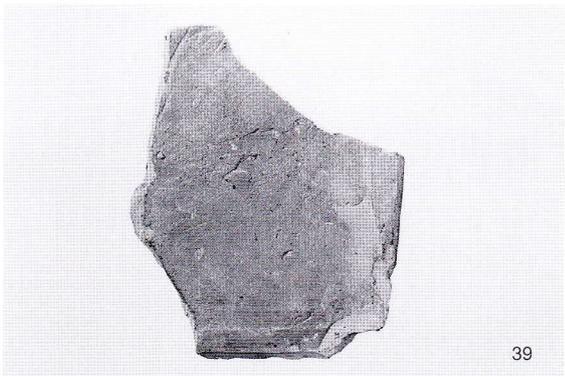
C区SK-3出土瓦 36 軒平瓦



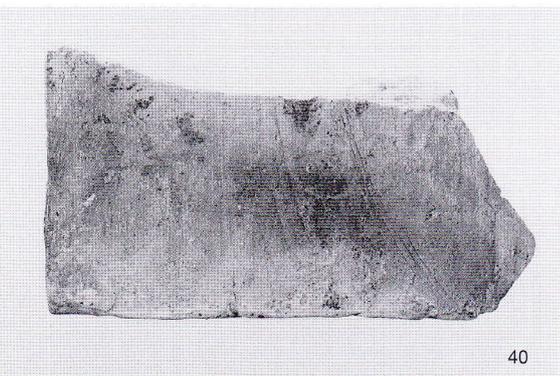
C区SK-3出土瓦 37 軒平瓦



C区SK-3出土瓦 38 丸瓦 (凹面)



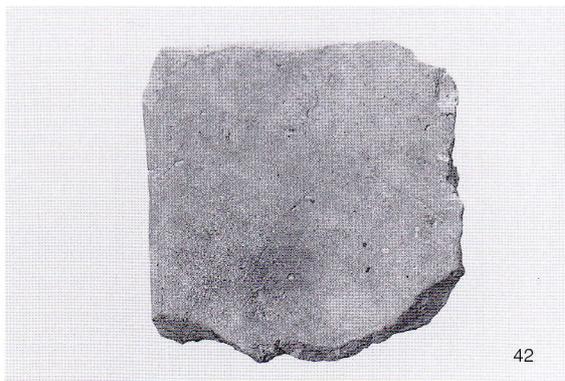
C区SK-3出土瓦 39 平瓦 (凹面)



C区SK-3出土瓦 40 平瓦 (凸面)



C区SK-3出土瓦 41 平瓦 (凹面)



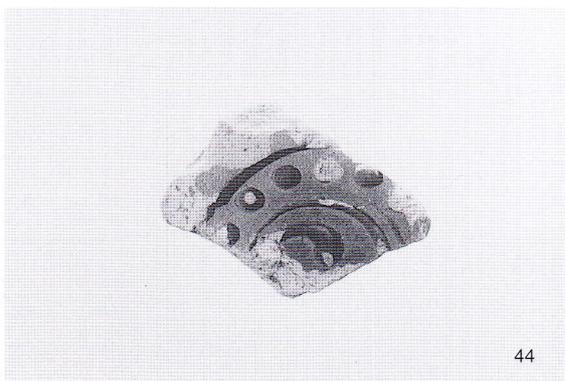
42

C区SK-3出土瓦 42平瓦(凹面)



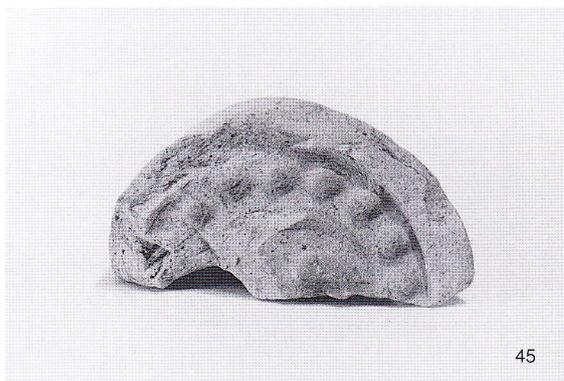
43

C区SK-3出土瓦 43雁振瓦(凹面)



44

B区第1層出土瓦 44軒丸瓦



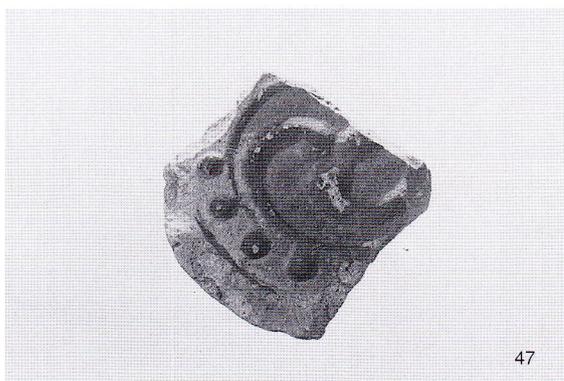
45

C区第2層出土瓦 45軒丸瓦



46

C区第3層出土瓦 46軒丸瓦



47

C区第3層出土瓦 47軒丸瓦



49

C区第3層出土瓦 49軒平瓦

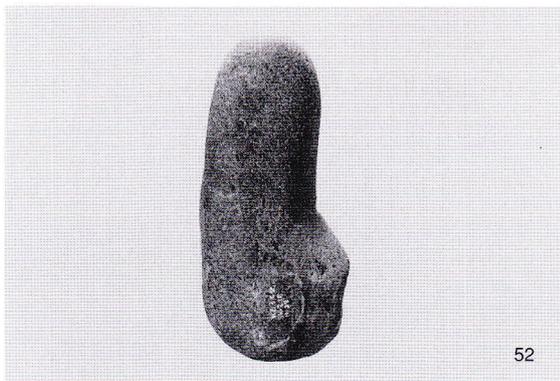


50

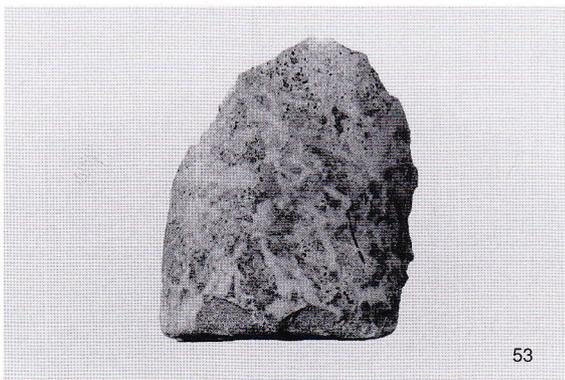
C区第3層出土瓦 50滴水瓦



A区第3層出土遺物 51 スクレイパー



C区SK-3出土遺物 52 叩石



C区SK-3出土遺物 53 砥石



C区第2層出土遺物 54 火打石



C区SK-3出土遺物 55 石造物 (正面)



同 (側面)



平成12年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成10年度 —

編集 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 2000